

福岡市埋蔵文化財調査報告書第457集

下月隈天神森遺跡III

——都市計画道路福岡空港線・高木下月隈線建設に伴う埋蔵文化財調査——

下月隈B遺跡2・3次調査

下月隈C遺跡1次調査

板付遺跡66次調査

1 9 9 6

福岡市教育委員会

下月隈天神森遺跡III

——都市計画道路福岡空港線・高木下月隈線建設に伴う埋蔵文化財調査——

下月隈B遺跡2・3次調査

下月隈C遺跡1次調査

板付遺跡66次調査



1 9 9 6

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸との交流が盛んで多くの文化遺産を私たちにもたらしています。アジアの交流拠点都市を目指して都市形成が行なわれ空港、港湾施設をはじめ多くの諸施設の拡充に努めているところです。さらなる国際化を目指している福岡市で昨年夏に若人の祭典、ユニバーシアード福岡大会が開催され多くの人々に感動を与えてくれました。市民と世界各国の若人との交流も盛んで、国際都市「福岡」の新たな幕開けとなりました。

今回調査を行ないました遺跡は大会の主会場となりました平尾競技場へ至るアクセス道路の建設に伴い実施したものであります。大陸からもたらされた稻作農耕文化の発祥の地である板付遺跡に隣接しほぼ同時期の遺跡で、当時の大陸との交流を彷彿させるものであります。弥生時代の前期の遺跡で検出されましたのは木棺墓と甕棺墓であります。木棺墓は丘陵の裾部に二列に埋葬され、壺が副葬されていました。甕棺墓にも壺が副葬されているものもあります。総数で44基の甕棺墓の中で大部分が前期前半のものでこの時期の甕棺は10基前後の墓地群であるのが一般的であります、当時の集落の大きさを表しているものでしょう。

最後になりましたが発掘調査、整理に際しまして土木局の関係者及び地元の人々のご理解とご協力を得まして報告書を刊行することができました。ここに感謝の意を表すると共に、本書が文化財保護や普及、教育などに活用していくだければ幸いです。

平成8年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花剛

例　　言

1. 本書は都市計画道路福岡空港線、高木下月隈線建設に伴い発掘調査を実施した福岡市博多区の天神森遺跡3次、下月隈B遺跡群2、3次、下月隈C遺跡群1次、板付遺跡66次調査の報告書である。
2. 発掘調査は土木局の依頼を受け福岡市教育委員会が以下の通り実施した

下月隈天神森遺跡3次調査	1994.5.10～7.15	調査担当者	松村道博　白井克也
下月隈B遺跡群2次調査	1994.4.1～5.10	〃	白井克也
下月隈B遺跡群3次調査	1994.7.5～8.20	〃	佐藤一郎　松村道博
下月隈C遺跡群1次調査	1994.4.8～6.27	〃	白井克也
板付遺跡66次調査	1994.6.1～8.30	〃	白井克也

3. 本書に使用した遺構、遺物の実測、製図は各調査担当者の他天神森遺跡3次、下月隈B遺跡群2次調査は濱石正子、施養久美子が行なった。
4. 本書に使用した写真は各調査担当者が撮影した。
5. 本書に使用する方位は全て磁北である。
6. 本書の執筆は各調査担当者が行なった。
7. 本書に関する実測図、写真などの記録、及び遺物類は平成8年度に福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
8. 本書に関するデーターは以下の通りである。

天神森3次調査

調査番号	9413	遺跡略号	STM-3
調査地籍	福岡市博多区下月隈地内	分布地図番号	10(東部I)
開発面積	15,330m ² 対象面積 1,100m ²	調査面積	865m ²
調査期間	1994.5.10～7.15		

下月隈B跡群2次調査

調査番号	9402	遺跡略号	SIIIB-2
調査地籍	福岡市博多区下月隈地内	分布地図番号	10(東部I)
開発面積	15,330m ² 対象面積 1,500m ²	調査面積	1097m ²
調査期間	1994.4.1～5.10		

下月隈B遺跡群3次調査

調査番号	9430	遺跡略号	SIIIB-3
調査地籍	福岡市博多区下月隈地内	分布地図番号	10(東部I)
開発面積	9,400m ² 対象面積 2,400m ²	調査面積	596m ²
調査期間	1994.7.5～8.20		

下月隈C遺跡群1次調査

調査番号	9404	遺跡略号	SHC-1
調査地籍	福岡市博多区下月隈地内	分布地図番号	10(東部I)
開発面積	9,400m ² 対象面積 2,000m ²	調査面積	885m ²
調査期間	1994.4.8～6.27		

板付遺跡群66次調査

調査番号	9424	遺跡略号	ITZ-66
調査地籍	福岡市博多区板付2丁目・3丁目地内	分布地図番号	24(東部I)
開発面積	7,900m ² 対象面積 2,500m ²	調査面積	545m ²
調査期間	1994.6.1～8.30		

本文目次

I.はじめに	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 遺跡の立地と環境	3
II. 遺跡各説	
天神森遺跡 3次調査	
1. 調査の概要	9
2. 墓棺墓の調査	9
3. 木棺墓の調査	44
4. 土壙の調査	61
5. その他の遺構	65
6. 小結	69
下月限B遺跡群 2次調査	
1. 調査の概要	75
2. 遺構各説	
(1) 井戸の調査	77
(2) 土壙の調査	77
3. 小結	80
下月限B遺跡群 3次調査	
1. 調査の概要	83
2. 遺構と遺物	
(1) 検出遺構	83
1) 井戸	83
2) 土壙	83
3) 据立柱建物	83
4) 杭列	88
(2) 出土遺物	88
3. 小結	94
下月限C遺跡群 1次調査	
1. 調査の概要	97
2. I区の遺構・遺物－居住地区－	98
(1) 据立柱建物跡 (SB)	98
(2) ピット (SP)	100
3. II区の遺構・遺物－遺跡東端－	103

(1) 清状遺構 (SD)	103
(2) 土坑 (SK)	106
(3) ピット (SP)	106
4. III区の遺構・遺物－集落外－	106
(1) 土坑 (SK)	106
(2) ピット (SP)	108
5. 小結	108

板付遺跡第66次調査

1. 調査の概要	111
2. 層位と旧地形	114
3. 出上遺物	114
4. 小結	114

挿 図 目 次

Fig. 1 周辺遺跡分布図	2
Fig. 2 調査地点及び周辺地形図	4

下月限天神森遺跡 3次調査

Fig. 3 遺構全休図 (1/200)	7
Fig. 4 1~3号甕棺墓実測図 (1/20)	10
Fig. 5 2・3号甕棺墓実測図 (1/8)	11
Fig. 6 4~6号甕棺墓実測図 (1/20)	12
Fig. 7 4~6号甕棺墓実測図 (1/8)	13
Fig. 8 7~8号甕棺墓実測図 (1/20)	14
Fig. 9 7~8号甕棺、8号甕棺墓副葬壺実測図 (1/8・1/3)	15
Fig. 10 9~11~13号甕棺墓実測図 (1/20)	16
Fig. 11 9~11~13号甕棺墓実測図 (1/8)	18
Fig. 12 14~17号甕棺墓実測図 (1/20)	20
Fig. 13 14~17号甕棺、16号甕棺墓副葬壺実測図 (1/8・1/3)	22
Fig. 14 18~21号甕棺墓実測図 (1/20)	24
Fig. 15 18~21号甕棺墓実測図 (1/8)	26
Fig. 16 22~24・26号甕棺墓実測図 (1/20・1/30)	27
Fig. 17 22~24号甕棺墓実測図 (1/8・1/12)	28
Fig. 18 25号甕棺墓実測図 (1/30)	29
Fig. 19 25号甕棺墓実測図 (1/12)	30
Fig. 20 27~31号甕棺墓実測図 (1/20)	32
Fig. 21 27~31号甕棺墓実測図 (1/8)	34
Fig. 22 32~35号甕棺墓実測図 (1/20)	35
Fig. 23 32~34号甕棺、27・30・33号甕棺墓副葬壺実測図 (1/8・1/3)	36

Fig. 24	36~38号甕棺墓実測図 (1/20)	37
Fig. 25	35~38号甕棺・38号甕棺墓副葬壺実測図 (1/8・1/3)	38
Fig. 26	39~44号甕棺墓実測図 (1/20)	40
Fig. 27	39~44号甕棺実測図 (1/8)	41
Fig. 28	3号木棺墓実測図 (1/30)	44
Fig. 29	4・9号木棺墓実測図 (1/30)	45
Fig. 30	11~13号木棺墓実測図 (1/30)	46
Fig. 31	14・15号木棺墓実測図 (1/30)	47
Fig. 32	17号木棺墓実測図 (1/30)	48
Fig. 33	18~21号木棺墓実測図 (1/30)	49
Fig. 34	23・24号木棺墓実測図 (1/30)	50
Fig. 35	25・26号木棺墓実測図 (1/30)	51
Fig. 36	27・28・30号木棺墓実測図 (1/30)	52
Fig. 37	32~34号木棺墓実測図 (1/30)	53
Fig. 38	木棺墓出土副葬壺実測図(1) (1/3)	54
Fig. 39	木棺墓出土副葬壺実測図(2) (1/3)	55
Fig. 40	木棺墓出土副葬壺実測図(3) (1/3)	56
Fig. 41	木棺墓出土副葬壺実測図(4) (1/3)	57
Fig. 42	1号土壙、出土土器実測図 (1/30・1/3)	61
Fig. 43	2・5~7号土壙実測図 (1/30)	62
Fig. 44	10号土壙実測図 (1/30)	63
Fig. 45	土壤出土土器実測図 (1/3)	64
Fig. 46	1号竪穴実測図 (1/60)	65
Fig. 47	溝・掘立柱建物実測図 (1/60)	66
Fig. 48	竪穴・SX-2・3・溝出土土器実測図 (1/3)	67
Fig. 49	甕棺墓・木棺墓配置図 (1/200・1/6)	68
Fig. 50	甕棺変遷図 (1/16)	69

下月限B遺跡群2次調査

Fig. 51	遺構全体図 (1/200)	73
Fig. 52	1号井戸及び出土土器実測図 (1/60・1/3)	75
Fig. 53	1・2・4・5号土壙実測図 (1/30・1/60)	76
Fig. 54	1・4号土壙出土遺物実測図 (1/3)	77
Fig. 55	3号土壙、2号溝実測図 (1/30・1/80)	78
Fig. 56	2・4号溝、ピット出土土器実測図 (1/3)	79

下月限B遺跡群3次調査

Fig. 57	周辺地形図 (1/1,000)	84
Fig. 58	遺構配置図 (1/300)	85
Fig. 59	井戸実測図 (1/40)	86
Fig. 60	土壤実測図 (1/40)	87
Fig. 61	掘立柱建物・土壤実測図 (1/100・1/40)	88

Fig. 62	杭列柱実測図 (1/40)	89
Fig. 63	SE01出土土器実測図 (1/4・1/8)	91
Fig. 64	SE02・04・SK03・10・Pit06出土土器実測図 (1/4)	92
Fig. 65	出土石製器・土製品・鉄製品実測図 (1/2)	93
下月隈C遺跡群1次調査		
Fig. 66	下月隈C遺跡調査地点 (1/5000)	97
Fig. 67	調査区配置図 (1/600)	98
Fig. 68	I区実測図 (1/125)	99
Fig. 69	SB-01実測図 (1/40)	100
Fig. 70	出土遺物 1 (1/6・1/4・1/2)	101
Fig. 71	II区実測図 (1/125)	102
Fig. 72	出土遺物 2 (1/3)	103
Fig. 73	出土遺物 3 (1/4・1/2・2/3)	105
Fig. 74	出土遺物 4 (1/4・1/2・2/3)	106
Fig. 75	III区実測図 (1/125)	107
板付遺跡66次調査		
Fig. 76	板付遺跡調査地点 (1/5000)	111
Fig. 77	調査区平面実測図 1 (1/100)	112
Fig. 78	調査区平面実測図 2 (1/100)	113
Fig. 79	出土遺物 (1/4)	114

図 版 目 次

下月隈天神森遺跡3次調査

PL. 1	(1) 調査区全景 (北西より)	(2) 調査区北東部遺構群 (南より)
PL. 2	(1) 西拡張区全景 (南西より)	(2) 4号甕棺墓 (南西より)
PL. 3	(1) 3号甕棺墓 (北西より)	(2) 7号甕棺墓 (南西より)
	(3) 8号甕棺墓 (南西より)	(4) 9号甕棺墓 (南西より)
	(5) 11号甕棺墓 (南西より)	(6) 13号甕棺墓 (南西より)
PL. 4	(1) 14号甕棺墓 (北東より)	(2) 15号甕棺墓 (東より)
	(3) 16号甕棺墓 (東より)	(4) 18号甕棺墓 (北より)
	(5) 20号甕棺墓 (北より)	(6) 23号甕棺墓 (南より)
PL. 5	(1) 24号甕棺墓 (南より)	(2) 27号甕棺墓 (北西より)
	(3) 29号甕棺墓 (北東より)	(4) 30号甕棺墓 (東より)
	(5) 31号甕棺墓 (北東より)	(6) 33号甕棺墓副葬壺
PL. 6	(1) 木棺墓群 (南東より)	(2) 3号木棺墓上面 (南西より)
	(3) 3号木棺墓先掘状況 (南西より)	
PL. 7	(1) 4号木棺墓上面 (南西より)	(2) 4号木棺墓下面 (南西より)
	(3) 9号木棺墓先掘状況 (南西より)	

- PL.8 (1) 17号木棺墓（南西より） (2) 18・20号木棺墓（南西より）
(3) 28号木棺墓（南西より）
- PL.9 (1) 18号～21号木棺墓（南西より） (2) 26号木棺墓（南西より）
(3) 34号木棺墓（南西より）
- PL.10 (1) 3号壺棺上蓋 (2) 3号壺棺下蓋 (3) 4号壺棺上蓋
(4) 4号壺棺下蓋 (5) 5号壺棺上蓋 (6) 5号壺棺下蓋
- PL.11 (1) 6号壺棺上蓋 (2) 6号壺棺下蓋 (3) 7号壺棺上蓋
(4) 7号壺棺下蓋 (5) 7号壺棺副葬壺 (6) 9号壺棺下蓋 (7) 9号壺棺上蓋
- PL.12 (1) 11号壺棺上蓋 (2) 11号壺棺下蓋 (3) 13号壺棺上蓋
(4) 14号壺棺下蓋 (5) 12号壺棺
- PL.13 (1) 14号壺棺上蓋 (2) 15号壺棺上蓋 (3) 15号壺棺下蓋
(4) 16号壺棺下蓋 (5) 17号壺棺下蓋 (6) 22号壺棺上蓋 (7) 19号壺棺下蓋
- PL.14 (1) 23号壺棺上蓋 (2) 23号壺棺下蓋 (3) 24号壺棺上蓋
(4) 24号壺棺下蓋 (5) 25号壺棺上蓋 (6) 25号壺棺下蓋
- PL.15 (1) 27号壺棺上蓋 (2) 27号壺棺下蓋 (3) 27号壺棺副葬壺
(4) 29号壺棺上蓋 (5) 29号壺棺下蓋 (6) 30号壺棺上蓋
(7) 30号壺棺副葬壺
- PL.16 (1) 31号壺棺上蓋 (2) 31号壺棺下蓋 (3) 32号壺棺上蓋
(4) 32号壺棺下蓋 (5) 34号壺棺下蓋 (6) 36号壺棺下蓋
- PL.17 (1) 33号壺棺上蓋 (2) 33号壺棺下蓋 (3) 33号壺棺副葬壺
(4) 35号壺棺上蓋 (5) 35号壺棺下蓋 (6) 38号壺棺上蓋
(6) 38号壺棺下蓋
- PL.18 (1) 41号壺棺下蓋 (2) 40号壺棺 (3) 37号壺棺下蓋
(4) 44号壺棺上蓋 (5) 44号壺棺下蓋 (6) 42号壺棺上蓋
(6) 42号壺棺下蓋
- PL.19 (1) 3号木棺墓副葬壺 (2) 3号木棺墓副葬壺 (3) 4号木棺墓副葬壺
(4) 9号木棺墓副葬壺 (5) 11号木棺墓副葬壺 (6) 12号木棺墓副葬壺
- PL.20 (1) 14号木棺墓副葬壺 (2) 15号木棺墓副葬壺 (3) 17号木棺墓副葬壺
(4) 18号木棺墓副葬壺 (5) 19号木棺墓副葬壺 (6) 20号木棺墓副葬壺
- PL.21 (1) 21号木棺墓副葬壺 (2) 25号木棺墓副葬壺 (3) 26号木棺墓副葬壺
(4) 28号木棺墓副葬壺 (5) 34号木棺墓副葬壺 (6) 34号木棺墓副葬壺

下月隈B遺跡群2次調査

- PL.22 (1) 南半部全景（西より） (2) 調査区全景（北西より）

下月隈B遺跡群3次調査

- PL.23 (1) a区東側（東から） (2) b区（東から） (3) a区西側（西から）
(4) a区（東から） (5) c区（東から）
- PL.24 (1) SE01井戸（西から） (2) SE04井戸（西から） (3) SE04井戸（北から）
(4) SE12井戸（南から） (5) SK21土壙（南東から） (6) SK23土壙（東から）
- PL.25 (1) SK10土壙（西から） (2) Pit06土壙（南西から） (3) Pit17柱穴（北西から）
(4) Pit14柱穴（北西から）

- PL.26 下月隈B第3次調査SE01出土遺物
PL.27 下月隈B第3次調査SE02・04
SK03・Pit06・SK10出土土器
PL.28 下月隈B第3次調査出土石製品・土製品・鉄製品・自然遺物

下月隈C遺跡群1次調査

- PL.29 下月隈C遺跡I区 (1) 西から (2) 東から
PL.30 下月隈C遺跡II区 (1) 西から (2) 東から
PL.31 下月隈C遺跡III区 (1) 西から (2) 東から
PL.32 SB-02(南から)

板付遺跡66次調査

- PL.33 板付遺跡調査区 (1) 東半(西から) (2) 西半(西から)
PL.34 出土遺物

I. はじめに

1. 調査に至る経過

埋蔵文化財課では年度毎に次年度以降の事業照会を行なっている。土木局街路課で当該地区の開発を計画していることは早い段階から判明していたが用地買収の遅れから試掘調査を実施したのは平成5年10月からで、それもある程度まとまって用地買収、家屋解体がすんでからであった。当初、下月隈B、C遺跡、板付遺跡で遺構が確認され調査を実施することとなった。大神森遺跡は下月隈B遺跡群2次調査中に試掘調査を実施した結果、壇棺を確認したことからその調査を終了後実施することになった。3次調査は現道部分の拡幅にあたり共用しているので、工事に伴い共用が停止されてから実施することとなった。板付遺跡ではかって市営板付団地建設時に調査を実施した範囲に入っているが、当時の調査は人手によるトレンチ調査が主体で遺構が確認できたところを中心に発掘範囲を拡げる手法が取られていたので現在のような面的調査ではなかった。そのため発掘を行なっていない部分が生じ今回調査した地点は発掘が行なわれていない所にあたっている。それに加えて国指定史跡に近接していること、試掘調査で水田跡が認められていることから土木局の深いご理解を得て調査することとなつた。

2. 調査の組織

調査の組織

調査委託	土木局街路課
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 尾花剛
調査総括	文化財部長 後藤直 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝 折尾学(前任) 埋蔵文化財課第一係長 横山邦繼
庶務担当	埋蔵文化財課第一係 入江幸男
調査担当	埋蔵文化財課 松村道博 埋蔵文化財課第一係 白井克也 佐藤一郎
調査・整理補助	淡石正子 拂養久美子 入江のり子
発掘・整理作業	庄田龍雄 別府俊夫 濱池雅徳 安高清一 山口守人 藤川健 尾中貞大 富永利幸 渡辺純夫 森勤 松永正義 小林義徳 平井武夫 羽岡正春 高木啓太 徳永英彦 野中辰雄 原田誠次 永川カツエ 内山和子 奥田弘子 鷗ヒサ子 本多ナツ子 村上エミ子 安高久子 平田百合子 中沢久美 野口リエウ子 高予与志子 兼田ミヤ子 加藤和子 山本良子 寺嶋道子 水田美代子 石谷香代子 牟田恵子 飯田千恵子 前原真理 白水貴子 草場理恵



- | | | | |
|-----------------|------------|---------------|-----------|
| 1 天神森遺跡 3 次 | 6 下月隈 C 遺跡 | 11 宝満尾東遺跡 | 16 唐田青木遺跡 |
| 2 天神森遺跡 2 次 | 7 板付瀧邊66次 | 12 今浦地遺跡 | 17 鶴居遺跡 |
| 3 下月隈遺跡 2 次 | 8 板付遺跡 | 13 唐田久保園遺跡 | |
| 4 下月隈 B 遺跡群 2 次 | 9 那珂遺跡 | 14 唐田赤堀 / 清遺跡 | |
| 5 下月隈 B 遺跡群 3 次 | 10 金隈遺跡 | 15 唐田大谷遺跡 | |

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

II. 遺跡の立地と環境

今回調査を実施した下月隈、板付遺跡は三笠川及び諸岡川等の大小の河川により山稜台地が開析され、冲積作用により形成された扇状地平野の先端部及びこれらの平野を望む丘陵の裾に位置する。その周辺には谷底平野が形成され、扇状地平野を浅く開析した旧河道が散在し過湿地が多く見出されるが現在では都市化が進み乾燥地となっている。その一角に福岡空港が太平洋戦争中に造成されその後の拡張により現況を呈するが、下月隈の遺跡群はその滑走路の南端より東側の冲積地から月隈丘陵から派生した小丘陵裾部に位置している。

周辺には多くの遺跡が密集している。東側の月隈丘陵は四王寺山から展開する丘陵の一つで福岡平野と柏原平野とを二分し金隈遺跡をはじめ多くの遺跡が展開している。さらに西側の春日丘陵から那珂、比恵台地にも旧石器時代から各時代の遺跡が濃密に分布している。とくに弥生時代には那国の中核として王墓をはじめ青銅器の工房址等当時の先進地域を裏付けている。北側は現在の地形と異なり大きく入り江となっていたが弥生時代には小規模の遺跡が砂丘上に点在するが、陸地化と共に遺跡が増加し中世に至りその花を開かせ多くの輸入陶磁器を出土せしめている。

さらに詳細に遺跡を検討すると月隈丘陵には弥生時代の墳墓群が多く見られる。金隈遺跡では前期から後期に至る變柏墓が300基以上が検出されているが青銅製品の副葬はなく南海産の貝輪が見られる程度である。鹿田青木遺跡でも土塚墓・木棺墓、甕棺墓が160基以上が検出されているが中期前半以降の墓地群である。宝満尾遺跡では小規模な墓地で甕棺と共に土塚墓が検出され小型の船載鏡が副葬されていた。大谷遺跡では船載鏡片の出土を見る。小型銅鐸の鋳型も出土している。久保園遺跡では弥生時代から古墳時代の集落であるが 5×8 間の大規模の大型建物が出土しており、近年各地で弥生時代の大型建物が確認され、この建物も弥生時代の建物であろうと言われている。月隈丘陵に展開するこれらの集落は那国を担う拠点集落の一つであったと思われる。沖積地では福岡空港の西側で繩文時代晚期から古墳時代に至る集落が検出されている。晚期の溝からは漆塗リ弓、把頭飾、弥生時代後期から終末期の環濠からは木製短甲、組合せ式の大小の机を初めとする多量の木製品が出土し、大型掘立柱建物も出土し当時の生活の一端を窺うことが出来る。その近くの微高地では前期後半の土塚墓、變柏墓、さらには貯蔵穴も出土している。南4kmには中・寺尾遺跡がある。前期の土塚墓群が確認され、前期の小塚が副葬され下月隈天神森遺跡のあり方と類似している。また仲島遺跡では貨泉の出土を見る。那珂、比恵台地にも濃密な遺跡の分布を見る。比恵台地ではこれまでの調査で幾つかの谷があり込み地形的に3群に分離出来そうである。繩文時代の遺物はほとんど無く晚期の突帯紋土器が3次調査で纏まって出土する。それ以降は間断なく遺跡が継続しており安定した生活基盤を窺わせる。甕棺からは青銅器の出土も見られる。那珂遺跡群でも同様の在り方を示す。那珂37次調査では繩文時代晩期の二重環濠が発見され、弥生時代中、後期の遺物には青銅製品も出土し銅劍の鋳型も出土しており那国の青銅器生産の一端を担っていたことが窺える。古墳時代にも那珂、比恵遺跡群を初めとしてこれらの丘陵に集落は展開している。一方沖積地の開発も盛んで那河深ヲサ遺跡、那珂君体遺跡などで水田跡とともに大規模な灌漑施設が設けられ水田の規模の拡大と発展が見られる。首長墓の前方後円墳は那珂川流域に多く見られる。三角縁神獣鏡を出土した那珂八幡古墳を最古に安徳寺大塚古墳、老司古墳、日拌塚古墳、劍塚古墳と続く。古代ではこの地域は鹿田郡、那珂郡に属するが郡衛の所在地は確定されていない。ただ6世紀後半の大型倉庫群、建物、櫛列が検出された比恵遺跡群13、39次調査地点は那津官家の関連すると考えられている。

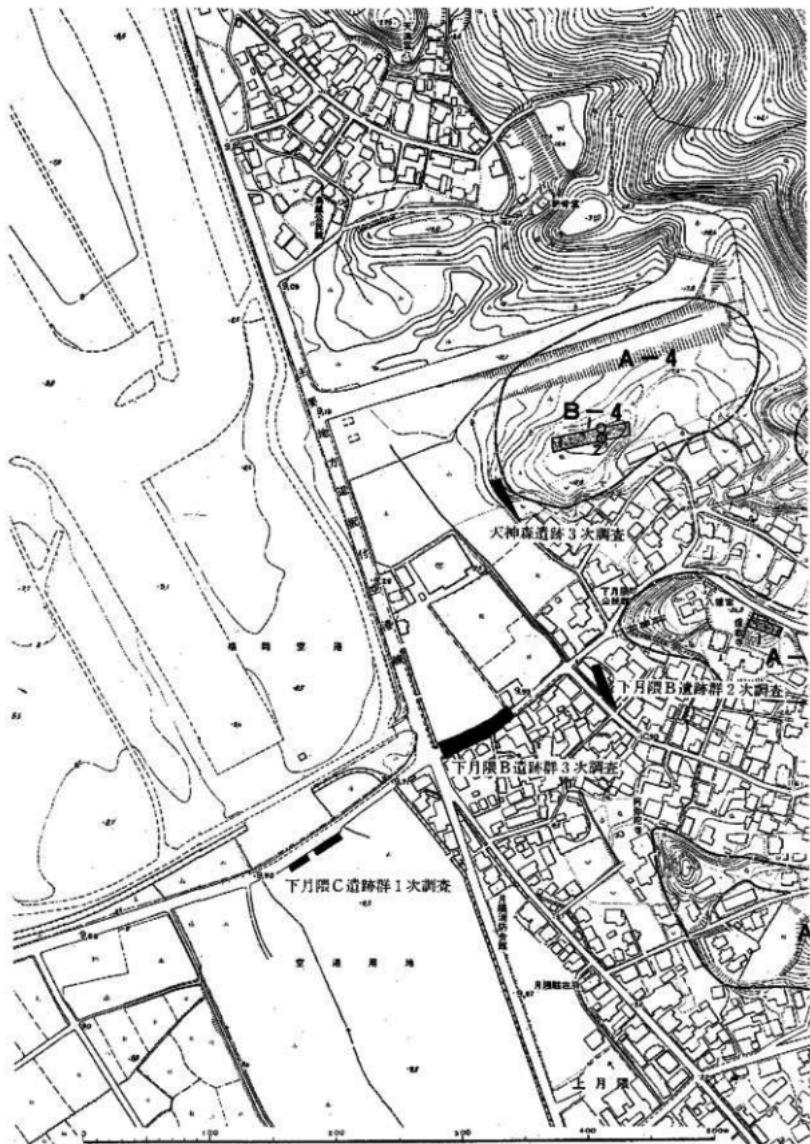


Fig. 2 調査地点及び周辺地形図 (1/4,000)

III 遺 跡 各 說

下月隈天神森遺跡

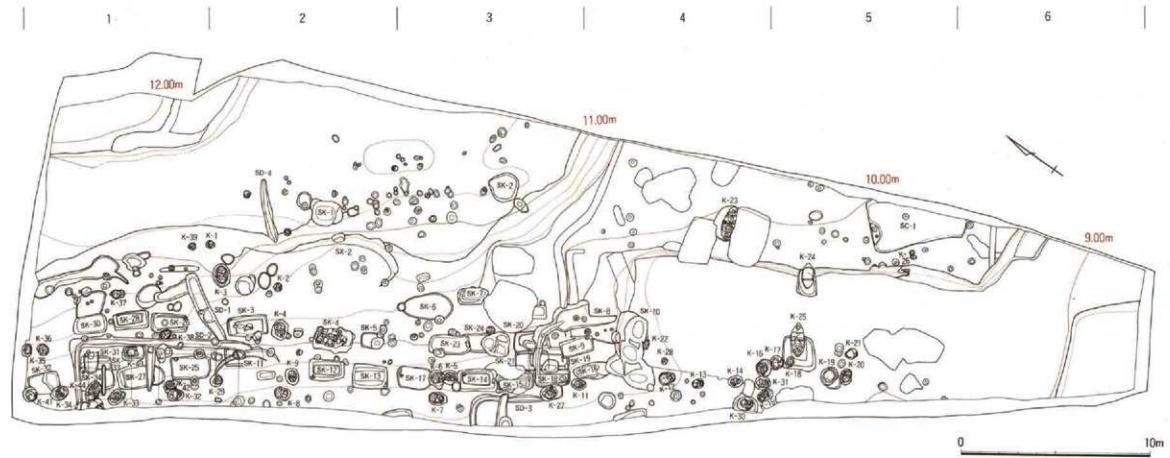


Fig. 3 遺構全体図 (1/200)

1. 調査の概要

調査地点は福岡平野と柏原平野とを二分する月隈丘陵の南西部の丘陵裾部に位置する。標高11m前後を測り、福岡空港を望む地点である。買収交渉の遅れから用地内の家屋解体が遅れ、試掘調査を実施したのは下月限B遺跡群2次調査中であった。近くでは下月限天神森遺跡が位置するがその範囲には含まれず、さらに自然地形を留めているところは少なく、家屋建設に伴い削平が大きいこと等からその存在は危ぶまれていた。試掘調査の結果少數の柱穴や下甕を僅かに残す遺存状態の悪い甕棺が数基検出され調査を実施することとなつたが短期間で終えることができるものと思われた。調査の進展につれ甕棺が40基以上、他に木棺墓が多く検出されたことから当初予定期間よりも長期間の調査となり結果的に関係者に多大な迷惑をかけてしまった。

検出した遺構は弥生時代前期の木棺墓（木棺墓と思われる掘り込みが認められるのも存在するがその確証はないが、その可能性が強いので一応木棺墓としておく。）、前期から中期にかけての甕棺墓が大半でありその他に8世紀代の土壙、溝さらには中世の竪穴である。木棺墓の調査は甕棺の調査の後になったこと、北部九州の水飢饉の折であり、調査の後半は一滴の雨も降らず地面が堅く乾燥し、掘り込まれた基盤層が花崗岩爆裂土上層であったことなど幾つかの悪条件が重なった影響で覆土との違いが不鮮明であり、掘り残した可能性を否定し得ない。木棺墓は丘陵裾に並行に二列埋葬され、大半の木棺墓には小壺が1から数個休棺外に副葬されていた。その規模は長軸約1.8m、短軸1m前後、深さ0.3~1.2mを測る隅丸長方形である。切り合は少ないが中には18号~21号木棺墓のように4基が重複しているのも見受けられる。甕棺に切られ先行するものであろうが、一部には併行するのもあろうか。出土土器からも板付I~II式にかけて営まれた木棺墓群であると言える。

甕棺墓は計44基出土したが大部分は甕棺専用の大型土器が出現する以前の土器で漆形土器を鉢で覆う例が多い。大型甕棺は3基出土しているが、いずれも中期まで下がる所産である。前期後半の甕棺の中で小壺が副葬されているのが数例みられ、木棺墓の副葬小壺との類似性が認められる。8世紀代の遺構は土壙2基と「コ」の字状に溝に囲まれた遺構でその性格は明らかではない。他に中世の底部糸切りの土師器皿、輸入磁器を出土する住居跡様の大型の遺構が見られる。

2. 甕棺墓の調査

甕棺は前述したように計44基検出したが調査区の南半は宅地造成の折に掘り込み地行的に低い部分を約1m程度掘り下げ平坦にした後、東側の高い箇所の土で盛り土を行なっており、更に多くの甕棺が存在していたものであろう。盛り土の中に甕棺の破片が多く含まれていたことからもそのことが窺える。破壊を免れた北側の斜面裾部のみの調査であり墓地群の全体の様相は明らかではない。丘陵頂部の1次調査でも土壤墓が調査されて、さらに東側300mに位置する2次調査地点でも前期の甕棺が出土しており、かなり広範囲に墓地が展開する可能性が強く、前期の甕棺群では大規模な墓地と言える。

1号甕棺 (Fig. 4)

A-1区の削平された平坦面から僅かに傾斜する地点に位置する。今回調査した甕棺の中では39号甕棺と共に最も高い位置に占地している。遺存状況は極めて悪く上甕及び下甕の大部分が消失し、最も深く掘り込まれた甕棺の胴部から頭部にかけての検出である。主軸はN-7.5°-Wをとり、掘り方は現状では楕円形を呈し甕棺ぎりぎりで、その規模は46×39cmである。下棺は前期後半の漆を用い、上棺には漆か鉢で覆っていたものであろう。器表面の磨滅が著しく接合することは出来なかった。

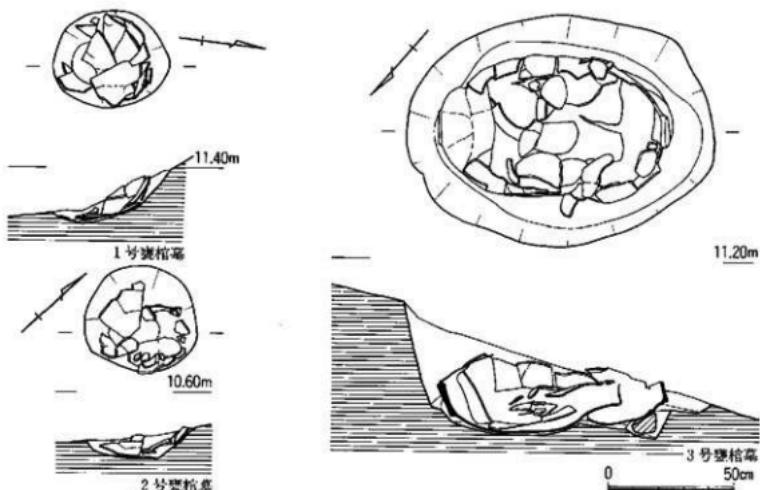


Fig. 4 1~3号墓実測図 (1/20)

2号墓棺 (Fig. 4)

A-2区の北西端に位置する。斜面を「L」字状に削りだしたSX-2により平坦になった部分があり大半はその時の造成により削平を受け下壺の丸味をもつ胴部だけの遺存である。1号墓棺と同様に遺存状況は極めて悪く上壺及び下壺の大部分が消失し、最も深く掘り込まれた胴部から頸部にかけての検出である。主軸はN-45°Eで、掘り方は底部近くしか残っていない現状では40cm前後のはば円形を呈している。下棺には口縁部を打ち欠いた壺を用い、上棺には壺か体で覆っていたものであろう。

下壺 (Fig. 5)

壺形土器で口縁部を打ち欠いている。器面の荒れが著しく底部を欠損し胴部と頸部は接合しない。上端径28.5cm、胴部最大径46cm、残存推定器高43cmを計る。胴部上半に最大径を取り内傾する頸部となり、肥厚する所で打ち欠いているが段をもつ口縁部となるものであろう。胎土には白砂粒を多く含み、焼成良好である。胴部の最大部には一部黒斑が認められ茶褐色ないし暗赤褐色を呈し外面は斜めのヘラ研磨、内面はナデ調整である。

3号墓棺 (Fig. 4, PL.3)

A-2区の北西隅、1号墓棺と2号墓棺の間の傾斜面上に位置する。覆口式墓棺で比較的の遺存状況は良好で上壺は半分、下壺は2/3が残っていた。上、下棺とも壺を用い、上棺は胴最大部から上半、下棺は口縁部を打ち欠いている。墓壙は楕円形で主軸はS 54°Wを取り長径1.21m、短径0.92mを計る。埋置角度は10°前後で下壺を傾斜上面に据え、打ち欠いた上棺を肩部まで深く覆っている。上棺の下面には拳大的角礫を置き、その安定を計っている。

上壺 (Fig. 5, PL.10)

上げ底気味の底部で底径13.2cmを計る大型の壺である。胴最大部で打ち欠き粘土接合面をそのまま残し、残存器高35.3cm、最大径49cmを計る。胎土には白色砂粒を多く含み明褐色から暗灰褐色を示す。

胴部上半には一ヶ所に黒斑が認められる。外面の一部には研磨が見られるが器表面の磨滅が著しく他の調整は明らかではない。

下甕 (Fig. 5, PL.10)

僅かに上げ底の底部で最大径を胴部中位に取る大型の壺である。頸部はあまりすぼまらず寸胴で壺に近い形態となる。胴部と頸部はなだらかに連続し肩部には段をもたず浅い沈線を巡らすことで区分している。口縁部はほぼ水平に打ち欠く。上端径37cm、胴部最大径50.5cm、残存器高61.5cm、底径13.5cmを計る。胎土には白色砂粒を多く含むが上甕の粒子より細かい。焼成は良好で暗褐色から茶褐色を呈する。器表面は荒れているが、外面は底部近くが刷毛目調整、上半部は研磨が施され、口縁部近くの内面が斜めの刷毛目、その下に指押との跡が残る。外面の胴部中位の対称の位置に20から30cmの黒斑が見られ、一部に丹塗の跡も認められる。

4号甕棺 (Fig. 6, PL. 2)

B-2区の中央部、3号と4号木棺基の間の傾斜面に位置する。覆口式甕棺で比較的の遺存状況は良好、胴部の一部を欠損しているにすぎない。上、下棺とも壺を用い、上棺は肩部の上半～口縁部、下棺は口縁部が肥厚している一部を残して打ち欠いている。基壙は不整な格円形で主軸をS-45°-Wを取り長径1.09m、短径0.83m、埋置角度は18°を測る。床面は胴部の曲線に合わせて丸く掘り進め底部近くを横穴状に穿っている。肩部まで打ち欠いた上甕で下甕の頸部まで深く覆っている。

上甕 (Fig. 7, PL.10)

器壁が厚く上げ底気味の底部で底径12.6cmを計る大型の壺である。頸部の沈線の上で打ち欠き、上端は少し波打つ。寸胴で最大部を胴部下半にもつ。一部欠損するがほぼ完形品で、残存器高36.7cm、胴部最大径51.6cmを計る。胎土には白色砂粒を多く含み淡橙褐色から淡黄褐色を示す。胴部最大部には相対する位置の二ヶ所に黒斑が認められる。器表面の摩耗が著しいが外面は研磨、内面はナデ調整であろう。

下甕 (Fig. 7, PL.10)

口縁部を除きほぼ完形品で僅かに上げ底の底部で最大径を胴部中位に取る大型の均整の取れた壺であ

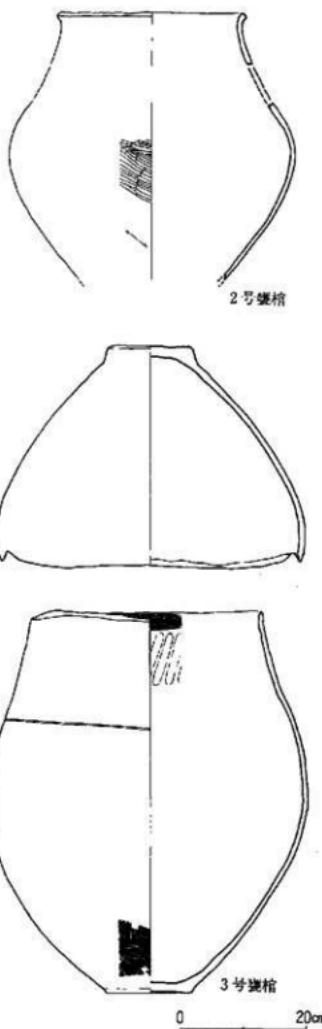


Fig. 5 2・3号甕棺実測図 (1/8)

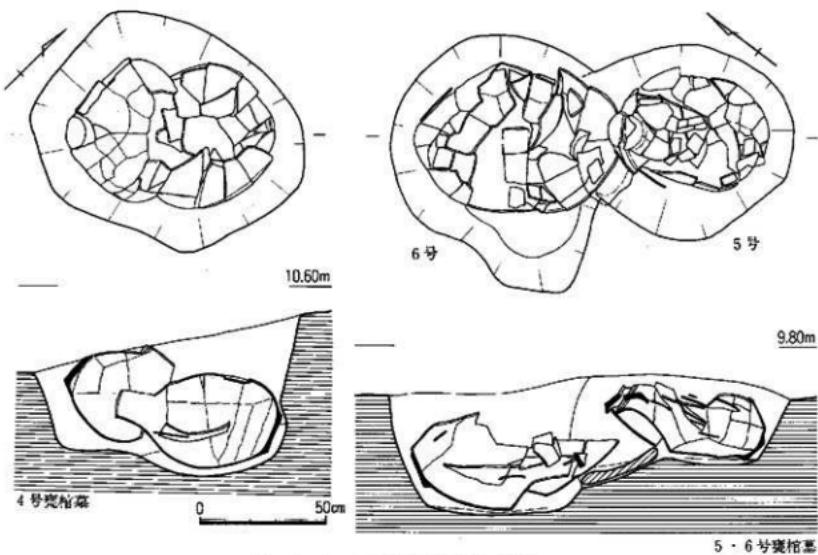


Fig. 6 4～6号壺棺墓実測図 (1/20)

る。肩部から頸部は滑らかに内傾し肩部には幅が狭く浅い沈線を巡らしている。内傾する頸部から外反する口縁部となり、肥厚して段となるが、その上で打ち欠いている。段は锐角で口縁端部が厚みを増している。胸部下半に焼成後、外側から径3cm弱の穿孔を施す。器表面の磨滅が激しいが外面は研磨、内面はナデ調整と思われる。又、胸部下半には対称の位置に黒斑が二箇所認められる。焼成は良好で、胎土は上甕と同様で砂粒を多く含み、色調は淡褐色を呈する。上端径36.5cm、胸部最大径56cm、残存器高66cm、底径13.6cmを測る。

5号壺棺 (Fig. 6)

B-3区の西北に寄った位置にあり、傾斜が緩くなった地点で傾斜面に平行な埋置を示す。14号と16号木棺墓の間に挟まれ、5～7号壺棺群の中の一基である。6号壺棺の上甕の掘り方を切り5号壺棺の上甕が重複している。覆口式壺棺で遺存状況はあまり良好ではなく上甕は2/3、下甕は半分近くが欠損する。上、下棺とも壺を用い、上棺は肩部下半で打ち欠き鉢状の器形としている。下甕は時期的に新しく口縁部はそのままで打ち欠いていない。墓墳は重複する上甕の掘り方は明らかではないがほぼ楕円形で主軸をN-38°-Wをとり長径は推定0.9m、短径0.78m、埋置角度は30°前後を測る。下甕の口縁部が上甕の底部近くに位置するが、上甕が本來の位置を動いているものであろう。

上甕 (Fig. 7, PL.10)

壺の肩部中位から上を打ち欠いて上甕としている。平底で内湾しつつ開く胸部となる。底径14.6cm、残存器高24cm、上端径48cmを測る。胎土には小砂粒を多く含み焼成は良好で茶褐色ないし暗茶褐色を呈する。外面は研磨、内面はナデ調整で、胸部中位の外面に黒斑がある。

下甕 (Fig. 7, PL.10)

安定感のある平底で、胸部中位に最大径をもち、緩く内傾して外反する口縁部の壺である。口縁部

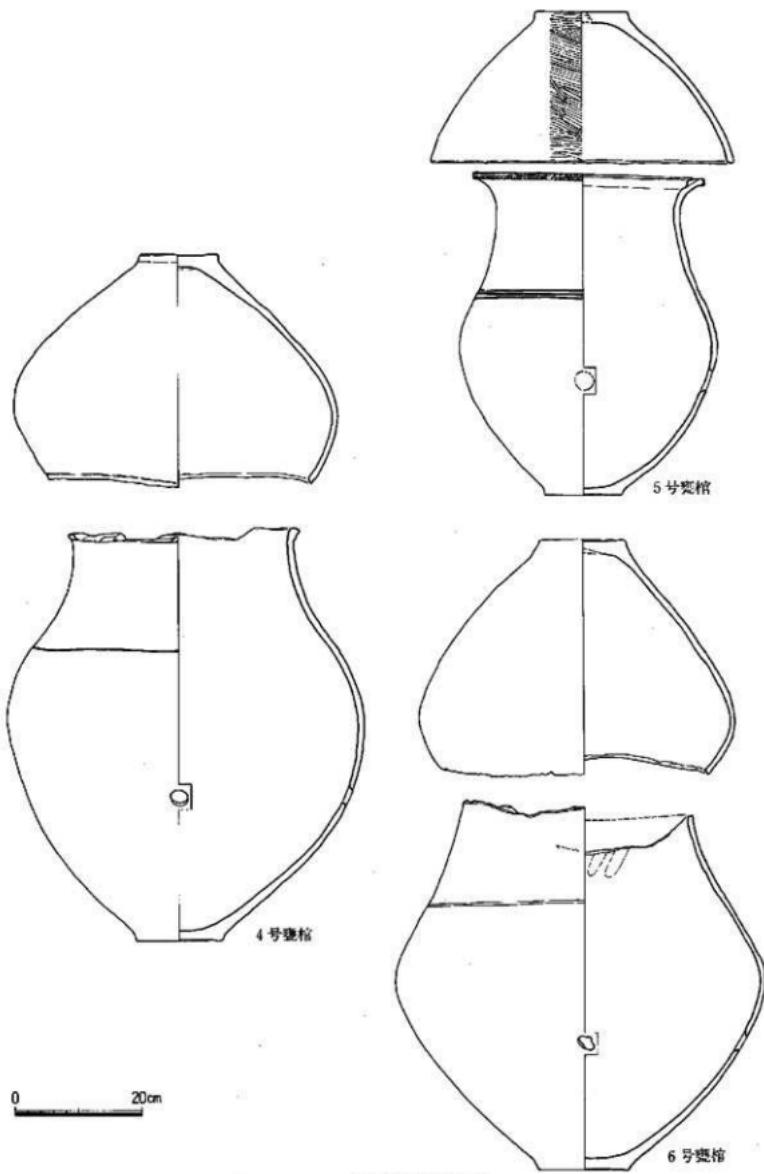


Fig. 7 4 ~ 6 号喪棺実測図 (1/8)

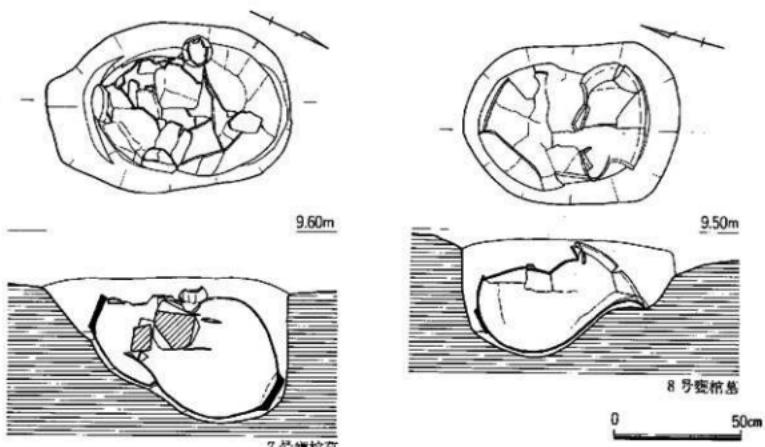


Fig. 8 7・8号甕棺墓実測図 (1/20)

から頸部にかけて1/3、胴部上半の1/2を欠損するが復元完形品で口径36.2cm、器高51.6cm、胴部最大径40.3cm、底径12cmを測る。胴部から頸部にかけては滑らかに内傾し、肩部には浅い三条の沈線を巡らす。外反する口縁部内面には粘土帯を貼り付け、内側へ傾斜する平坦面をつくる。口唇部外面の中央部をナデにより窪め、その上、下端に刻み目を施す。また胴部下半には焼成後の穿孔をもつ。胎土には白色砂粒を多く含み、焼成良好で色調赤褐色、器表面は荒れているが、頸部の一部に赤色顔料が観察でき外面全体を丹塗り研磨しているものであろう。内面はナデ調整である。

6号甕棺 (Fig. 6)

B-2区、5号甕棺に切られ、その北西に位置する。主軸方向は5号甕棺とまったく逆でS-38°E、埋置角度は20°を測る。上半部は削平を受けたり、内側へ落したりと遺存状況は悪いが壺と壺の組合せの覆口式甕棺である。上甕は肩部下で、下甕は口縁部で打ち欠いて棺として用いている。墓域の掘り方はほぼ棺円形であるが南北側を弧状に広めている。規模は0.85×1.1mを測り床面は中央部が丸く窪み、上甕の部分は斜めに削りだしその下に扁平な板石を置き甕棺の安定を測っている。

上甕 (Fig. 7, PL.11)

下甕より僅かに小型の壺を用い上半に最大部をもつ。肩部の下で打ち欠き、椀状を呈する。上げ底気味の底部で底径13.7cmを計る。上端は少し波打つがほぼ平坦で径43cmを測る。一部欠損するがほぼ完形品で、残存器高37.5cm、胴部最大径50.3cmを計る。胎土には白色砂粒を多く含み焼成は良好で茶褐色である。胴最大部から底部にかけて最大幅20cmの黒斑が見られる。器表面の摩耗が著しいが外面は研磨、内面はナデ調整であろう。

下甕 (Fig. 7, PL.11)

外面を丹塗り研磨する壺で口縁部を打ち欠いている。僅かに上げ底の底部で最大径を胴部上半にとり内湾する胴部から外反して立ち上がる長い頸部となる。胴部と頸部の境は不明瞭で外面に一条の沈線を巡らしている。胴部下半に焼成後、外面から楕円形の穿孔を施す。器表面の磨滅が激しいが外面は丹塗り研磨、内面はナデ調整と思われる。胴最大部及び対称的位置の頸部から胴部上半にかけて黒

班が二箇所認められる。焼成は良好で、胎土は5mm前後の白砂粒を多く含み、色調は赤褐色を呈する。上端径36.5cm、胴部最大径57cm、残存器高59cm、底径14.3cmを測る。

7号甕棺 (Fig. 8, PL. 3)

B-3区、5、6号甕棺の西方に隣接する。比較的遺存状況が良好な覆口式甕棺で上蓋は下蓋の肩部まで深く覆っていた。中央部には角礫が二個落下していたが甕棺に伴うか否か明らかではない。上、下棺とも壺を用い、上棺は胴部上半で打ち欠き椀状の器形とし、下棺は口縁部を打ち欠いている。墓壙はほぼ長楕円形で長径は0.95m、短径0.67m、主軸をS-26°E、埋置角度は25°を測る。床面は斜めに掘り込まれ、棺の丸味に合わせて掘り窪めている。墓壙の西側に上蓋が下蓋と接する位置に口縁部を上にして、ほぼ垂直に据えた状態で小壺を副葬している。出土状況から本来の位置を保っているものである。このように小壺を副葬する例は16号、27号、30号、33号甕棺で出土している。

上蓋 (Fig. 9, PL.11)

壺の胴部上半を打ち欠いて上蓋としている。平底で内湾しつ、開く胴部となる。底径13cm、残存器高33.9cm、上端径43.7cmを測る。胎土には小砂粒を多く含み焼成は良好で明茶褐色ないし茶褐色を呈する。外面は研磨、内面はナデ調整で、打ち欠き部分からその下にかけ黒斑が認められる。

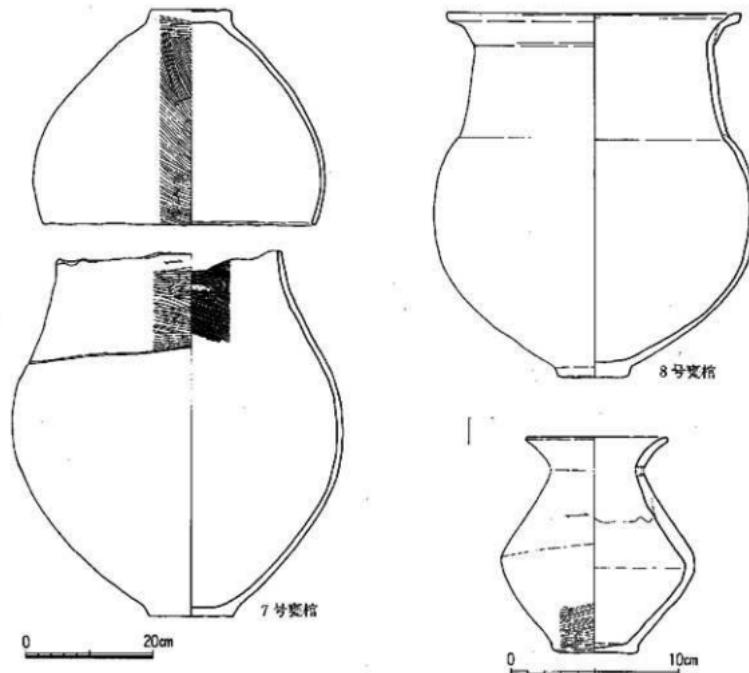


Fig. 9 7・8号甕棺、8号甕棺墓副葬壺実測図 (1/8・1/3)

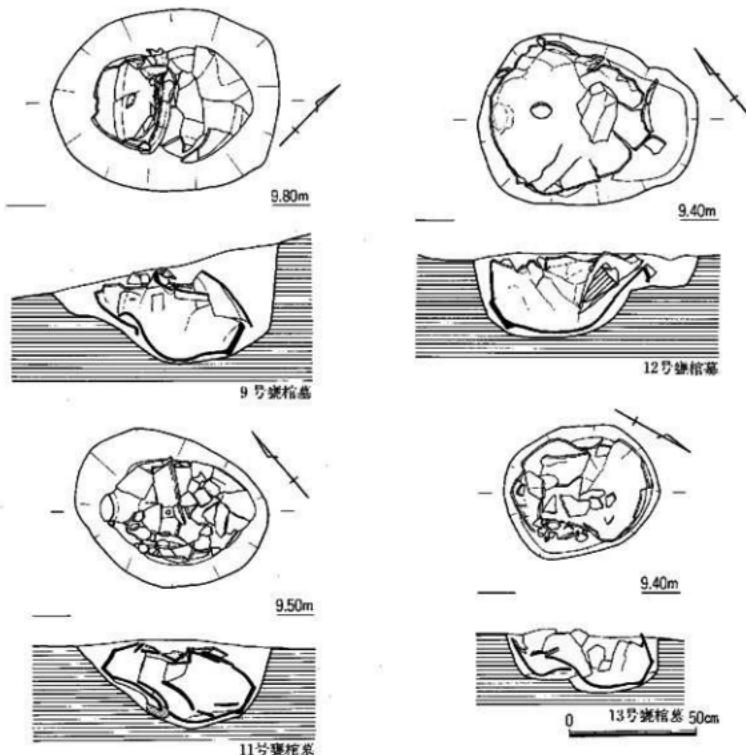


Fig. 10 9・11~13号墓室底測図 (1/20)

下甕 (Fig. 9, PL.11)

安定感のある平底で、胴部中位に最大径をもち、緩く内傾して外反する口縁部の壺である。口縁部を除きほぼ完形品で上端径36cm、器高58.3cm、胴部最大径51.8cm、底径13.3cmを測る。胴部から頸部にかけては緩やかに内傾し、頸部が外反しながら立ち上がる。肩部には浅い沈線が右上がりに巡らされる。胎土には粒子の細かい白色砂粒を多く含み、焼成良好で色調は明赤褐色、内面は淡灰褐色、外面は横位の笠研磨、内面は頸部が横～斜めの刷毛目、その下はナデ調整である。

副葬甕 (Fig. 9, PL.19)

口縁部と頸部は接合出来なかったがほぼ完形に近い状況を示す。薄い平底に算盤玉状に強く胴部が張り、頸部がすぼまり、外反する口縁部となる。全体に粗雑な作りで底部外面は数回の笠切りによるため不安定となる。胴部との境は笠で押えて円盤貼り付け状底部とする。胴部下半は内済し、上半は僅かに外反し内傾しておりその接合部に鈍い棱線が残る。胎土は精良で赤褐色ないし淡橙色、器表面が摩耗しているため調整は明らかではないが胴部下半に笠研磨が明瞭に残り、外面は笠研磨、内面はナデ調整であろう。

8号甕棺 (Fig.8, PL.3)

B-2区西端、調査区の縁に位置する。4号、9号甕棺の西にあり一群をなすが他の二基よりも時期的に新しい壺の単棺で木蓋を用いたものであろう。遺存状況は良好で上面の胴部から口縁部にかけて内部に崩落している他は原形を保っている。墓壙は底部部分はほぼ垂直に、口縁部部分は一度平坦にし肩部は丸く掘り窪めている。平面形は小判形で長軸0.85m、端軸0.63m、主軸方向はS-15°-E、埋置角度は28°を測る。

甕棺 (Fig.9)

胴部中位に最大径があり、小径の厚い底部をもち口縁部の内面を平坦にする口径の大きい新しい傾向の壺である。底径11cm、厚さ2.5cm、胴部最大径50.8cm、口径46.6cm、器高58cmを計る。球形に近い丸い胴部と直線的に僅かに内傾して立ち上がる頸部との境には沈線は施さないが変換点が残る。頸部から大きく外反する口縁部との境に浅い段を残し、口唇部外面を斜め、内側の上面を平坦にしその下に外面と同様な段をもつ。内面の胴部と頸部の境には棱線が残る。器表面の磨滅が著しいが外面は研磨、内面はナデ調整と思われる。胴部に径20cm位のドーナツ状の黒斑が認められる。焼成は良好で、胎土は白砂粒を多く含み、色調は赤茶褐色を呈する。

9号甕棺 (Fig.10, PL.3)

B-3区、8号甕棺の東1mに位置する。遺存状況はあまり良好ではないが下棺に壺を、上棺に鉢を用いた覆口式甕棺で上壺を下壺の肩部まで深く置っていた。墓壙はほぼ楕円形で長径は0.9m、短径0.71m、主軸をS-44°-W、埋置角度は32°を測る。床面は斜めに掘り込まれ、棺の丸味に合わせて掘り窪めている。

上壺 (Fig.11, PL.11)

口縁部を外反させ外面に粘土を貼り付け段をもつ鉢で底部を欠損する。内外面とも鏡研磨である。胎土には砂粒を多く含み焼成は良く橙褐色を示す。

F甕 (Fig.11, PL.11)

口縁部を一部欠損するがそれ以外はほぼ残存している。口径33cm、器高57cm、胴部最大径43.8cm、底径12.7cmを計る。厚い上げ底の底部で最大径を胴部上位にもつ壺である。頸部は緩く内傾して立上がり外反する口縁部となる。口縁部には外面に粘土を貼り付け頸部との境に段をもつ。胎土には砂粒を多く含み焼成は良く、色調は赤褐色、調整は外面の頸部に横位の鏡研磨が認められ、内面は口縁部が鏡研磨、その下に細い刷毛目調整が見られるが、他は摩耗が激しく不明。胴部には焼成後の穿孔が見られる。

11号甕棺 (Fig.10, PL.3)

B-3区と4区の際の斜面がなんだらかになる丘陵間に位置する。北西1mには27号甕棺、北側には18号から20号木棺墓が集中している。上壺は深めの鉢をそのまま用い、下壺には口縁部を打ち欠いた壺を使用している。しかし上、下の甕棺片が内部に落ち込んで遺存状況は良くない。墓壙は底部部分はいくぶん急激に、口縁部分は斜めにし肩部は丸く掘り窪めている。平面形は楕円形で長軸0.77m、短軸0.59m、主軸方向はN-48°-W、埋置角度は27°を測る。上、下壺の接合部には黄白色粘土を巻くが部分的である。

上壺 (Fig.11, PL.12)

口縁部を外反させ外面に粘土を貼り付け段をもつ深めの鉢である。安定した底部から内湾して開き外反する肥厚した口縁部となり、外面に明瞭な段をもつ。復元完形品で口径35cm、器高26cm、底径10.5cmを計る。内外面とも鏡研磨である。胎土には砂粒を多く含み焼成は良く茶褐色を示す。

下巻 (Fig.11, PL.12)

胴部中位に最大径をもつ壺で口縁部を打ち欠き安定感のある平底で、緩く内傾して立ち上がる頸部となる。口縁部を除きほぼ完形品で上端径23cm、器高43.7cm、胴部最大径39.5cm、底径11cmを測り他の土器に比べ小型品である。頸部は外反しながら立ち上がり肩部には浅い沈線が右下がりに巡らされる。胴最大部からその下にかけて黒斑が対称の位置に認められる。胎上には5mm前後の砂粒を多く含

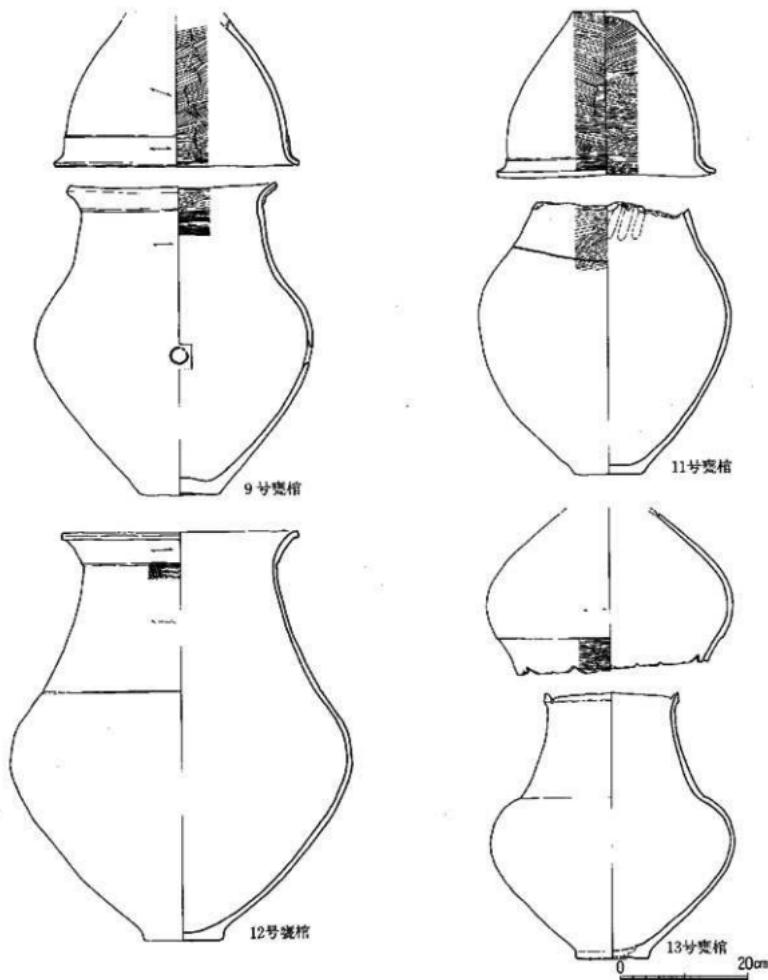


Fig. 11 9・11～13号壺棺実測図 (1/8)

み、焼成良好で色調は明赤褐色。器表面は磨滅し調整は明らかではないが頸部に指揮えのあとが残り外側は鏡研磨、内面はナデ調整であろう。

12号甕棺 (Fig.10)

B-4区の中央部、10号土壙の南に位置し、宅地造成により平坦に削平された所にある。その為上部の1/3は削平を受け遺存状況は悪い。蓋をそのまま使用する単棺で木蓋を用いたものであろう。墓壙の平面形は甕棺の胸部にあたる部分を幅広の楕円形にし、丸く掘り窪め頸部にあたるところから平坦面を作りだしている。底部にあたる部分はいくぶん急激に、胸部は丸く掘り窪めている。その規模は長軸0.86m、短軸0.67m、深さ0.33mで主軸方向はS-51°-E、埋置角度は31°を測る。

甕棺 (Fig.11, PL.12)

安定した平底で最大径を胸部上位にとる新しい傾向を示す蓋で復元完形品である。口径37.2cm、胸部最大径53.5cm、器高65.4cm、底径12.5cmを計る。肩部には沈線を巡らし口唇部端を僅かに肥厚させ、口縁部と頸部との境に緩やかな段をもつ。その段の下には一部刷毛目が残り、他は研磨、内面はナデ調整であろう。

13号甕棺 (Fig.10, PL.3)

B-4区中央部の宅地造成により平坦化された地区、12号甕棺の南西1.2mに位置する。小児用の小型の甕棺で壺と蓋の覆口式甕棺である。墓壙はほぼ甕棺の大きさに掘り込まれ平面形は楕円形を示す。その規模は長軸0.60m、短軸0.52m、主軸方位S-29°-E、埋置角度24°を計る。上蓋は頸部中ほどで打ち欠き下蓋の肩部まで深く覆う。底部は削平を受け消失している。下蓋は口縁部下の肥厚する部位を打ち欠く。

上蓋 (Fig.11, PL.12)

頸部の中ほどから口縁部にかけて打ち欠いた壺で底部を欠失する。胸部上位に最大径を取り肩に段を有し、外反しつつ内傾する頸部となる。上面は斜めになり粘土の接合面で打ち欠いているものと考えられるが破断面の破損が著しく凹凸がある。焼成は良好で茶褐色をなし、胎土には砂粒を多く含む。頸部には黒斑が見られ、調整は外側が研磨、内面はナデ調整である。

下蓋 (Fig.11)

頸部が強く張り頸部が長く、内傾して立ち上がる均整のとれた古い形態を留めた壺で肥厚した口縁部を打ち欠いている。上げ底の底部から内済して開く胸部で、最大径を胸部上位にとり頸部との境は僅かに斜むが、沈線はもたない。口縁部は外反するところで打ち欠いているが器壁が厚くなっている段をもち肥厚するものであろう。2/3程の遺存であるが口縁部を除きほぼ復元でき上端径21.2cm、胸部最大径38.4cm、器高41.3cm、底径11.5cmを計る。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で橙褐色を呈する。器表面の摩耗が著しく調整は不明。

14号甕棺 (Fig.12, PL.4)

B-4区からB-5区にかけての中央部寄りに14号～18号、30号、31号甕棺が集中している北端に位置し造成により削平を受けている。墓壙は甕棺よりも一回り大きく掘り込まれ、平面形はほぼ楕円形でその規模は長径0.77m、短径0.62m、主軸方位N-47°-W、埋置角度16°を計る。小児用の小型の甕棺で鉢と蓋の覆口式甕棺である。上蓋は口縁部が大きく開く鉢をそのまま使用し、下蓋の肩部まで深く覆う。下蓋は口縁部を打ち欠く。

上蓋 (Fig.13, PL.13)

平底の安定した鉢で口縁部が大きく開き外反する。9号、11号甕棺の上蓋と比べ器高が低く、口縁部は僅かに肥厚する程度で外側に段をもたない。復元完形品で口径42.8cm、底径10.8cm、器高21cmを

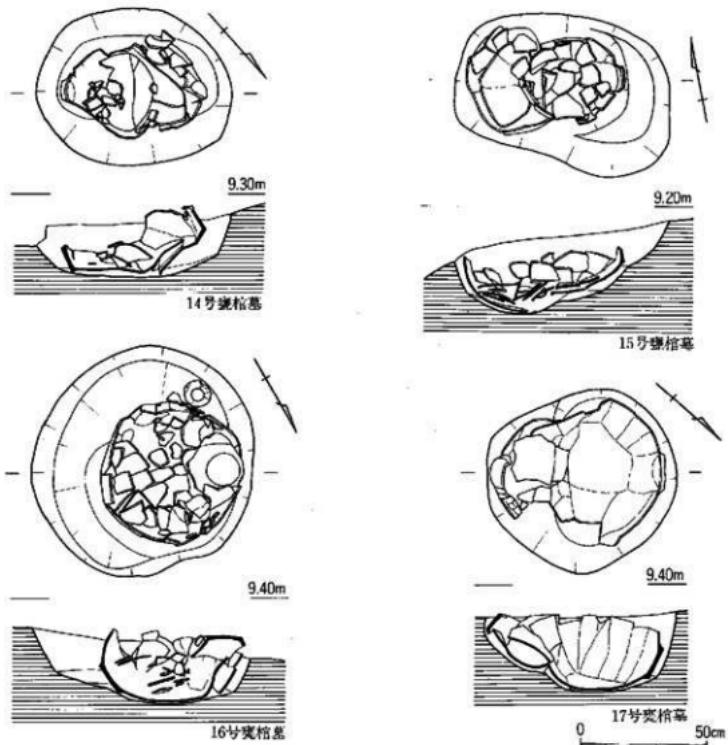


Fig. 12. 14~17号腰棺墓実測図 (1/20)

計る。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈し、内外面とも研磨している。

下甕 (Fig.13, PL.12)

遺存状況が悪く、接合面の危弱が著しいため胸部と底部を接合することが出来なかった。上げ底氣味の底部で胸部最大径を肩部の直下にとる腰高の器形である。肩部には削り出しの不明瞭な段をもち、頸部は外反し、内傾しつつ立ちあがる。口縁部は打ち欠き上面は波を打つ。胸最大部には黒斑がある。内面は斜めの刷毛目調査が見られ、外面は研磨と思われる。橙褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。

15号腰棺 (Fig.12, PL.4)

B-4区からB-5区にかけての中央部寄りに群をなす腰棺のなかで30号、31号腰棺に挟まれ、その南に位置している。墓壇は腰棺よりも一回り大きく掘り込まれ、上蓋にあたる部分は両側に大きく拡げられ、平坦面をつくる。平面形はほぼ橢円形でその規模は長径0.84m、短径0.57m、主軸方位S-75°Eを計る。小児用の小型の腰棺で蓋と壺の覆口式腰棺である。上蓋は壺の頸部から口縁部を打ち欠き、下甕の肩部近くまで深く覆う。下甕は口縁部を打ち欠いて組み合わせている。

上甕 (Fig.13, PL.13)

壺の肩部から口縁部を打ち欠いている。上げ底の底部で中央部が薄くなる。胴部最大径は胴部上位にあり球形に近くなる。肩部には浅い不明瞭な沈線を巡らすが直線的でなく波打っている。上端径29.5cm、胴部最大径37.2cm、底径9.6cm、器高30cmを計る。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で淡黄褐色を呈し、外面は研磨、内面はナデ調整である。

下甕 (Fig.13, PL.13)

上甕と同様な特徴をもつ形態で一回り大きい壺である。口縁部のみを打ち欠き棺とし使用している。上げ底の底部で縁を高台状に少し高くし、胴部上半に最大径をもち肩部との境に細い沈線を巡らしている。上端径24.1cm、胴部最大径43.4cm、底径11cm、器高44.7cmを計る。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で淡褐色を呈し、器表面は磨減しているが外面は研磨、内面はナデ調整であろう。胴最大部の下の相対する位置に黒斑が認められる。

16号甕棺 (Fig.12, PL.4)

14号、15号甕棺と同様にB-4区からB-5区にかけて密集する甕棺群のなかの一つで東端に位置する。墓壇は甕棺よりも一回り大きく掘り込まれ、平面形はほぼ楕円形でその規模は長径0.92m、短径0.85m、主軸方位N-59°W、埋置角度35°を計る。遺存状態は極めて悪く、上甕の底部が水平になるなど現位置を保っていないが、小児用の小形の甕棺で壺と壺の組合せの覆口式甕棺であろう。上甕は底部しか接合出来なかったが胴部上半で打ち欠き下甕の肩部まで深く覆う形態と考えられる。下甕は口縁部を打ち欠く。

上甕 (Fig.13)

壺の底部から胴部にかけての破片が遺存するが接合面の摩耗が著しく接合することが出来なく底部のみ図示した。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で明褐色を呈する。

下甕 (Fig.13, PL.13)

安定した平底の底部で胴部最大径を胴部上半にとる壺で口縁部を打ち欠いている。胴部と頸部の境には明瞭な削り出しの段で区分し、内傾の強い外反する頸部となる。口縁部は打ち欠いているがほぼ水平で粘土の接合面であろう。外面には一部に赤色顔料が観察出来、全体を月塗研磨しているものであろう。内面はナデ調整。上端径23.5cm、胴最大径51.6cm、底径14cm、器高52.8cmを計る。

副葬壺 (Fig.13)

甕棺の上、下甕の接合部から小壺が出土している。胴部上半から口縁部を欠失するが上甕の遺存状況を勘案すれば副葬品と考えられる。厚い上げ底の底部で中央部が薄くなる。胴部上位に最大径をもち不明瞭な稜をもつ。胎土には小砂粒を少量含み焼成は良く灰褐色を呈する。調整は磨滅で不明。

17号甕棺 (Fig.12)

14~16号甕棺と同様にB-4区からB-5区にかけて密集する甕棺群のなかの一つで16号と18号甕棺の間に位置する。墓壇は甕棺ぎりぎりに据られ、平面形は円形に近い楕円形でその規模は長径0.73m、短径0.7m、主軸方位S-42°E、埋置角度25°を計る。上甕は頸部から口縁部を打ち欠き、下甕の肩部まで覆う壺と壺の組合せの覆口式甕棺である。床面は上甕と下甕の境に段をもち各々胴部の曲線に合わせて丸く掘り溝めている。

上甕 (Fig.13)

壺の底部から胴部にかけての破片が遺存するが接合面の摩耗が著しく接合することが出来なく底部のみ図示した。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で明褐色を呈する。

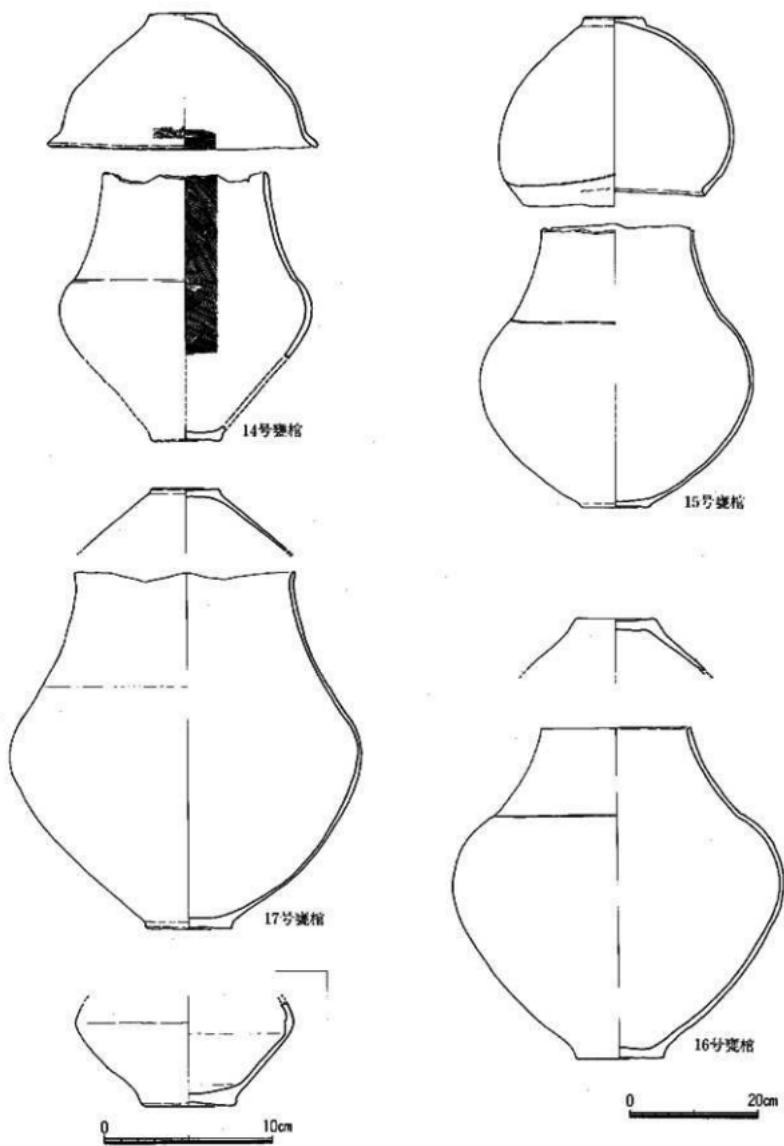


Fig. 13 14~17号墓棺、16号墓棺基副葬壶实测图 (1/8·1/3)

下甕 (Fig.13, PL.13)

安定した平底の底部で胴部最大径を胴部上半にとる壺で口縁部を打ち欠いて使用している。胴部と頸部の境は強いナデによる不明瞭な段で区分し、緩やかに内傾、外反する頸部となる。口縁部は打ち欠いているが波状を呈する。器表面の摩耗が著しく調整は不明瞭であるが外面は研磨、内面はナデ調整である。上端径35.3cm、胴部最大径55.9cm、底径13.8cm、器高56.7cmを測る。

18号甕棺 (Fig.14, PL.4)

成人用の大型甕棺である23号～25号甕棺より新しい中期中頃の小児用甕棺である。上甕はほとんど削平を受け口縁部しか遺存していない。接口式甕棺で上甕に下甕より大きい甕を使用している。墓壇は隅丸の菱形を呈しその規模は主軸で0.59m、幅0.41mを測り、底面はほぼ平坦である。主軸方位はS-71°-W、埋置角度30°を測る。

上甕 (Fig.15)

胴部上半から口縁部にかけての破片である。逆「L」字状口縁で口縁下にM字突帯を巡らす。口縁部上面は平坦で外端に刻みをもつ。口径は50cmを測り、下甕の31.2cmを大きく上回る。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で赤褐色を呈する。

下甕 (Fig.15)

逆「L」字状口縁で胴部があまり膨らみをもたず直線的に底部にいたる。器表面の摩耗が激しく胴部の上と下が接合しないが図示したようになろう。口縁部上面は外傾し端部は尖り気味となる。器高は34cm前後を計る。胎土には砂粒を多く含み焼成良好で赤褐色である。

19号甕棺 (Fig.14)

B-5区、25号甕棺の南1mに位置する。残りは悪く南側を後世のビットに切られ、上半分を削平されている。上甕の破片も無いことから単棺であろうか。上甕は甕棺よりも一回り大きい楕円形で、その規模は長軸1.03m、短軸0.88mを測る。主軸はS-57°-W、埋置角度22°を測る。底面は中央部が丸くなる。

甕棺 (Fig.15, PL.13)

胴部上半、肩部近くに最大径をもつ壺で口縁部を打ち欠いている。安定した平底で胴部と頸部の境に明瞭な段をもつ。頸部は余りすばまらず僅かに外反し内傾が弱く立ち上がる。上端は口縁部の下まで延びるものであろう。上端径39.6cm、胴部最大径54.4cm、底径13.8cm、残存器高58.7cmを計る。4mm前後の砂粒を多く含み灰褐色を呈する。

20号甕棺 (Fig.14, PL.4)

B-5区、19号甕棺の南1mに位置する。中央部を後世のビットに切られ内部に礫が落ち込み、遺存状態は悪い。上甕の大半と下甕の半分が削平されている。上甕は肩部の上で打ち欠き、口縁部を打ち欠いた下甕の頸部まで深く削っている。掘り方は中央部が鑿れ瓢形を呈し、長軸0.84m、短軸0.54mを測る。主軸はS-81°-W、埋置角度19°を測る。底面は上甕の下は胴部の曲線に合わせ緩やかに丸味をもった平坦面を形成し、下甕との境に段をもうけ更に下甕の中央部を丸く掘り窪めている。

上甕 (Fig.15)

肩部の少し上で打ち欠いた壺を用いているが底部を欠損し、全体の形状は明らかではない。胴部上半に最大径をもち肩に不明瞭な段をもつ。上端は粘土の接合部で打ち欠き、ほぼ水平な状態である。

下甕 (Fig.15)

調査時には底部から頸部まで遺存していたが、土器の遺存状態が悪く、接合面の磨滅が著しくて底部、胴部、頸部が各々接合出来なかった。図のように安定した底部から胴部上半に最大径を有し、長い頸部となり14号甕棺の下甕と同様な形態である。

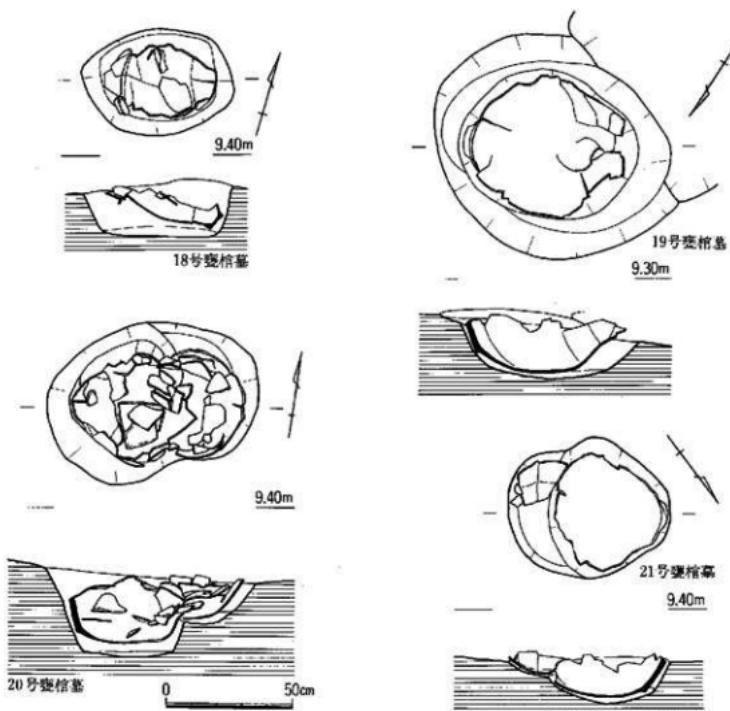


Fig. 14 18~21号甕棺墓実測図 (1/20)

21号甕棺 (Fig.14)

B-5区のはば中央部、20号甕棺の東1mに位置する。宅地造成により大きく削平を受けているところに当たり、遺存状況は極めて悪く、下甕の半分近くと上甕が一部残っていただけである。上甕は頸部から上を、下甕は口縁部を打ち欠いた壺と壺の組合せで、腹口式甕棺であろう。墓壙は椅円形に掘り込まれ、下甕の胸部近くが膨らみをもち、底部は接合部に段をもち上、下甕の胸部の膨らみに合わせて掘り窪める。規模は長軸0.64m、短軸0.54m、主軸方位S-51°-E、埋置角度31°を測る。

上甕 (Fig.15)

胸部の上半部から上を打ち欠いた壺を用いているが胸部下半から底部を欠損し、全体の形状は明らかではない。最大部を胸部上位にとり僅かにすぼまるところで打ち欠き、上端はほぼ平坦である。胎土には砂粒を多く含み焼成は良く橙色を呈する。

下甕 (Fig.15)

遺存状態が悪く図のように安定した底部から胸部上半に最大径を有する壺である。頸部は遺存していないなかつたが、他の下甕では頸部から打ち欠いた例は無いので本例も口縁部だけを打ち欠いたものであろう。胎土には2mm前後の小砂粒を多く含み焼成は良く淡褐色を呈する。この甕棺からはもう1点が出土している。胸部中ほどから口縁部にかけて全体の1/3の遺存である。胸部上半に最大径をもち、

肩部には浅い段、口縁部は肥厚し外面に段をもつ。下窓より一回り小さく、胎土も異なることから3個の壺を組み合わせたものではない。

22号甕棺 (Fig.16)

B-4区の北東寄り、10号土壙に切られてその南に位置する。試掘調査時に確認した甕棺で、一部その時の削平を受け南東部は10号土壙の法面に沿って削られ遺存状況は極めて悪い。上窓に鉢を用い、下窓にそのままの壺を使用して組み合わせた複口式甕棺である。墓壙は甕棺ぎりぎりに掘られるが南側は上壙に切られ不明である。楕円形を呈すると考えられ、その規模は長軸現存長0.62m、短軸0.58m、主軸方位N-44°-W、埋置角度は35°前後を測るものであろう。

上窓 (Fig.17)

口縁部を外反させる鉢で底部を欠損する。下窓の口径に比較して、1/4程の遺存であるが口径が大きく45cm、残存器高は21.2cmを測る。胴部は丸く膨らみをもち口縁部を強く外反させ、外面の口縁下に明瞭な段をもつ。器表面が摩耗しており調整は明らかではない。胎土には3mm前後の小砂粒を多く含み焼成は良く茶褐色～灰褐色を呈する。

下窓 (Fig.17)

器表面の摩耗が激しく頸部から胴部上半までしか接合出来なかった。肩に浅く細い沈線を巡らし外反する頸部となる。

23号甕棺 (Fig.16, PL.4)

A-4区に位置する中期前半の成人用大型甕棺である。今回の調査では成人用の大型甕棺は24号・25号甕棺の3基を検出している。宅地造成により1m以上の削平されている部分に当たり、本来はもっと多くの成人用甕棺が有ったと考えられる。西側は宅地造成の地下げにより下窓の上部を削平され、南側は家屋解体時のごみ穴により主軸に平行に縦割りされていた。墓壙は現状では主軸方向で甕棺よりも少しだけ大きくなり、側面は甕棺よりも50cm弱広く掘り込まれ楕円形を呈するが本来もっと大きい掘り方であろう。現状での規模は長軸1.95m、短軸1.09mを測り、大型の窓と窓を組合せた複口式甕棺である。主軸方位はN-71°-E、埋置角度は10°前後を測るものであろう。

上窓 (Fig.17, PL.14)

大型の甕棺で底部は上げ底、口縁部は鶴先口縁で内側への発達が大きく、外面の端部を外傾させ中央部を瘤ませている。胴部中位にはM字突帯を巡らし、口縁部まで直線的に立ち上がる。口径63.2cm、器高92.3cm、底径11.6cmを測る。器表面が摩耗しているため調整は不明。

下窓 (Fig.17, PL.14)

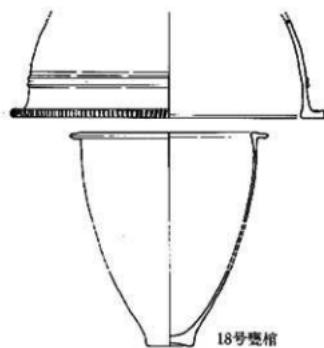
上窓と同規模の大型甕棺で底部を欠損する。上窓に比べ胴部に丸味をもち口縁部がすぼまる。鶴先口縁で上面が外傾し端部は平坦、内面は丸くなる。胴部中位にM字突帯、口縁下に三角突帯を巡らす。口径63cm、残存高87.7cm、胴部最大径67.5cmを測る。器表面が摩耗しているため調整は不明。

24号甕棺 (Fig.16, PL.5)

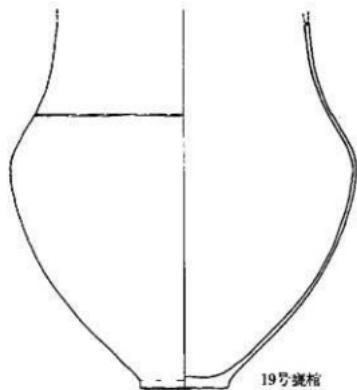
A-5区の北西端に位置する中期前半の成人用大型甕棺である。大型の鉢と窓を組合せた複口式甕棺である。宅地造成により削られた斜面に横穴を穿ったように埋置されていた。現状では墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、その規模は長さ1.52m、幅0.93m、主軸方位はS-59°-Wを測る。埋置角度は-6°を測り、下窓より上窓を低く置いている。

上窓 (Fig.17, PL.14)

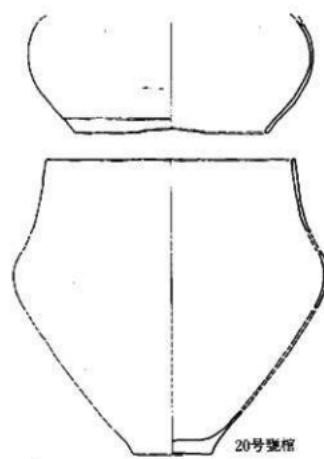
大型の鉢で底部は上げ底、口縁部は逆L字状口縁で外面の端部に刻みを、口縁部下にはM字突帯を巡らす。上面は内側へ緩やかな傾斜を示す。丸味をもつ胴部から上げ底の底部となる。口径55.1cm、



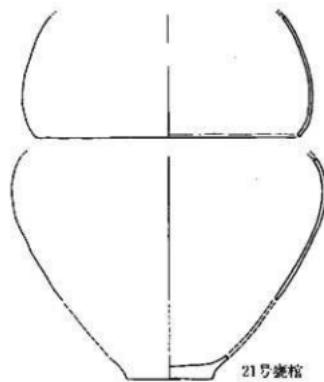
18号墓棺



19号墓棺

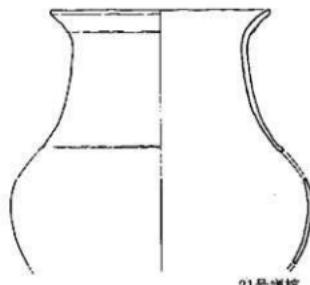


20号墓棺



21号墓棺

0 20cm



21号墓棺

Fig. 15 18~21号墓棺尖测图 (1/8)

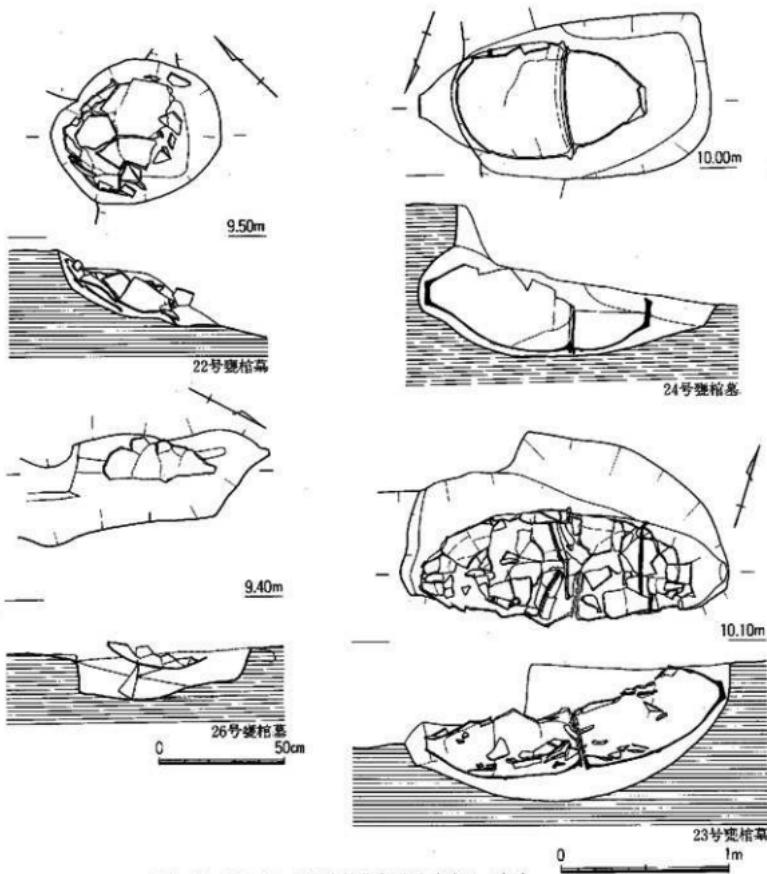


Fig. 16 22~24・26号壺棺基実測図 (1/20・1/30)

器高46.1cm、底径15cmを測る。器表面が摩耗しているため調整は不明。胎土には白砂粒を多く含み焼成良好で明褐色をなす。

下壺 (Fig. 17, PL. 14)

23号壺棺と同規模の大型壺棺で平底の底部である。胴部に丸味をもち口縁部がすぼまる。鋤先口縁で上面が外傾し端部は平坦、内面への発達が大きい。胴部中位にM字突帯を巡らす。11径64.3cm、器高88.6cm、底径12cmを測る。器表面が摩耗しているため調整は不明。胎土には2、3mmの砂粒を多く含み赤褐色を呈する。胴部下半には黒斑が認められる。

25号壺棺 (Fig. 18, PL. 5)

A-5区の北西寄り、18号と21号壺棺の間に位置する中期前半の成人用大型壺棺である。大型の壺と甕を組合せた接口式壺棺である。宅地造成により削られた平坦面に当たるが掘り方が深かったため甕

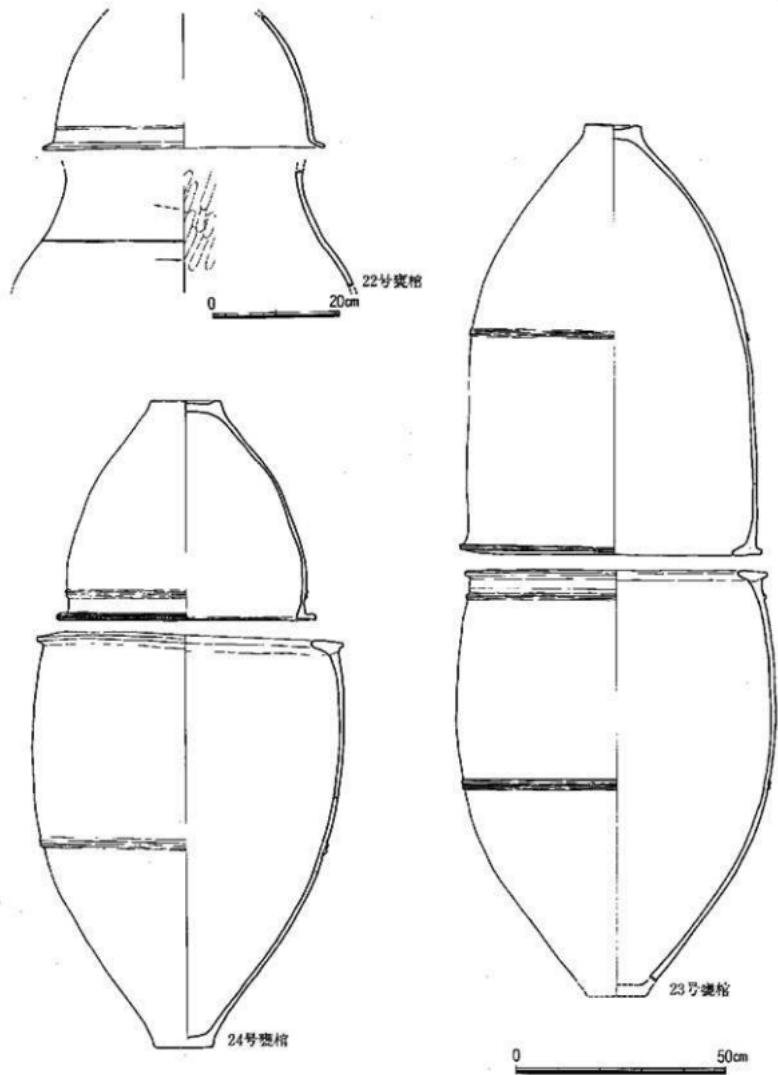


Fig. 17 22~24号喪棺実測図 (1/8・1/12)

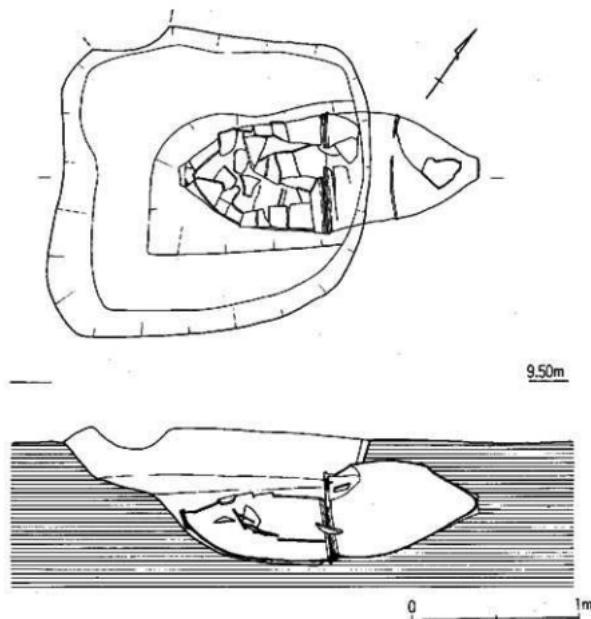


Fig. 18 25号墓実測図 (1/30)

の上面が崩落した程度である。上甕から下甕の胴部上半に至る大きな隅丸方形の墓壙を掘り込む。下甕は墓壙の側面に横穴を穿ち埋置する。上甕の部分は平坦面から更に掘り下げ下甕よりも低くなる。墓壙の規模は1.8m×1.78m、深さ0.8m、主軸方位はS-55°-Wを測る。埋置角度は-4°を測り、下甕より上甕を低く据えている。

上甕 (Fig. 19, PL.14)

大型の甕棺で上げ底気味の底部で最大径を口縁部にとる甕である。類部が僅かにすばまり口縁部の内面への発達が著しい。丸味をもつ胴部から口縁下で少し縦れ短く外反する。口縁部上面は平坦で外傾し、胴部中位には小さな三角突帯を貼り付ける。口径61.8cm、器高88.8cm、底径11cmを測る。器表面が摩耗しているため調整は不明。胎土には白砂粒、赤褐色粒を多く含み焼成良好で明褐色。

下甕 (Fig. 19, PL.14)

上甕とはほぼ同規模の大型甕棺である。最大径を口縁部にとり底部は僅かな上げ底で胴部中位に小さな三角突帯をめぐらし、胴部をいくぶん膨らませて丸味をもたせT字状口縁となる。上面は内傾し端部は丸くなり内面への発達も少なく断面が三角形となる。口径64cm、器高86.3cm、底径10.2cmを測る。器表面が摩耗しているため調整は不明。胎土には2、3mmの砂粒を多く含み赤褐色を呈する。胴部下半には黒班が認められる。

26号甕棺 (Fig. 16)

A-5区の南西部、24号甕棺の南5mに位置する。宅地造成による崖面に当たり、本来の位置を保つ

ているか疑問であるが、一応甕棺とする。大部分を削平され全体の形状、規模は不明である。甕棺は胴部から底部近くまで残る。墓壙は甕棺よりも一回り大きく掘り込まれ、床面よりかなり浮いた状態で甕棺を埋置している。甕棺は壺を用いた前期後半の所産であろう。

27号甕棺 (Fig.20, PL.5)

B-3区の南西部、3号溝に切られその南に位置する。壺と蓋の組合せの覆口式甕棺で上蓋は胴部中位で、下蓋は口縁部を打ち欠いている。甕棺の上部は削平を受け遺存状態は余り良好ではない。墓壙は上蓋の南を浅く掘り込み平坦部分を有し、その内側を甕棺より少し大きく掘り込む。墓壙の東側には上蓋と下蓋の接する位置に棺外の小壺を副葬している。小壺は口縁部を上にしてほぼ水平に据えられ上蓋に接している。墓壙は内側が梢円形でその南に隅丸長方形の平坦部があり二つが合体する。規模は長軸1.21m、短軸0.89m。主軸方位S-38°Eを測る。埋置角度は19°を測る。

上蓋 (Fig.21, PL.15)

壺を胴部中位で打ち欠いて深鉢状として上壺としている。胴部下に最大径をもつ壺で、その上で打ち欠く。底部は薄く、上げ底状となる。胴部中位には大きい黒班が認められ外面を研磨している。上端径43.8cm、器高28.3cm、底径11.3cmを測る。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で淡明橙色。

下蓋 (Fig.21, PL.15)

壺を口縁部で打ち欠いている。肩が強く張り、頸部が直立に近い直口壺に近い古い形態を示す。底部は厚い平底で、最大径を胴部上半にとる。頸部との境には細い沈線を巡らしている。上端はほぼ水平で丸くなる。胴部中位には黒班が認められ外面を研磨している。上端径38cm、器高60.5cm、底径16cmを測る。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色を呈する。

副葬壺 (Fig.23, PL.15)

検出時には口縁部を欠損していたが復元完形品である。円錐貼り付け状の底部で球形に近い胴部上位に最大径をもつ。頸部外面には沈線をもたないが胴部との変換線を残し内面には粘土接合痕をそのまま留めている。頸部は強くすばり直線的に開く口縁部となる。器表面は口縁部内面から外面には研磨の跡が見られる。内面の胴部上半から口縁部外面にかけて黒色顔料が観察できる。

28号甕棺 (Fig.20)

10号土壙の南東、12号と22号甕棺の間に位置する。宅地造成により甕棺の大半は削平され胴部の低い所に位置する部分だけが遺存する。壺の胴部破片であるが全体の規模、形態は不明である。

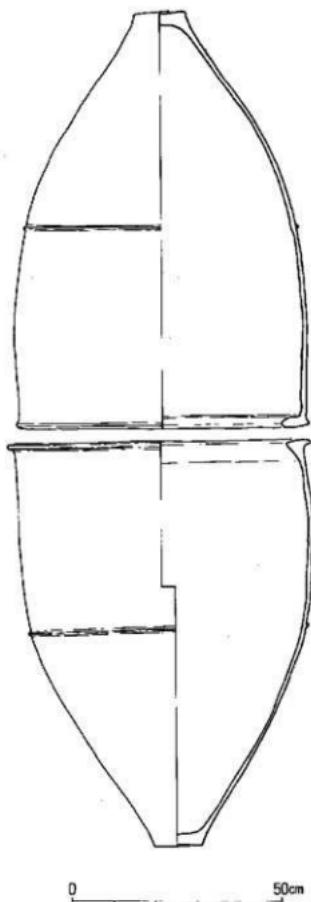


Fig. 19 25号甕棺実測図 (1/12)

29号壺棺 (Fig.20, PL.5)

B-2区、中央寄りの北西端の斜面に位置する。前期末の壺棺で上甕には深めの鉢をそのまま使用し、下甕には頸部から口縁部を打ち欠いた壺を用いている。墓壙は壺棺より一回り大きく掘られ平面形は楕円形を呈する。その規模は長軸0.67m、短軸0.6m、主軸方位N-58°-W、埋置角度は5°前後を測るものであろう。

上甕 (Fig.21, PL.14)

上げ底の深鉢をそのまま用いて上甕としている。底部から大きく開く体部となり口縁部は外反し、外面に粘土帯を貼り付け段をなす。摩耗が著しいが外面は研磨が観察できる。口径32cm、器高19.8cm、底径9.6cmを測る。胎土には小砂粒を多く含み、焼成良好で赤褐色をなす。

下甕 (Fig.21, PL.14)

壺を用い頸部から口縁部を打ち欠いている。上げ底の底部から扁球形の胴部となり最大径を中位にとる。肩部には突帶を巡らし、胴部中位には焼成後の穿孔が見られる。胴部外面は範研磨、内面はナデ調整である。上端径20cm、胴部最大径46cm、器高34.7cmを測る。

30号壺棺 (Fig.20, PL.5)

B-4区南西端、14号から18号壺棺の集中する西端に位置する。土壙は西側が調査区外に拡がるが全容は窺える。上甕は胴部上半から上を、下甕は口縁部を打ち欠いた壺を用いた覆口式壺棺である。墓壙は壺棺よりもかなり大きく掘り込まれ、平面形は楕円形、その内側を更に深く掘り立めている。その規模は長軸1.34m、短軸0.8m、主軸方位S-24°-E、埋置角度17°を測る。上甕と下甕の接合部の西側で甕に接して小壺を副葬する。口縁部を上には水平に据えている。

上甕 (Fig.21, PL.15)

胴部上半を打ち欠いた壺である。僅かな上げ底の底部で胴部中位に最大径をもち、その上で打ち欠いて上端は平坦となる。上端径35.7cm、胴部最大径41.6cm、器高24.6cm、底径11.8cmを測る。焼成は良好で茶褐色、胴部には1か所に黒斑が認められる。

下甕 (Fig.21, PL.15)

口縁部を打ち欠いた壺である。調査時には底部から頸部まで遺存していたが器表面の摩耗が著しく胴部を接合することが出来なく、調査時の図を参考に復元した。底部は僅かな上げ底で胴部上位に最大径をとり内傾する頸部となる。肩部には細い沈線を巡らす。

副葬壺 (Fig.23, PL.15)

小型の壺で口縁部の大半を欠損するが他はほとんど遺存する。胴部中位に最大径をもつ球形の副葬壺で肩部に範で押えた沈線状の段をもつ。同様に底部と胴部の境も範で研磨状のナデを行ない境を明瞭にする。口縁と頸部の境にも細い沈線を巡らし強く外反する口縁部となり、端部は丸く收める。口縁部内面から外面全体が横位の研磨、胎土に砂粒を少量含み焼成は良好で淡橙褐～茶褐色を呈する。

31号壺棺 (Fig.20, PL.5)

30号壺棺の東1mに位置し壺棺の集中する中央にあたる。遺存状態は悪く下面以外は内部に崩落していた。上甕は胴部上半から上を、下甕は口縁部を打ち欠いた壺を用いた覆口式壺棺である。墓壙は壺棺よりも大きくなっている。墓壙の形態は楕円形で長軸0.89m、短軸0.69m、主軸方位S-29°-E、埋置角度23°を測る。底面は上甕の縁で段をもたせている。

上甕 (Fig.21, PL.16)

胴部上半を打ち欠いた壺である。平底の底部で胴部中位に最大径をもち、その上で打ち欠いて上端は平坦となる。上端径32.5cm、胴部最大径33.8cm、器高20.4cm、底径10.6cmを測る。焼成は良好で概

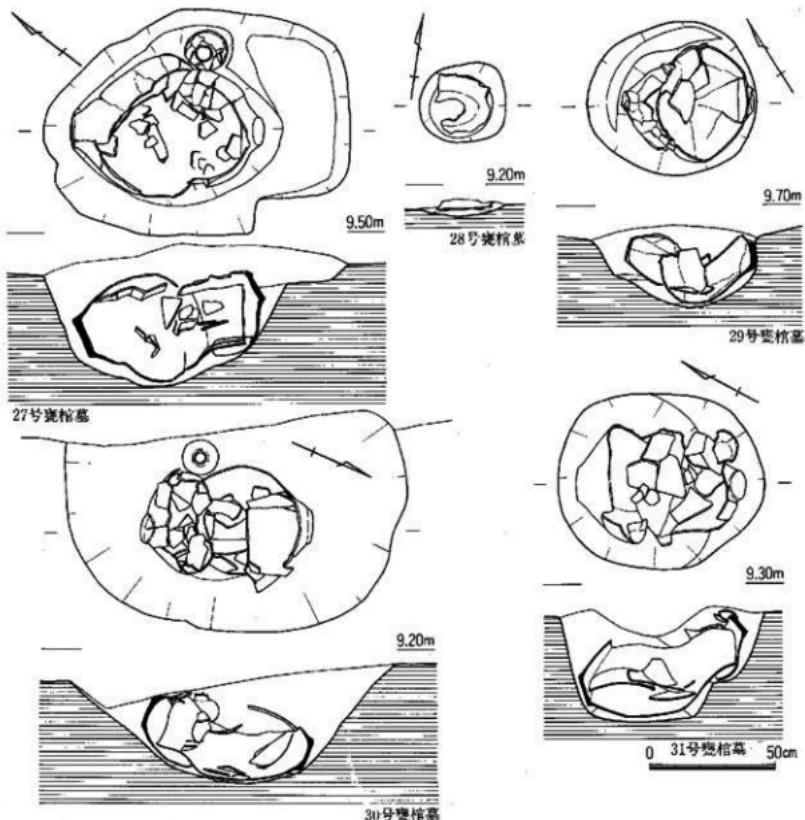


Fig. 20 27-31号木棺墓実測図 (1/20)

褐色である。

下甕 (Fig.21, PL.16)

口縁部を打ち欠いた壺である。底部は僅かな上部で器壁が薄い。胴部上位に最大径をとり内傾する頸部となる。頸部の内傾は少なく外反して口縁部となるので肩部には不明瞭で痕跡的な段となる。口径30.5cm、胴部最大径49.5cm、器高60cm、底径13cmを測る。

32号覆棺 (Fig.22)

B-1区、25号、27号木棺墓の西側の丘陵裾部に位置する。上甕には鉢をそのまま使用し、下甕には胴部上半から上を打ち欠いた壺を用いた覆口式覆棺である。墓擴は覆棺よりもかなり大きく掘り込まれ、平面形は楕円形で、その規模は長軸0.93m、短軸0.62m、主軸方位S-55°-E、埋置角度27°を測る。

上甕 (Fig.23, PL.16)

復元完形品の深鉢である。平底で内溝して立ち上がる体部となり、口縁部は強く外反する。口縁部

外面には肥厚や段は認められなく、時期的に新しいものである。口径40.4cm、底径12.2cm、器高30.6cmを測る。焼成は良好で淡黄褐色、口縁部の内面から胸部外面に刷毛目調整が残る。

下甕 (Fig.23, PL.16)

口縁部を打ち欠いているが下部の頸部で頸部は余りすばまらない壺であるが壺に近い形態をとるものであろう。時期的にこの甕群の中では新しく金海式への変化を窺わせる。平底の底部で最大径を胸部下半にとり、ほとんど区別のつかない肩部に二本の沈線を巡らしている。器表面の摩耗が著しく調整は不明。胎土には砂粒を多く含み焼成良好で淡褐色を呈する。上端径39.1cm、胸部最大径46.5cm、底径11.7cmを測る。

33号甕棺 (Fig.22, PL.5)

B-1区、27号木棺墓の北西隅に隣接し調査区際に位置する。上甕に鉢、下甕に壺を打ち欠くことも無くそのまま使用している覆口式甕棺である。墓壙は甕棺よりもかなり大きく掘り込まれ、平面形は東側は浅いピットに切られ角張るがほぼ楕円形で、その規模は長径で0.81m、短軸0.67m、主軸方位S 67° E、埋置角度35°前後を測るものであろう。上甕の体部に接して小壺を副葬している。口縁部を上にしているが水平ではなく傾斜している。

上甕 (Fig.23, PL.17)

復元完形品の深鉢である。平底で内湾して立ち上がり体部となる。体部上半が内湾し口縁部は強く外反する。口縁部外面には肥厚や段は認められなく32号甕棺とともに、時期的に新しいものである。口径40.3cm、底径11.1cm、器高25.9cmを測る。胎土には砂粒を多く含み焼成は良好で橙褐色。

下甕 (Fig.23, PL.17)

最大径を胸部中位にとる端正な壺で復元完形品である。安定した平底の底部で肩部には二条の沈線を巡らし内傾する頸部となる。口縁部は強く外反し、肥厚させて頸部との境に段をもつ。口縁部は僅かにゆがんでいる。口径33.7cm、胸部最大径43.4cm、器高50.9cm、底径11.5cmを測る。胎土には砂粒を多く含み焼成は良好で淡明橙色。

副葬壺 (Fig.23, PL.17)

外面研磨の小壺で口縁部を欠損する。平底で胸部中位に最大径をもつ。頸部と胸部の境の内面には粘土接合の跡が明瞭に残り、外面には稜線が微かに痕跡を残し、口縁部は緩やかに外反する。器表面の摩耗が著しいが外面から口縁部内面にかけて一部丹塗研磨が見られる。胎土には3mm前後の砂粒を多く含み、焼成良好で赤褐色をなす。

34号甕棺 (Fig.22)

調査区の北西隅、B-1区に位置し、32号木棺墓の南西隅を切っている。遺存状態は極めて悪く上甕は底部から胸部、下甕も頸部が内側へ落していった。上甕に胸部上半を打ち欠き、下甕に口縁部を打ち欠いたと考えられる壺を用いた覆口式甕棺である。墓壙は甕棺よりも少し大きく掘り込まれ、平面形はほぼ楕円形で、その規模は長径で0.95m、短軸0.71m、主軸方位N-71°-W、埋置角度60°前後を測るものであろう。

上甕 (Fig.23)

最大径を胸部中位にもつ壺で、その上を打ち欠いて鉢状の形態にした上甕である。器壁の薄い上げ底状の底部で内湾して胸部となる。上端はほぼ平坦である。上端径59.2cm、胸部最大径60cm、底径16cm、器高36.4cmを計る。胸部には黒斑が認められ、胎土には砂粒を多く含み焼成は良好で赤褐色。

下甕 (Fig.23, PL.16)

頸部から口縁部を打ち欠いた壺である。最大径を胸部上位にとり、肩が張り内傾の強い頸部となる。

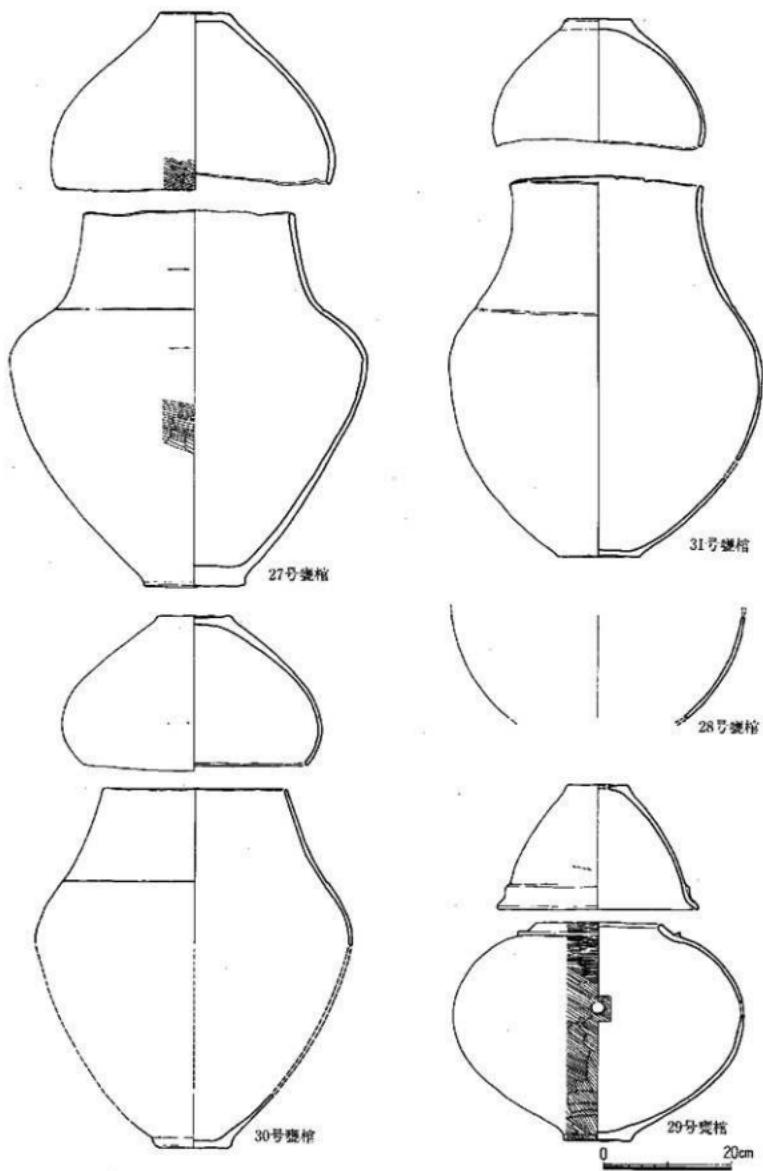


Fig. 21 27~31号葬棺墓室剖面图 (1/8)

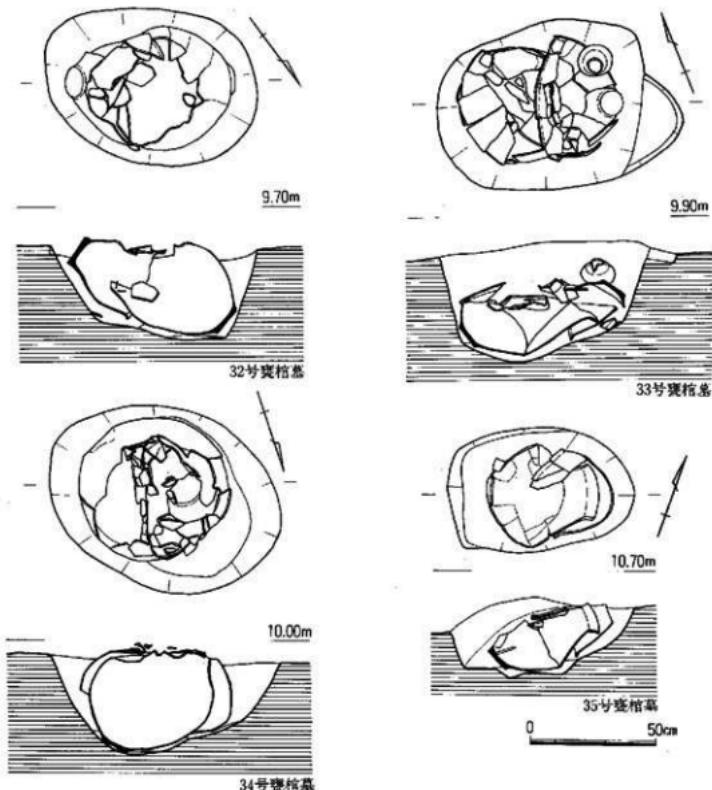


Fig. 22 32~35号甕棺墓実測図 (1/20)

上げ底の底部で肩部には一条の沈線を巡らす。口縁部内面から外面全体に研磨を施す。上端径31.4cm、胸郭最大径50.5cm、器高51.2cm、底径12cmを測る。胎土には3mm前後の白砂粒、赤褐色砂粒を多く含み焼成は良好で明黄褐色、胴部中位には相対する位置に黒班が認められる。

35号甕棺 (Fig.22)

B-1区、調査区の北隅、傾斜面の壁際に検出した小型の甕棺である。遺存状態は極めて悪く上半部は削平されていた。上甕には甕を、下甕には甕をそのまま使用した覆口式甕棺である。墓壙は甕棺よりも少し大きく掘り込まれ、平面形はほぼ橢円形で、その規模は長径で0.75m、短軸0.48m、主軸方位N-71°E、埋置角度31°前後を測るものであろう。

上甕 (Fig.25, PL.17)

甕をそのまま使用し、胴部下半から底部を欠損している。丸味をもつ胴部から口縁下で僅かにすばり強く外反する口縁部となる。口唇部は丸く收まる。器表面は摩耗しているが内外面とも研磨面はナデ調整を行なう。口径35cm、残存器高23cmを計る。胎土には白砂粒を多く含み焼成は良好で外面は

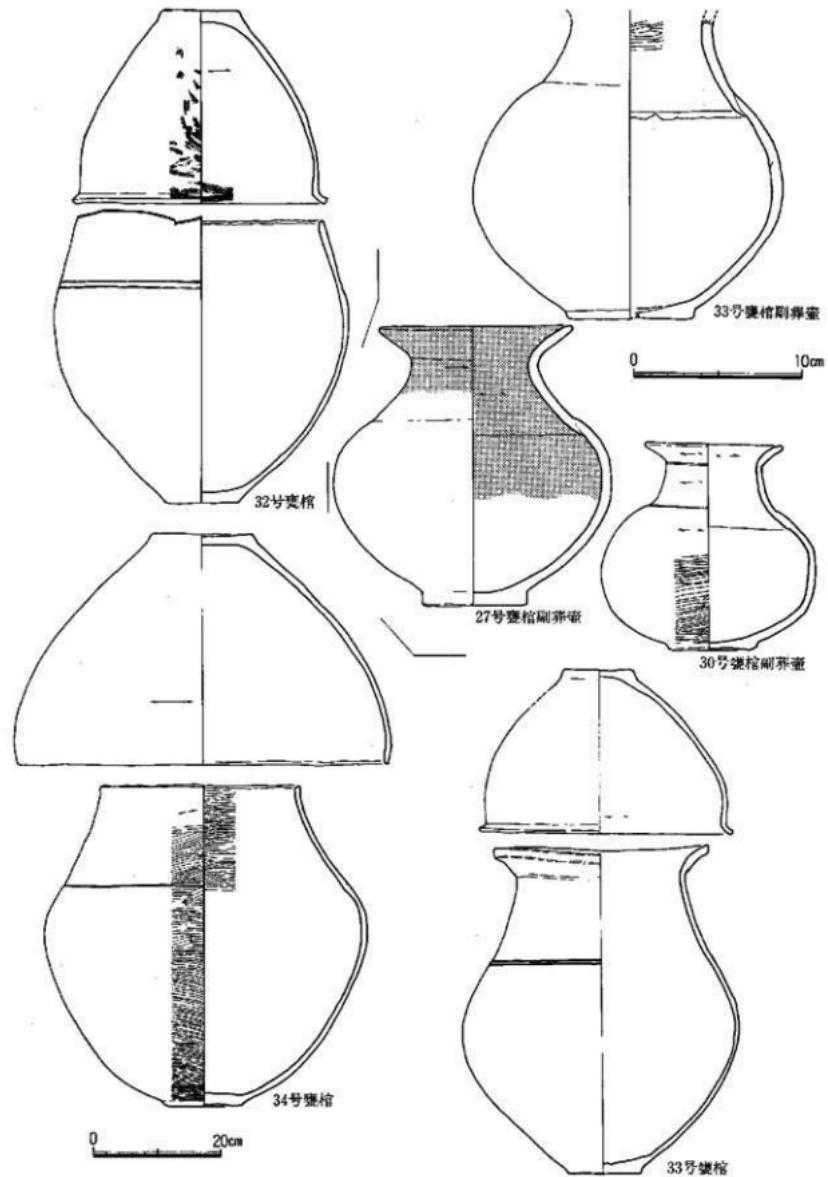


Fig. 23 32~34号甕棺、27·30·33号甕棺墓副葬壶测图 (1/8·1/3)

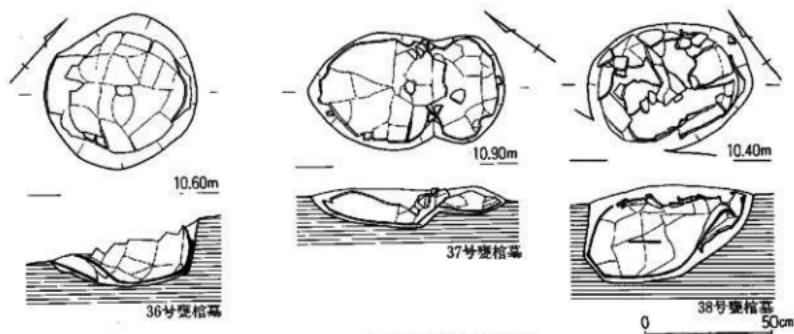


Fig. 24 36~38号壺棺基実測図 (1/20)

灰褐色、内面は黒褐色をなす。

下壺 (Fig.25, PL.17)

小型の完形品の壺をそのまま下壺としている。最大径を胴部上位にとり、内傾の弱い頸部、上げ底の厚い底部で肩部には沈線の痕跡を留める。頸部から強く外反する口縁部は肥厚させ外面に段をもつ。器表面は摩耗して調整は明らかではないが研磨を施すものであろう。口径24.2cm、胴部最大径37cm、器高39.4cm、底径10.8cmを計る。胎土には白砂粒を多く含み焼成は良好で黄褐色を呈する。

36号壺棺 (Fig.24)

B-1区、35号壺棺の南1mに位置する壺棺である。遺存状態は極めて悪く上壺の大半と下壺の半分を削平される。上壺には胴部上半を打ち欠いた壺、下壺には口縁部を打ち欠いた壺と考えられる覆口式壺棺であろう。墓壙は壺棺よりも少し大きめに掘り込まれ、平面形は歪な円形であるが傾斜下面の上壺の墓壙は削平されているので本来は梢円形を呈するものであろう。その規模は長径で0.60m、短軸0.61m、主軸方位N-50°-E、埋置角度25°前後を測るものであろう。

上壺

頸部だけの破片で接合することができず詳細不明。

下壺 (Fig.25, PL.16)

頸部から口縁部を打ち欠いた壺である。薄い平底の底部で胴部中位に最大径をもち内傾の弱い頸部となる。肩部には四条の浅い沈線を巡らす。器表面は摩耗しているが一部に丹塗研磨が認められ、全体に及ぶものであろう。上端径31cm、胴部最大径43.4cm、器高43cm、底径14cmを測る。胎土には白砂粒を多く含み焼成は良好で明橙色ないし淡黄褐色を呈する。

37号壺棺 (Fig.24)

A-1区とB-1区の境に位置する。遺存状態は極めて悪く壺棺の上半部をほとんど削平される。上壺には頸部から口縁部を打ち欠いた壺、下壺には口縁部を打ち欠いた壺とを組合せた覆口式壺棺であろう。墓壙は壺棺よりも少し大きめに掘られるが本来はもう少し大きめに掘り込まれたものであろう。平面形は瓢形を示すが本来は梢円形を呈するものであろう。その規模は長径で0.88m、短軸0.47m、主軸方位はS-37°-Eを測るものであろう。

上壺 (Fig.25)

頸部だけ遺存するが壺の破片である。最大径を胴部中位にとり、肩部の上で打ち欠き、胴部下半か

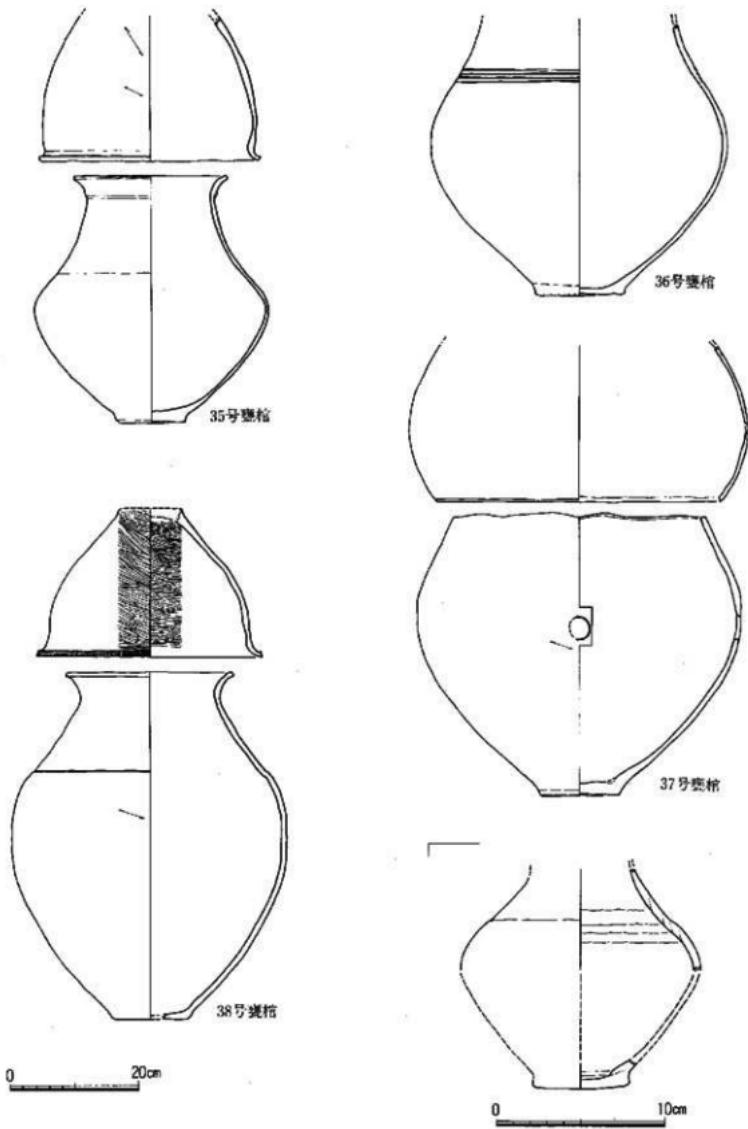


Fig. 25 35—38号 sarcoph、38号 sarcoph基副葬物実測図 (1/8・1/3)

ら底部を欠損する。器表面が摩耗しているが外面は研磨、内面はナデ調整である。胎土には砂粒を多く含み黄褐色をなす。

下甕 (Fig.25, PL.18)

頸部から口縁部を打ち欠いた壺である。厚い平底の底部で胴部中位に最大径をもち内傾の弱い頸部となる。胴部中位には焼成後の穿孔が認められる。器表面が摩耗しているが外面は研磨、内面はナデ調整であろう。上端径37.8cm、胴部最大径51cm、器高44.5cm、底径12.4cmを測る。胎土には白砂粒を多く含み焼成は良好で茶褐色を呈する。

38号甕棺 (Fig.24)

B-1区の南西部、西側を2号溝に切られ東側で26号土壙を切りその間に位置する。遺存状態はあまり良くなく上甕の上半部と下甕の一部を削平される。上甕には鉢、下甕には壺を、打ち欠くことなくそのまま用いる覆口式甕棺である。墓壙は甕棺より少し大きく掘り込まれ、平面形は棺円形を呈する。その規模は長径で0.65m、短軸0.50m、主軸方位はS-65°-E、埋置角度25°前後を測るものであろう。

上甕 (Fig.25, PL.17)

復元完成品の深鉢である。底部は欠損するが平底と思われ、内湾して立ち上がる体部となり、体部上半で直立気味となり口縁部は強く外反する。口唇部外面には上、下端に刻みを巡らす。口径36cm、底径11.1cm、推定器高23cmを測る。外面とも研磨を行ない底部近くには刷毛目調整跡が残る。胎土には砂粒を多く含み焼成は良好で外面は灰褐色、内面は黒褐色を呈する。

下甕 (Fig.25, PL.17)

最大径を胴部上位にとり、胴部の張りが少ない壺である。薄い造りの平底の底部で緩やかに内湾する胴部から肩部には浅い不明瞭な段をもつ。強く内傾する頸部で口縁部は強く外反し、端部を丸く收める。口径26.2cm、胴部最大径43cm、器高55.7cm、底径12cmを測る。胴最大部には黒斑が見られ、胎土には砂粒を多く含み焼成は良好で黄褐色、外面は研磨、内面はナデ調整を行なう。

39号甕棺 (Fig.26)

A-1区の南西部、1号甕棺の北1mに位置し、今回の調査では最も高い位置にあたる。しかしその東側は丘陵斜面を水平に造成されているので、斜面上部にも多く遺構が存在していたものであろう。遺存状態は極めて悪く、下甕の下半部を残しているだけで単棺であるのか組合せ式なのか不明である。他の例から見ると覆口式甕棺の可能性がある。墓壙は現状では甕棺ぎりぎりに掘り込まれ平面形は棺円形を呈する。その規模は長径で0.41m、短軸0.39m、主軸方位はS-47°-Eを測るものであろう。

下甕 (Fig.27)

最大径を胴部中位にとり、安定感のある壺で胴部上半から口縁部を欠損する。厚い平底の底部で球形に近い丸い胴部となる。胴部最大径47.4cm、残存器高40cm、底径11.5cmを測る。胎土には砂粒を多く含み焼成は良好で淡黄灰褐色、器表面は摩耗しているが外面は研磨、内面はナデ調整であろう。

40号甕棺 (Fig.26)

B-1区の中央部、27号、28号木棺墓に挟まれた間に位置する。さらに東側は2号溝に、甕棺の中央部をピットに切られ、遺存状態はあまり良くない。下甕のみが遺存しているが上塙の深さからも単棺といえよう。平面形は北東側の幅を狭める隅九方形を呈する。その規模は長さ1.15m、最大幅0.91m、主軸方位はS-46°-Eを測る。埋置角度は底部の位置からすると口縁部が低くなろう。

甕棺 (Fig.27, PL.18)

底部を一部欠くがほぼ復元完成品の壺である。最大径を胴部中位にとり、球形に近い胴部で肩部と口縁部下に不明瞭な段をもつ。底部は薄く胴部との境も丸くなる。頸部は直立気味に立上り口縁部は

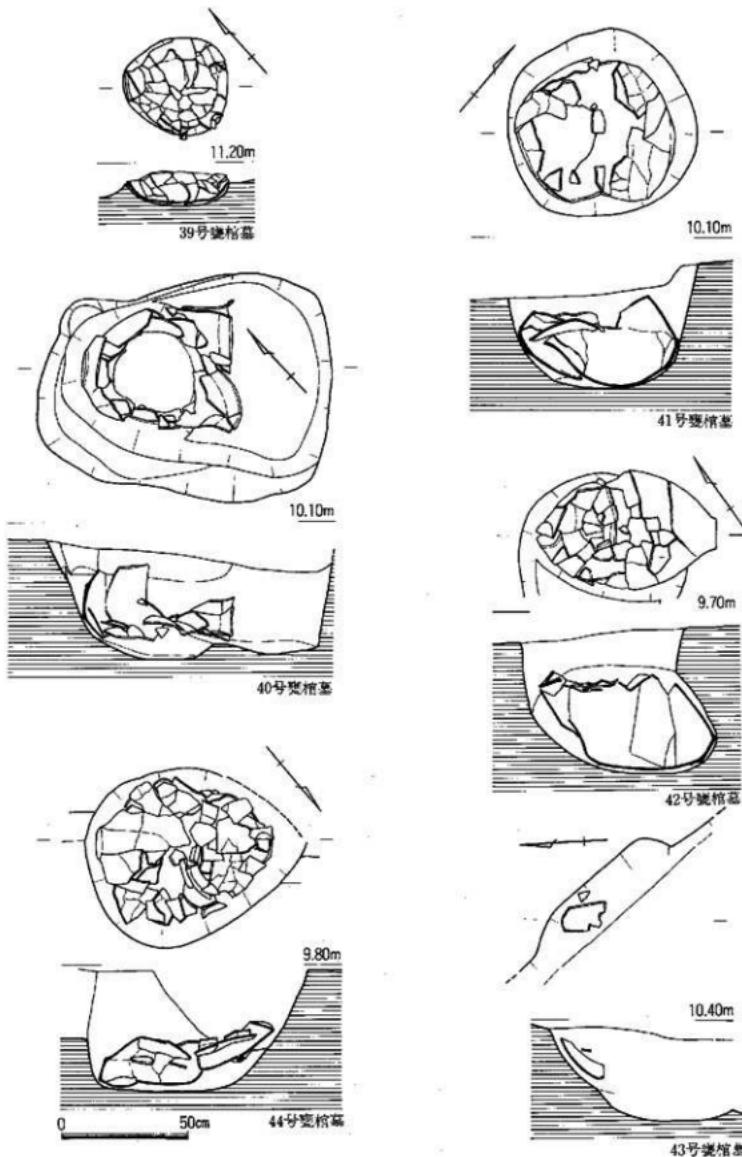


Fig. 26 39~44号變相基実測図 (1/20)

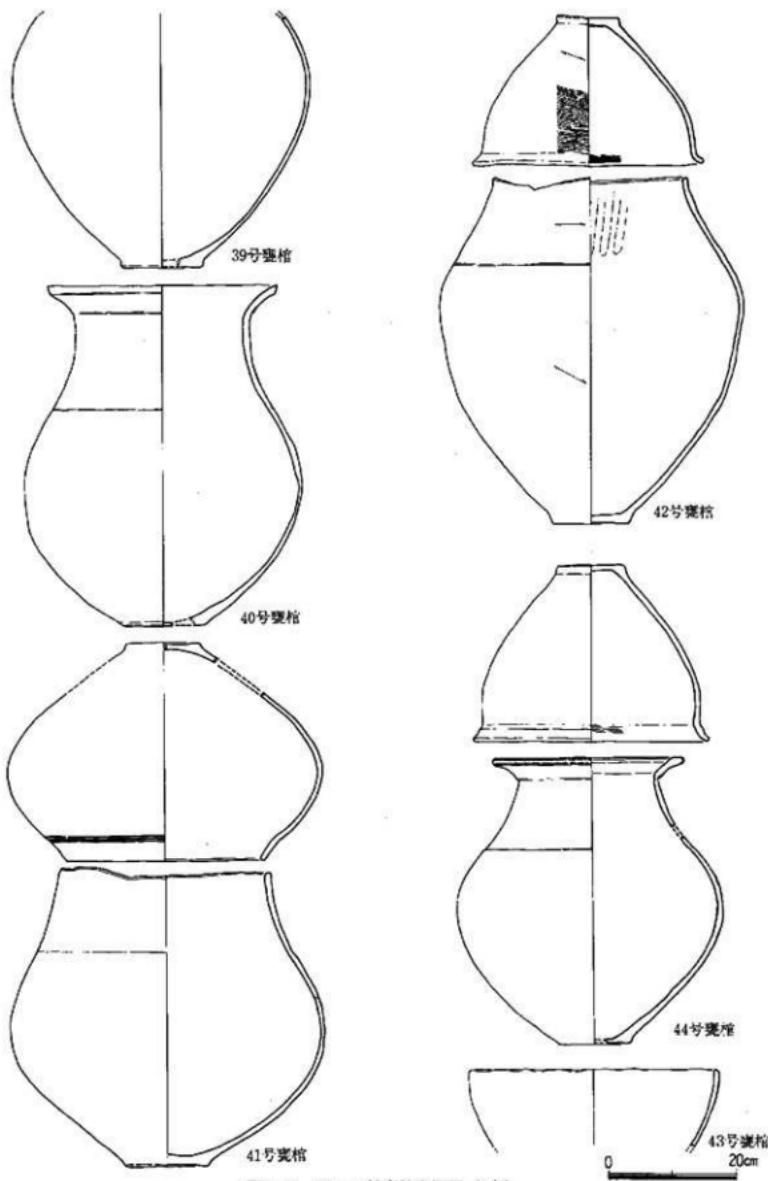


Fig. 27 39~44号壺棺実測図 (1/8)

強く外反し、僅かに肥厚させ、上端部を尖らせ外面を内側へ傾斜させている。口径36cm、胴部最大径44cm、器高54.9cm、底径12.9cmを測る。胎土には砂粒を多く含み焼成は良好で黄褐色、器表面は摩耗しているが一部に丹塗の跡が現われ外面は丹塗研磨、内面はナデ調整と考えられる。

41号甕棺 (Fig.26)

B-1区、調査区の北西隅に位置する。32号木棺墓を切り、南に34号甕棺、東に35号甕棺がある。一部調査区の壁面の下まで拡がる。上甕は肩部から上半を、下甕は口縁部を打ち欠いた壺を用いた覆口式甕棺である。墓壙は甕棺より僅かに大きく掘り込まれ、平面形は正ではあるがほぼ円形に近い掘り込みである。その規模は最大径0.78m、主軸方位S-57°W、埋置角度20°前後を測ものであろう。

上甕 (Fig.27)

肩部から上を打ち欠いた壺である。胴部中位に最大径をもつが胴部の張りが強く算盤状の胴部となる。底部は上げ底で薄く、肩部に三條の沈線を巡らす。器表面の摩耗が激しいが一部に丹塗の痕が観察でき全体を丹塗研磨を施すものであろう。胎土には小砂粒を多く含み焼成は良く赤褐色を呈する。

下甕 (Fig.27, PL.18)

口縁部を打ち欠き、最大径を胴部中位にとり、胴部が強く張り、頸部がありすばまらない安定感のある壺である。上げ底気味の底部から内湾する胴部となり、肩部には浅い不明瞭な段をもつ。頸部の内傾は弱く内傾し、口縁下では直立する。上端径33.3cm、胴部最大径50cm、器高48.3cm、底径13.5cmを測る。胴最大部には黒斑が見られ、胎土には砂粒を多く含み焼成は良好で黄褐色、器表面は摩耗しているが外面は研磨、内面はナデ調整であろう。

42号甕棺 (Fig.26)

B-1区の中央部、32号甕棺と25号木棺墓の間に位置する。上甕は内側へ崩れ平坦となるが下甕は本米の位置を保つ。上甕は鉢をそのまま使用し、下甕は口縁部を打ち欠いた壺を用いた覆口式甕棺である。墓壙は竪穴を掘り込み南東側に斜めに壙を掘り下甕を据えている。削半が浅かったためこのような状態を示すが他の甕棺もこのような掘り方を示すものであろう。墓壙は甕棺より僅かに大きく掘り込まれ、平面形は梢円形、規模は長軸0.66m、短軸0.48m、主軸方位N 54° W、埋置角度29°を測る。

上甕 (Fig.27, PL.18)

復元完形品の深鉢である。底部は平底から内湾して立ち上がる体部となり、体部上半で直立気味となり口縁部は強く外反する。口唇部は丸く收まる。口径37cm、底径10.1cm、推定器高23.5cmを測る。外面には研磨、口縁部内面には刷毛目調整痕が残る。胎土には砂粒を少し含み焼成は良好で茶褐色。

下甕 (Fig.27, PL.18)

最大径を胴部上位にとり、胴部の張りが少ない壺である。薄い上げ底の底部の底部で緩やかに内湾する胴部から肩部には浅い不明瞭な段をもつ。緩やかに内傾する頸部で口縁部は打ち欠く。上端径31cm、胴部最大径48cm、器高55.5cm、底径12cmを測る。胎土には砂粒を多く含み焼成は良好で黄褐色、外面は研磨、内面は頸部に指ナデが残る。

43号甕棺 (Fig.26)

B-1区の中央部、30号木棺墓の西側に位置する。大半は2号溝に切られ消失し、胴部の破片が僅かに遺存していた。土器片は丹塗の壺で胴部下半である。

44号甕棺 (Fig.26)

B-1区の中央部、34号木棺墓の西に位置する。甕棺は内側へ崩れ落ちた状を留めない。上甕は鉢、下甕も壺をそのまま用いた覆口式甕棺である。土壙は甕棺より僅かに大きく掘り込まれ、平面形は梢円形、規模は長軸0.88m、短軸0.68m、主軸方位N-51°Wを測る。

上甕 (Fig.27, PL.18)

復元完形品の深鉢である。底部は平底から内湾して立ち上がる体部となり、体部上半で直立気味となり口縁部は強く外反し、外面に肥厚の痕跡を留め稜線をもつ。

下甕 (Fig.27, PL.18)

最大径を胴部中位にとる球形の胴部となる甕である。薄い上げ底の底部で緩やかに内湾する胴部で肩部には浅い不明瞭な段をもつ。緩やかに内傾する頸部で口縁部は強く外反する。口縁部の外面には段をもち内側にも平坦面をもち頸部との境に稜を有する。

3. 木棺墓の調査

今回の調査で24基の木棺墓を調査することが出来た。発掘の調査に追われたため、当初確認できたのは小壺が出土した3号木棺墓と、石組の4号木棺墓であった。その2基を掘り下げるにいたが遺構の性格から掘った土をそのまま埋めているため地山と覆土の区別が困難であった。折からの乾燥で地表が被削れた状態で水を撒くこともままならず困難を極めた。また乾燥した土では移植鍬では歯が立たず、止む無く手鋤で掘り進めたため完形品の小壺などがかなり破損してしまった。

木棺墓は丘陵裾部の標高9.5mから10.25mの間にほぼ二列に埋葬されている。平面形は隅丸長方形で小口に板石を据えるものや、石蓋と考えられる土壇も存在する。主体部が確認出来ない土壇も、いちおう木棺墓としたが中央部に主体部を確認出来ないものもあったが小壺が出土し木棺墓の可能性が強いと言えよう。木棺墓には小壺を一個体棺外副葬するが複数固体の例もある。木棺墓の番号は発見順に土壇の番号と一緒に番号としたので欠番がある。説明の都合上東側の列をA列、西側をB列とする。

3号木棺墓 (Fig.28, PL. 6)

B-2区の北側、A列にある。墓壇の平面形は隅丸長方形で南西部の幅を括げる。その規模は長さ2.19m、最大幅1.01m、深さ0.53mを測る。北隅と中央部に小壺を二点副葬している。いずれも棺外副葬で北隅の壺はほぼ水平に据えられ本来の姿を保つが、中央部の壺は横倒しとなり、棺の上に置かれていたものが横転したと考えられる。墓壇の中央部には扁平な板状の石行が四個体検出された。中心部に向かって落ち込んでおり、水平であったものが棺材の腐朽に従って沈下したものであろう。さらに中央部には主体部と考えられる長方形の掘り込みが確認でき、その規模は長さ1.43m、最大幅0.7m、

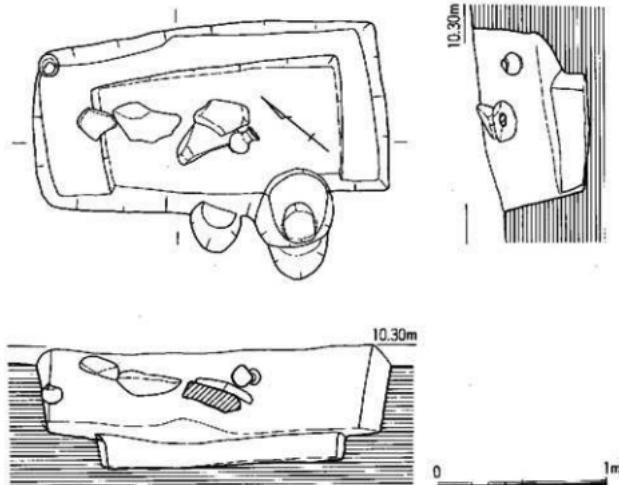


Fig. 28 3号木棺墓実測図 (1/30)

深さ0.17mを測る。

4号木棺墓 (Fig.29, PL. 7)

B-2区の中央部、A列に属し3号木棺墓の南3mに位置する。表土除去時にすでに上面に右の表面が表れていた。墓壇の中央部に主体部を覆う状態で配石され、長方形を呈し、東側の石材は縦位置に据え、あたかも組合せの石棺の様な状態であった。その規模は長さ1.56m、幅0.61mを測る。3号木棺墓の配石と同じく縁よりも中心部が落ち込んでいる。その下にも幾つかの石が落ち込んでいるが床面

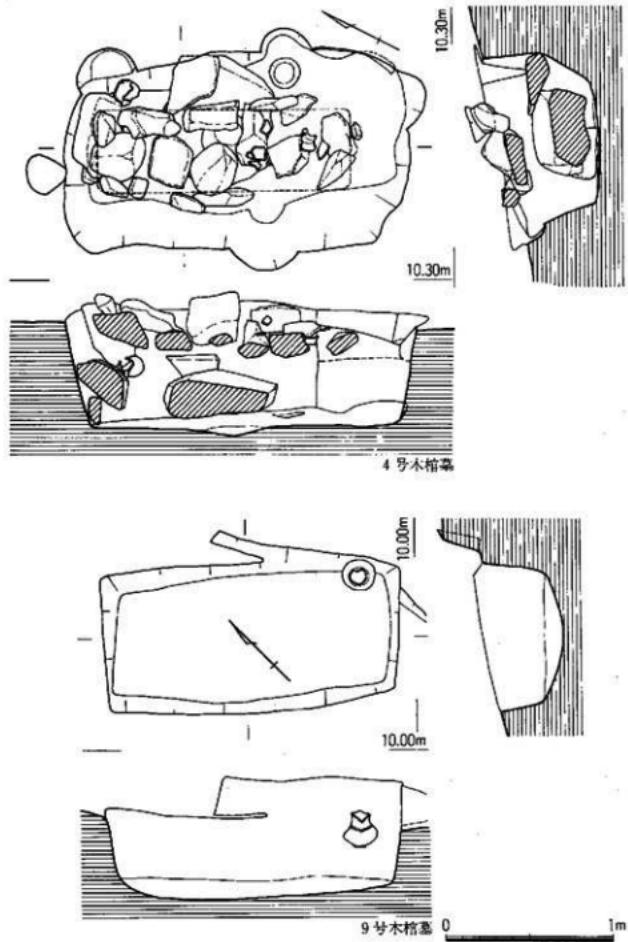


Fig. 29 4・9号木棺墓実測図 (1/30)

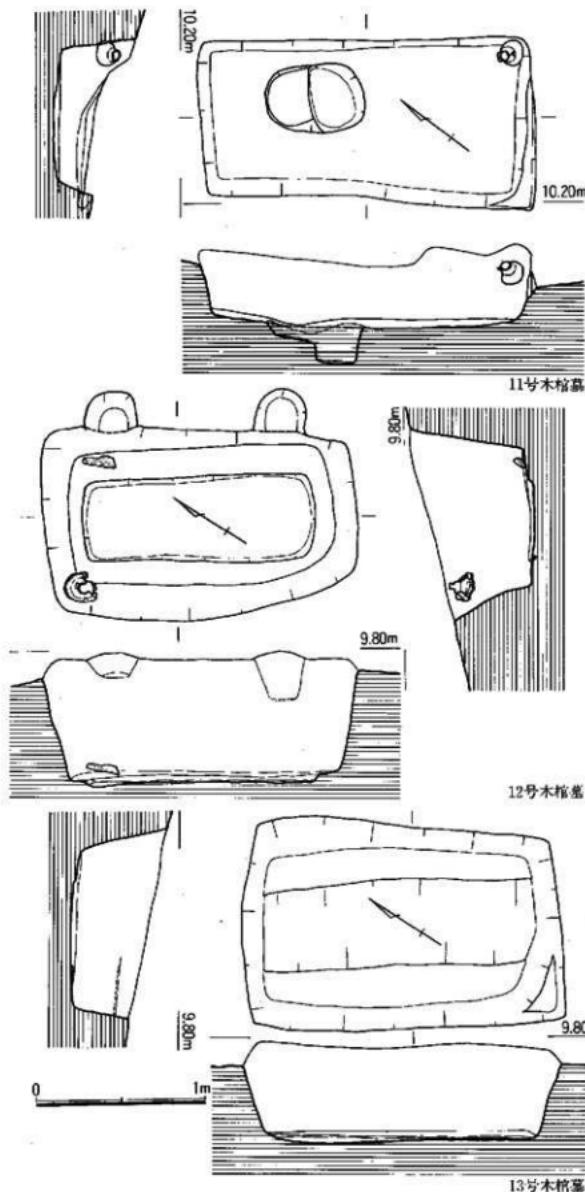


Fig. 30 11~13号木棺墓実測図 (1/30)

近くからは70から80cmを測る大きな石が下面を水平に検出された。また床面に接して北小口の縁に沿って厚さ5cm前後の板石を立てている。墓壙は後世のピットに数箇所切られているが全体の形状は明らかである。平面形は隅丸長方形で長さ2.08m、幅1.16m、深さ0.66mを測る。遺物は上層の石組の上から二点、中層から一点の小壺が出土している。かなり破損した状態での出土であるが棺外副葬品であろう。主軸はN-27°-Wを測る。

9号木棺墓

(Fig.29, PL. 7)

B-3区、A列の南端部に位置する。平面形は隅丸長方形である。規模は長さ1.76m、幅0.89m、深さ0.69m、主軸はN-45.5°-Wを測る。主体部は不明であるが東隅に床面から25cm上に棺外副葬品の壺が一点出土した。

11号木棺墓 (Fig.30)

B-2区、B列の南端部4号木棺墓の西側に並行している。平面形は長方形である。規模は長さ1.98m、幅0.92m、深さ0.48m、主軸はN-42°-Wを測る。主体部は不明であるが東隅に床面から20cm上に棺外副葬品の壺が斜めに倒れた状態で一点出土した。床面の北西部に二段のピットが掘り込まれてるのは新しい時期のものである。

12号木棺墓

(Fig.30)

B-2区、B列の南端部、4号木棺墓の西側に並行している。平面形は隅丸長方形でその規模は長さ1.88m、幅1.52m、深さ0.67m、主軸はN-32.5°-Wを測る。主体部は墓壙の中心に掘り込まれ隅丸長方形をなす。その規模は長さ1.38m、幅0.52m、深さ5cm弱を測る。北西隅には床面から約35cm上で棺外副葬の小壺が押し潰された状態で一点出土した。

13号木棺墓

(Fig.30)

B-2区、B列の12号木棺墓の南0.5mに位置する。平面形は北側に幅を広げる隅丸長方形でその規模は長さ1.89m、幅1.21m、深さ0.61m。主軸はN-32°-Wを測る。主体部は墓壙の中心に掘り込まれ小口を共用する隅丸長方形をなす。その規模は長さ1.61m、幅0.52m、深さ数cmを測る。遺物は出土していない。

14号木棺墓

(Fig.31)

B-3区の中央部、B列の17号木棺墓の南2mに位置する。A列24号木棺墓に並行している。南側は擾乱土壙に切られるかほぼ全体の形状は判り、平面形は隅丸長方形でその規模は現存長2.02m、幅1.16m、深さ0.73m。主軸はN-38°-Wを測る。主体部は墓壙の中心に掘り込まれ隅丸長方形をなす。その規模は長さ1.45m、幅0.63m、深さ5cm弱を測る。北東隅には主体部に接し、床面から約15cm上で棺外副

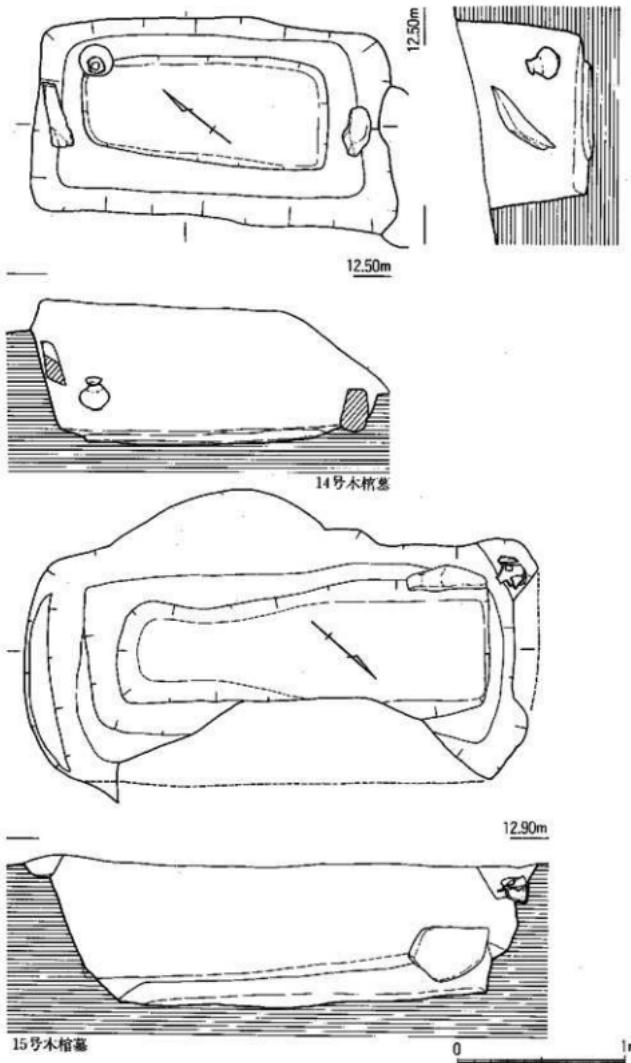


Fig. 31 14・15号木棺墓実測図 (1/30)

墓の小壺が口縁部を上にするが少し斜めに傾いた状態で一点出土した。墓壙の小口部には板状の石を据えるが、南側では床面に密着し、北側では浮いた状態で検出した。

15号木棺墓 (Fig.31)

14号木棺墓と北縁をほぼ接して主軸方位を同じくしてその南に位置する木棺墓である。大部分は搅乱土壠に切られるが床面までに搅乱が至っていないので全体の形状は判る。平面形は隅丸長方形でその規模は現存長1.94m、幅1.0m、深さ0.54m、主軸はN-41°-Wを測る。主体部は墓壙の中心に掘り込まれ隅丸長方形をなすが南側が幅を狭め西側が湾曲している。その規模は長さ1.47m、北の小口幅0.53m、南の小口幅0.4m、深さ12cm前後を測る。墓壙の北西隅には、床面から約35cm上で棺外副葬の小壺が出土するが破片が折り重なって一個体分出土した。主体部の西側には板状石を垂直に立てて、棺材を支えていたものと考えられる。

17号木棺墓 (Fig.32, PL. 8)

B-3区の中央北寄り、B列の13号と14号木棺墓の間に位置する。南縁を6号甕棺墓に切られるが全容は理解できる。浅い掘り込みの木棺墓で平面形は隅丸長方形、その規模は現存長1.85m、幅1.12m、深さ0.31m、主軸方位はN-29°-Wを測る。主体部は確認出来なかった。北側の縁に沿ってその中央に小壺が副葬されている。ほぼ床面に接して、口縁を上に少し傾いて出土している。小壺より更に縁によった位置に14cm×9cmの角張った礫を据えている。またその東には浅い溝状の窪みが認められる。

18号木棺墓 (Fig.33, PL. 8)

B-3区の南寄り、18号～20号木棺墓が集中する西側に位置する。ほとんど木棺墓相互の重複は少ないが4基がお互いに切り合っている。18号が最も新しく、20号が古いと考えられる。B列のもっとも南端にあたり32号木棺墓から直線的に一直線となる。平面形は隅丸長方形でその規模は現存長1.92m、幅0.87m、深さ0.65m、主軸はN-37.5°-Wを測る。主体部は墓壙の中心に掘り込まれ隅丸長方形をなすが北側は弧状に窪み、南側は直線となる。その規模は長さ1.52m、幅0.47m、深さ0.1mを測る。墓壙の南西隅には、床面から約15cm上で棺外副葬の小壺が内側へ傾いて出土する。

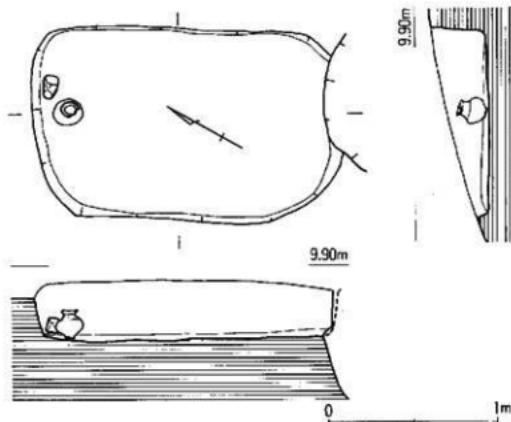


Fig. 32 17号木棺墓実測図 (1/30)

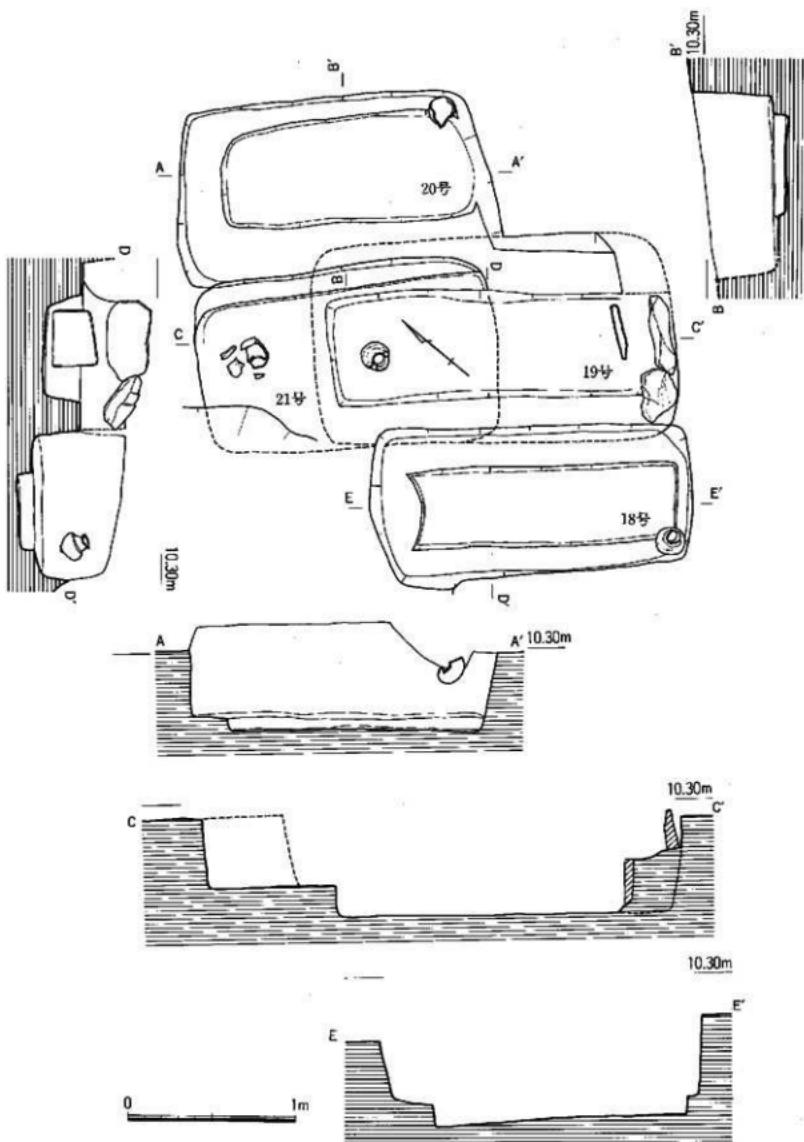


Fig. 33 18~21号木棺墓実測図 (1/30)

19号木棺墓 (Fig.33, PL. 9)

18号木棺墓に切られ主軸をほぼ同じくしてその東に位置する。当初一基の遺構として掘り進めていたが21号の中に19号の主体部が検出出来、別々の木棺墓であることが判明した。そのため北半部の墓壙の掘り方が明らかに出来なかった。平面形は隅丸長方形を呈すると考えられ、その規模は長さ2.15m前後、幅1.2m以上、深さ0.34m。主軸方位はN-37°-Wを測る。主体部は隅丸長方形で規模は長さ1.72m、幅0.63m、深さ0.2mを測る。北側の小口に寄った位置に小窓が開葬される。口縁部を上には水平にして出土した。出土位置から棺内副葬と考えられる。

20号木棺墓 (Fig.33, PL. 8)

21号木棺墓に東辺を切られれば主軸方位を同じくしてその東に位置する。他の木棺墓と比較して横幅を拡げている。平面形は隅丸長方形でその規模は長さ1.82m、幅1m以上、深さ0.46m、主軸方位は

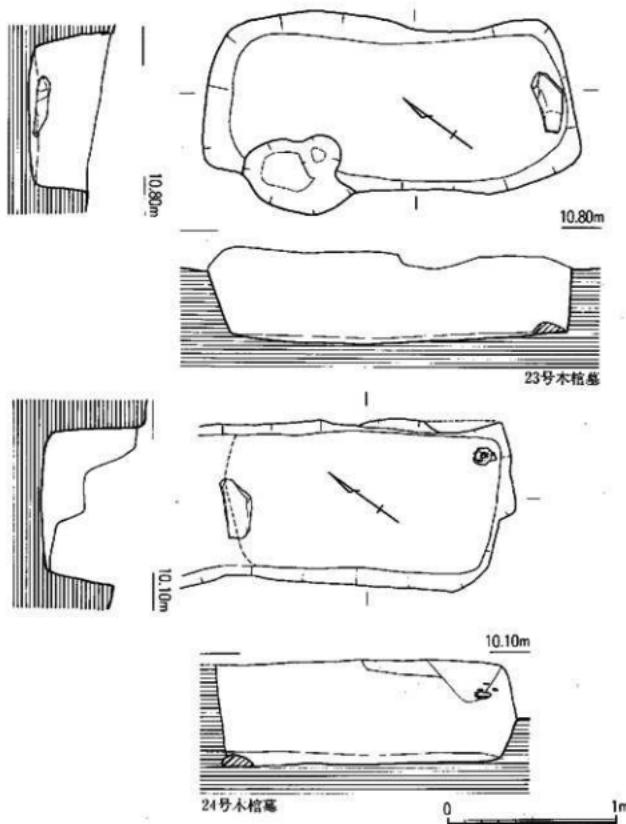


Fig. 34 23・24号木棺墓実測図 (1/30)

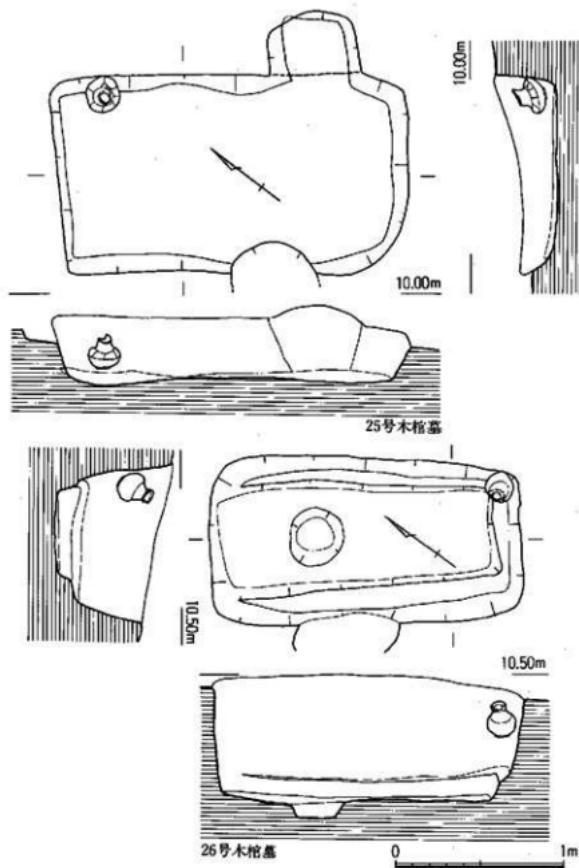


Fig. 35 25・26号木棺墓実測図 (1/30)

側の小口に近い位置で副葬小壺が幾つかの破片に割れて出土した。床面より20cmほど上での検出で棺内か外か不明である。

23号木棺墓 (Fig.34)

B-3区の北東部、18号から20号木棺墓が集中する西側に位置する。B列に属し4号木棺墓の南4.5mに位置し、南側で24号木棺墓と重複する。後世のピットに切られ平面形は歪な隅丸長方形でその規模は長さ2.16m、幅1.03m、深さ0.53m、主軸方位はN-36°-Wを測る。南側の小口に沿って最大幅17cm、長さ35cmの下面が平坦な断面三角形の石を据えている。床面に密着し内側を弓状になり小口の支え石であろうか。主体部、副葬遺物は確認することが出来なかった。

24号木棺墓 (Fig.34)

B-3区の北東部、23号木棺墓に北側を、南側を新しい土壇に切られその間に位置する。平面形は隅

N-38°-Wを測る。主体部は墓壇の中心に掘り込まれ隅丸長方形をなす。その規模は長さ1.49m、北の小口幅0.61m、深さ10cm前後を測る。墓壇の南東隅には、床面から約20cm上で棺外副葬の小壺が出土するが胸部から底部の遺存である。

21号木棺墓

(Fig.33, PL. 9)

20号木棺墓と東縁を重複して主軸方位をほぼ同じくしてその西に位置する木棺墓である。さらに南側は19号木棺墓に切られ、西側は擾乱土壇により削平され遺存状態は極めて悪い。平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられ、その規模は長さ1.73m、幅は1m前後、深さ0.28m、主軸はN-39°-Wを測る。主体部は墓壇の中心に掘り込まれ隅丸長方形をなすが南北の小口は墓壇の縁まで達している。また西側の平面形は確認出来なかった。北

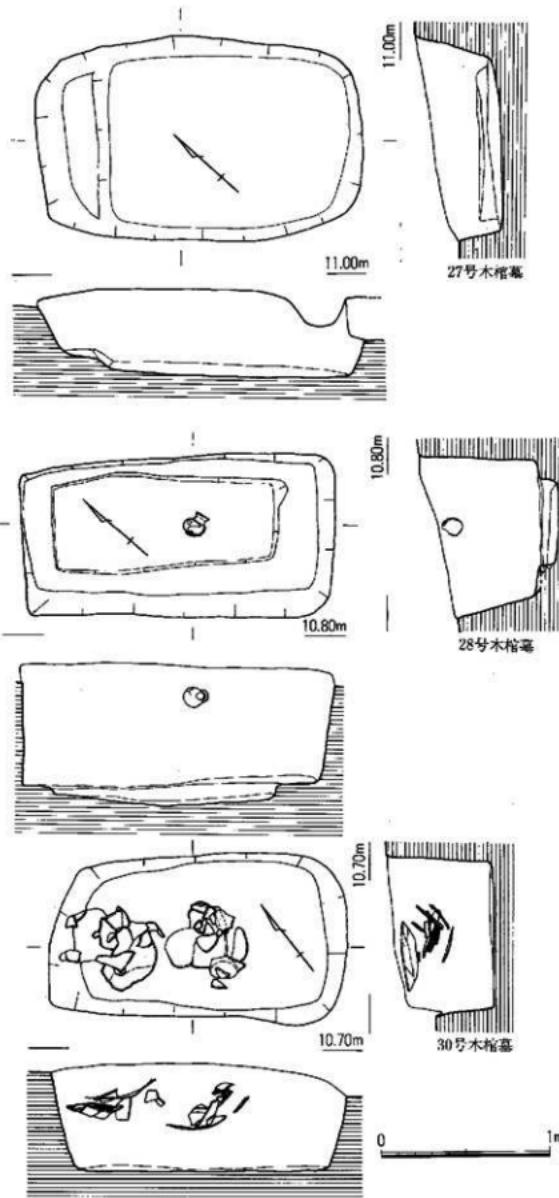


Fig. 36 27・28・29・30号木棺墓実測図 (1/30)

丸長方形を呈すると考えられ、その規模は長さ1.55m以上、幅0.96m、深さ0.56m、主軸方位はN-37°-Wを測る。墓壇の東隅から棺外副葬の小壺が一点出土するが細片に削れており遺存状態は悪く床面から37cm上で出土している。

25号木棺墓

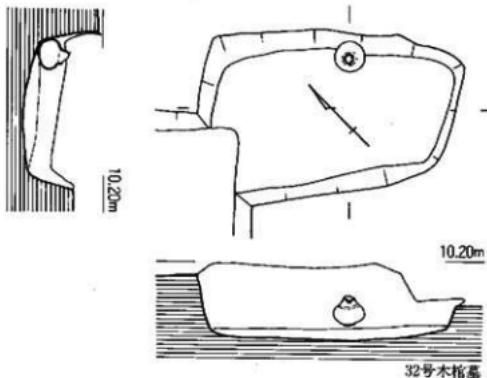
(Fig.35)

B-3区の中央南端に位置し、B列に属する。北角の隅は角張るが平面形は隅丸隅丸長方形を呈する。その規模は長さ2.07m、幅1.16m以上、深さ0.36m、主軸方位はN 36°-Wを測る。主体部は検出出来なかったが北側の長辺の壁に沿って小壺が副葬される。口縁部を上にするが内側へ傾いた状態で出土した。棺外副葬と考えられる。

26号木棺墓

(Fig.36, PL.9)

B-1区の南東端に位置し、B列に属する。西側の長辺は38号甕棺に切られる。平面形は隅丸長方形を呈する。その規模は長さ2.07m、幅0.96m、深さ0.74m、主軸方位はN-35°-Wを測る。墓壇の中央部に主体部をもつ。北辺



32号木棺墓

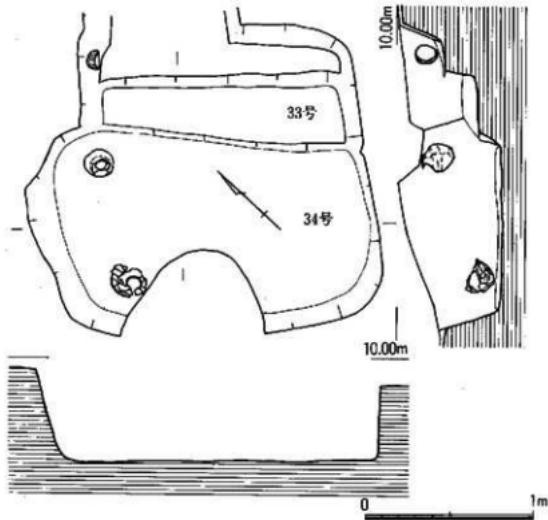


Fig. 37 32~34号木棺墓実測図(1/30)

位はN-40.5°-Wを測る。墓壙の中央部に主体部をもつ。墓壙よりも一回り小さく平面形は隅丸長方形で、その規模は長さ1.34m、幅0.54m、深さ13cmを測り南側が幅を狭める。中央部に小壺が一個体副葬される。床面から0.57m上で横転した状態で出土し、棺外副葬と考えられる。

30号木棺墓 (Fig.36)

B-1区の中央東寄り28号木棺墓のすぐ北に位置し、A列の北端にある。墓壙の上層には弥生時代前期の甕棺の破片が多く落ち込んでいた。あるいは甕棺が墓壙の中に掘り込まれたものか壊されてい可能性が強いが甕棺の墓壙も確認出来ず、甕棺自体も現位置を保つているのがないことから木棺墓の覆土出土としておく。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、その規模は長さ1.76m、幅0.95m、深さ0.62m、主軸方位はN-42°-Wを測る。主体部は検出出来なかった。甕棺の破片に混じって小壺が一個体

を墓壙と共有する隅丸長方形で、その規模は長さ1.62m、幅0.62m、深さ12cmを測り南側が幅を狭める。南東隅で壁に沿って小壺が一個体副葬される。口縁部を上にするが内側へ傾いた状態で出土し、棺外副葬と考えられる。

27号木棺墓 (Fig.36)

B-1区の中央部、25号木棺墓の北に位置し、B列に属する。南寄りの位置で2号溝に切られる。平面形は各辺が外側に膨らみ丸味をもつ隅丸長方形を呈し、その規模は長さ1.95m、幅1.21m、深さ0.47m、主軸方位はN-42°-Wを測る。この木棺墓から主軸が西に振れ、A、B列の間隔が広くなる。主体部は確認出来なかつたが北辺に寄つた位置で10cmほどの段を有する。

28号木棺墓 (Fig.36)

B-1区の東より、25号木棺墓のすぐ北に位置し、A列に属する。平面形は隅丸長方形を呈し、その規模は長さ1.84m、幅0.97m、深さ0.79m、主軸方

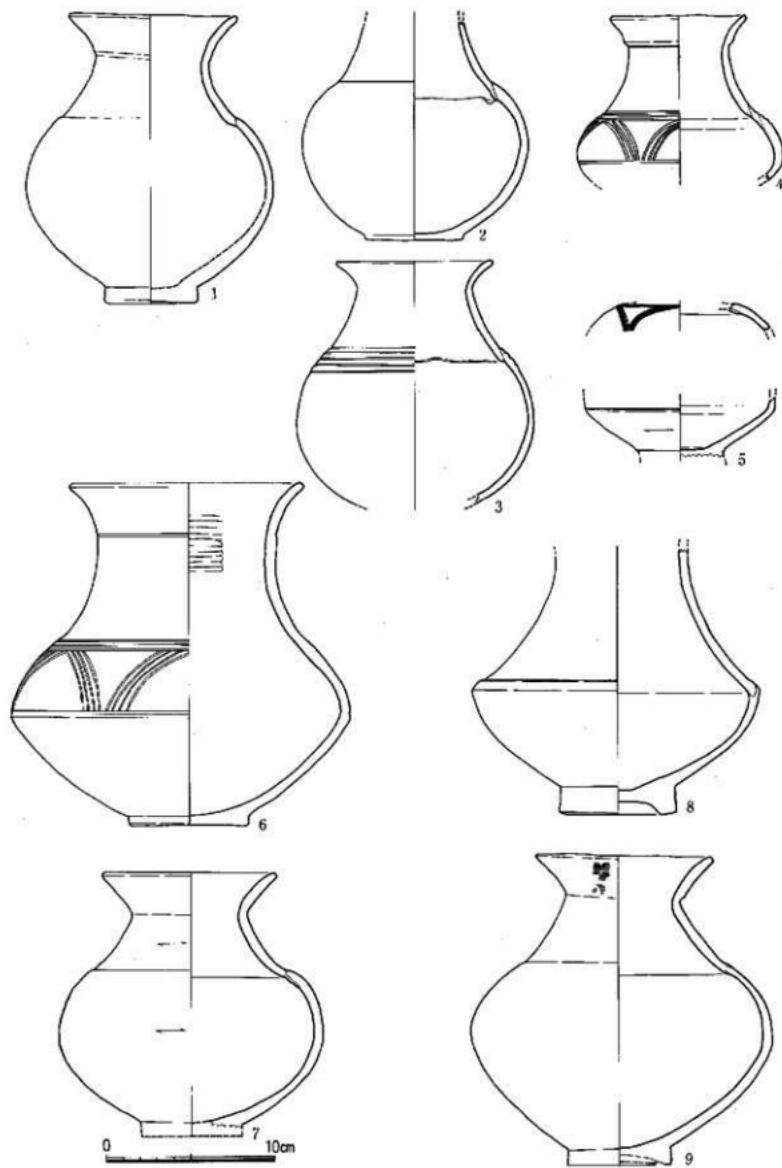
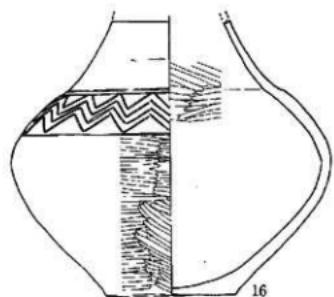
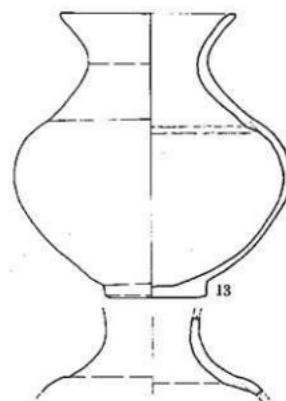
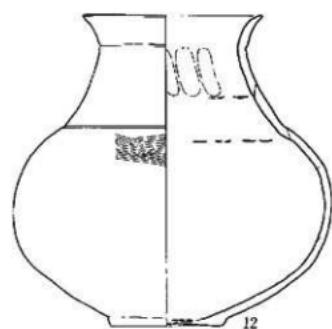
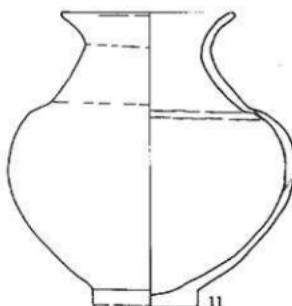
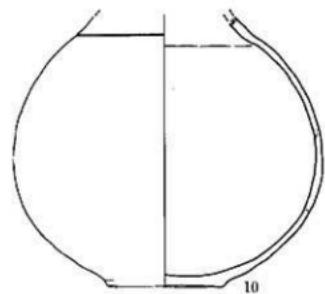


Fig. 38 木棺墓出土器物图(1) (1/3)



0 10cm

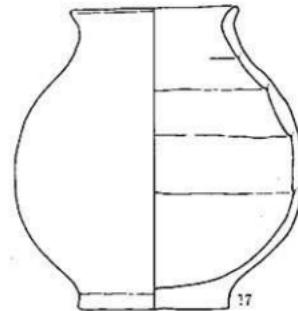


Fig. 39 木棺墓出土副葬品実測図(2) (1/3)

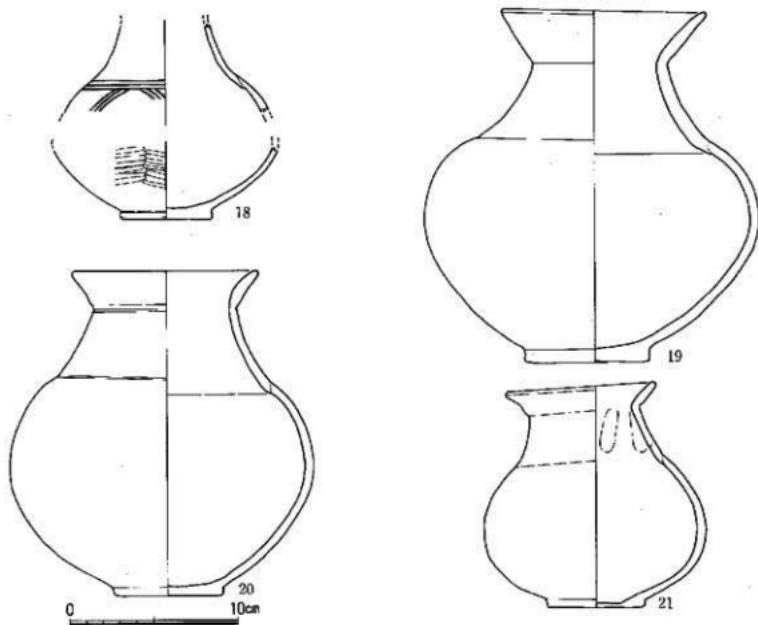


Fig. 40 木棺墓出土副葬品実測図(3) (1/3)

出土するがこの遺構に伴うのか墓棺に伴うか不明である。

32号木棺墓 (Fig. 37)

B-1区、調査区内北西隅にあたり34号木棺墓のすぐ北に位置し、調査区内ではB列の北端となる。主軸は更に西に振れている。北西隅と南西隅を34号、41号喪棺に切られる。平面形は歪ではあるがほぼ隅丸長方形を呈し、その規模は長さ1.57m、幅0.98m、深さ0.43m、主軸方位はN-45°-Wを測る。主体部は確認出来なかったが、長辺中央部近くの墳頂床面に接して小壺を一個副葬している。少し内側へ傾斜するが水平に棺外に置かれたものであろう。

33号木棺墓 (Fig. 37)

B-1区の中央部、A列の27号と32号木棺墓の間に位置し、西側を44号喪棺に切られ半分は不明である。34号木棺墓と重複しその東にあたるが前後関係は不明である。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、その規模は長さ1.65m、幅0.95m、深さ0.7m以上、主軸方位はN-38°-Wを測る。主体部は墓壙の中心部に短辺を共有し、その規模は長さ1.41m、幅0.34m以上を測る。墓壙の北隅には新しい土壇に埋されるが小壺の胴部から底部が半載された状態で出土する。

34号木棺墓 (Fig. 37, PL. 9)

33号木棺墓とほぼ主軸方向を同一にとり、その西側に位置する。また西側の長辺は44号喪棺に切られている。平面形は歪ではあるがほぼ隅丸長方形を呈し、その規模は長さ2.05m、幅0.13m、深さ0.56m、主軸方位はN-38°-Wを測る。主体部は確認出来なかったが、北、西隅には棺外副葬の小壺が二

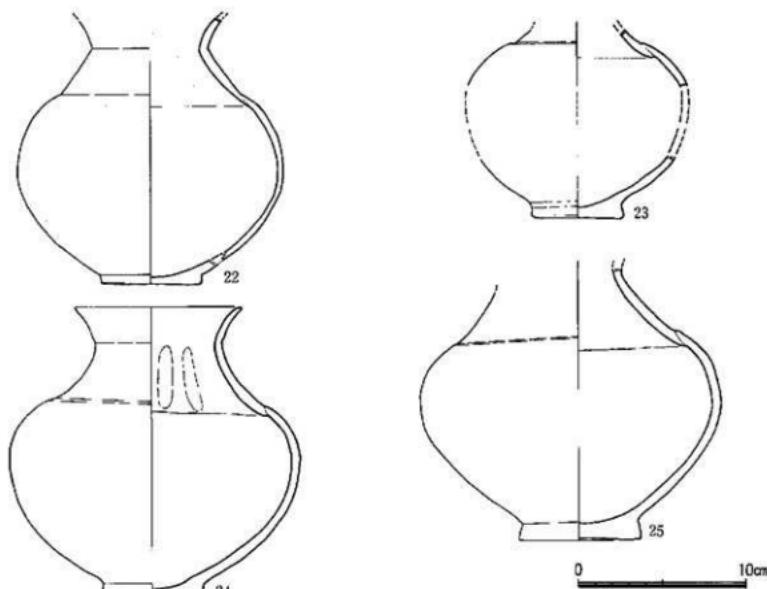


Fig. 41 木棺墓出土刷毛壺実測図(4) (1/3)

点出土する。西隅の壺は床面直上、北隅のは28cm上からの検出である。

出土土器 (Fig.38~41, PL.19~21)

木棺墓には一個体もしくは數個体の壺が副葬されていた。底部は円盤貼り付け状で、高、低の二種がみられる。腹部最大径を中位もしくは上半にもち、頸部との境に段もしくは沈線をめぐらす。口縁部を肥厚させ、その下に段をもつ。小型品と中型に近い大きさの中大型品のに種に大別できる。更に中小型壺は次の三種類に細分される。I類 14号木棺墓の壺9を標準とする。胸部上半に最大径をとり肩、頸部の境に明瞭な段をもち、口縁部を肥厚させる形態。頸部の内傾は強く直線的である。II類-26号木棺墓出土の壺20を標準とする。胸部が球形に近く最大径を胸部中位にとり段が不明瞭となる。頸部は直線的ではなく外反する。III類-肩部の段が更に不明瞭となり、口縁部の肥厚はなくなり外面の段は消滅する。17号木棺墓の壺11を標準とする。IV類-16を標準とする。肩が強く張り、底部は直接胸部と続き円盤貼り付け状とはならない。胸部上半に復線山形文を描く。V類-6、8のようにI~IV類に属しない形態。以下各木棺墓出土土器について概略を記す。

1は3号木棺墓出土。完形品でII類であるが胸部の張りが少なく底部は円盤貼り付け状で厚い。口縁部の肥厚は見られない。外面は研磨、内面はナデ調整である。2は墓壇の北隅から出土した小型品で口縁部を欠損する。底径が大きく球形に近い胴部となり、肩部に浅い沈線を巡らす。胎土には砂粒を少し含む。3~5は4号木棺墓出土。いずれも小型品である。3は南寄りで出土した。口縁部外面に明瞭な段を有し、肩と胸部に沈線を巡らしその間の胸部上半に三条の重弧文を範描きする。4は中

央部の石直上出土である。小型品でII類に近似する。底部を欠損し、肩部の段は不明瞭でその上から沈線を巡らし段を強調させている。胴部にかけて計5条の沈線を巡らす。内面の胴部との接合面は段をそのまま残す。5は北隅出土で大部分を欠損する。胴部上半には範描き文を描く。6は9号木棺墓出土である。口縁部を一部欠損するがほぼ完形である。薄い底部に中位に稜線をもつ肩平な胴部となるV類の壺である。頸部は緩く内傾視、外反する口縁部となる。口縁部下外面と胴部中位に一条、肩部に三条の沈線を巡らし胴部上半に三条の重弧文を籠描きする。7は11号木棺墓出土、II類に近い小型の壺である。底部は欠損するが円盤貼り付け状で最大径を胴部中位にとる。色調は茶褐色ないし暗褐色である。8は12号木棺墓出土のV類の壺である。高台状の厚い底部で胴部中位に稜をもつ。その稜線のすぐ上に浅い段をもち胴部上半から頸部にかけて外反して立ち上がる特異な形態を示す。9は14号木棺墓出土。I類の壺で最大径を胴部上半にとり、肩、頸部の段が明瞭である。底部は円盤貼り付け状を呈し厚くなる。10は15号木棺墓出土。最大径を胴部中位にとり薄い平底の底部である。肩部には不明瞭な段を沈線で強調する。頸部から口縁部は欠損する。11は17号木棺墓出土。III類の壺で最大径を胴部上半にとり、口縁部は強く外反し外面には段をもたない。12は13号木棺墓出土。薄い底部で胴部の張りが強く、最大径を胴部中位にとるII類の壺である胴部外面に刷毛目溝繋が見られる。13は19号木棺墓出土のIII類の壺。14、15は19号木棺墓と切りあうピット出土の小壺である。16は20号木棺墓出土のIV類。胎土には砂粒を多く含んでいる。焼成は良く赤~茶褐色を呈する。胴部上半に最大径をもち肩部に一条、胴部上半に一条の沈線を巡らし、その間に四条の複線山形文を描く。木棺墓の中では新しい時期の壺である。17は21号木棺墓出土。胎土に砂粒を多く含み粗雑な造りで胴部内面には輪積の跡が3cm前後の幅で残り、外底面は範痕の凹凸がみられる。底部は厚く長胴で最大径を中位にとり外反して短い口縁部となる特異な器形である。18は24号木棺墓出土。胴部の中位を欠損するが同一個体である。小型品で底部は薄く、胴部上半に三条の沈線と重弧文を描く。19は25号木棺墓出土のII類の壺である。底部はやや厚く口縁部は直線に大きく開く。20は26号木棺墓出土。II類の壺であるが肩部と頸部との段を強調するため各々沈線を巡らす。線が重複しているところが3cmの幅で認められる。底部は薄く胴部は球形に近い。21は28号木棺墓出土の小型の壺である。全体的に並んだ土器で下膨れの胴部で肩部の段は不明瞭、II類部は直線的に開く。22は30号木棺墓出土。薄い底部で胴部中位に最大径をとるII類とIII類の中間形態を示す壺である。胴部、底部、頸部各々接合しないが図示した形態であろう。23は33号木棺墓出土。肩部と底部が接合しないが同一個体の壺である。肩部には沈線を巡らす。24、25は33号木棺墓出土。胴部上半に最大径をもつII類の壺で25は底部が円盤貼り付け状で台形に厚くなり「ハ」の字に端部が開く。

器表面の荒れが著しく、器表面が剥離しているのも多く、彩文であるのか否か明確にできなかった。しかし中には黒塗りの痕跡や赤色顔料を認められるが、全面に塗布するのか、部分的なものか不明である。天神森4次調査では彩文の小壺が出土しており、今回の小壺も下地に黑色顔料を施し、その上に赤色の彩文を施していたものであろう。

甕棺墓一覧表

番号	接合形式	器種		土軸方向	埋置角度	時 期	擇図・写真番号		備 考
		上蓋	下蓋				Fig.	PL.	
K-1	腹口?	骨軸体	蓋	N-7.5°-W	不明	弥生前期後半	4	—	
K-2	覆口?	骨軸体	蓋	N 45° E	不明	弥生前期中葉	4	—	
K-3	腹口	蓋	蓋	S-54°-W	10°	弥生前期中葉	4	3	
K-4	覆口	蓋	蓋	S-45°-W	18°	弥生前期中葉	6	—	
K-5	腹口	蓋	蓋	N-38°-W	30°	弥生前期中葉	6	—	
K-6	覆口	蓋	蓋	S-38°-E	20°	弥生前期中葉	6	—	K-5に切られる
K-7	腹口	蓋	蓋	S-26°-E	25°	弥生前期中葉	8	3	副葬品-蓋1
K-8	—	蓋	蓋	S-15°-E	28°	弥生前期中葉	8	3	
K-9	覆口	骨軸	蓋	S-44°-W	32°	弥生前期中葉	10	3	
K-11	覆口	外	蓋	N 48° W	27°	弥生前期中葉	10	3	
K-12	—	蓋	蓋	S-51°-E	31°	弥生前期中葉	10	—	
K-13	腹口	蓋	蓋	S-29°-E	24°	弥生前期中葉	10	3	
K-14	腹口	鉢	蓋	N 47° W	16°	弥生前期中葉	12	4	
K-15	腹口	蓋	蓋	S-75°-E	不明	弥生前期中葉	12	4	
K-16	覆口	蓋	蓋	N 59° W	35°	弥生前期中葉	12	4	
K-17	腹口	蓋	蓋	S-42°-E	23°	弥生前期中葉	12	4	
K-18	接合	縫	縫	S-71°-W	30°	弥生中期中頃	14	—	
K-19	—	蓋	蓋	S-57°-W	22°	弥生前期中葉	14	—	南側をピットに切られる
K-20	覆口	蓋	蓋	S-81°-W	19°	弥生前期中葉	14	4	中央部をピットに切られる
K-21	覆口	縫	縫	S-51°-E	31°	弥生前期中葉	14	—	
K-22	腹口	縫	縫	N-44°-W	35°	弥生前期中葉	16	—	SK-16に切られる
K-23	腹口	蓋	蓋	N 71° E	10°	弥生中期前半	16	4	成人用大型甕棺
K-24	腹口	鉢	蓋	S-59°-W	-6°	弥生中期前半	16	5	成人用大型甕棺
K-25	腹口	縫	縫	S-55°-W	-4°	弥生中期前半	18	—	成人用大型甕棺
K-26	—	蓋	不明	不明	不明	弥生前期後半	18	—	
K-27	腹口	蓋	蓋	S-38°-E	19°	弥生前期中葉	20	5	馬蹄形 壺1 SD 3に切られる
K-28	—	蓋	不明	不明	不明	弥生前期中葉	20	—	
K-29	腹口	鉢	蓋	N-58°-W	5°	弥生前期未	20	5	
K-30	腹口	縫	縫	S-24°-E	17°	弥生前期中葉	20	5	副葬品 壺1
K-31	腹口	蓋	蓋	S-29°-E	23°	弥生前期中葉	20	5	
K-32	覆口	外	縫	S 55° E	27°	弥生前期中葉	22	—	
K-33	腹口	鉢	蓋	S-67°-E	35°	弥生前期中葉	22	5	副葬品-蓋1
K-34	腹口	蓋	蓋	N-71°-W	60°	弥生前期中葉	22	—	SK 32の南西隅を切る
K-35	腹口	蓋	蓋	N-71°-E	31°	弥生前期中葉	22	—	
K-36	腹口	蓋	蓋	N-50°-E	25°	弥生前期中葉	24	—	
K-37	腹口	蓋	蓋	S-37°-E	不明	弥生前期中葉	24	—	
K-38	腹口	鉢	縫	S-65°-E	25°	弥生前期中葉	24	—	門側をSD 2に切られ、東側はSK26を切る
K-39	腹口?	—	蓋	S-47°-E	不明	弥生前期中葉	25	—	
K-40	—	—	蓋	S-46°-E	不明	弥生前期中葉	25	—	東側をSD 2、中央部をピットに切られる
K-41	腹口	蓋	蓋	S-57°-W	20°	弥生前期中葉	26	—	SK-32を切る
K-42	腹口	鉢	蓋	N-54°-W	29°	弥生前期中葉	26	—	
K-43	—	—	小明	小明	小明	弥生前期中葉	26	—	SD 2に切られる
K-44	腹口	鉢	蓋	N-51°-W	不明	弥生前期中葉	26	—	

木棺墓一覧表

番 号	墓壙の形態 (cm)	墓壙の規模・深さ (cm)	土体部の規模・深さ (cm)	主 軸	断面品	Fig.	Pl.	時 期	備 考	
SK-3	長方形	200×110 50	145×75 15	N-40°-E	※2	28	6	弥生前期前半	主体部は西面に寄る両刃をピットに切られる。	
SK-4	隅丸長方形	208×110 73		N-27°-W	※3	29	7	弥生前期前半		
SK-9	長方形	176×89 69		N-45.5°-W	※1	29	7	弥生前期前半	SK-19を切る。	
SK-11	長方形	198×100 48		N-36.5°-W	※1	30		弥生前期前半	中央部に獨立柱建物の生火が掘り込まれる。	
SK-12	隅丸長方形	188×115 67	138×49 5	N-32.5°-W	※1	30		弥生前期前半		
SK-13	長方形	190×125 55	160×51 1	N-32.5°-W		30		弥生前期前半		
SK-14	隅丸長方形	210×116 71	145×64 6	N-38°-W	※1	31		弥生前期前半		
SK-15	隅丸長方形	194×90 45	148×50 15	N-41°-W	※1	31		弥生前期前半	南長辺を櫻亂に切られる。	
SK-17	隅丸長方形	185×113 32		N-29°-W	※1	32	8	弥生前期前半	南短辺をK-6に切られる。	
SK-18	隅丸長方形	193×87 53	160×47 7	N-37.5°-W	※1	33	8-9	弥生前期前半	SK-19を切る ↓	SK-26
SK-19	隅丸長方形	215×120 約40	190×63 30	N-37°-W	※1	33	9	弥生前期前半	SK-9・18に切られる ↓	21
SK-20	隅丸長方形	185×110 55	152×60 8	N-38°-W	※1	33	8-9	弥生前期前半	SK-19-21に切られる ↓	19
SK-21	隅丸長方形	180×105 55	170×80 5	N-39°-W	※1	33	9	弥生前期前半	SK-19-21に切られる ↓	18
SK-23	隅丸長方形	215×100 45		N-36.5°-W		34		弥生前期前半	SK-24を切る	
SK-24	隅丸長方形	175×95 57		N-36.5°-W		34		弥生前期前半		
SK-25	隅丸長方形	207×117 36		N-36.5°-W	※1	35		弥生前期前半		
SK-26	隅丸長方形	185×100 55	168×61 12	N-35°-W	※1	35	9	弥生前期前半		
SK-27	隅丸長方形	195×120 51		N-42°-W		36		弥生前期前半	北短辺2段掘り	
SK-28	長方形	184×96 73	135×55 12	N-40.5°-W	※1	36	8	弥生前期前半		
SK-30	隅丸長方形	177×95 63		N-42°-W	※1	36		弥生前期前半		
SK-32	やや重な 隅丸長方形	152×100 42		N-45°-W	※1	37		弥生前期前半		
SK-33	隅丸長方形	166×70+α 25	166×40+α 19	N-38°-W		37		弥生前期前半	SK-34に切られる	
SK-34	隅丸長方形	206×120 57		N-38°-W	※2	37	9	弥生前期前半	SK-33を切り、K-44に切られる。	

3. 土壙の調査

今回の調査では甕棺墓、木棺墓が多く検出されたがそれらに含まれない不定形の土壙について記す。ただA列の並びにある5号土壙や、弥生時代前期の壺を出土する6号、7号土壙も墓の可能性があるが土壙墓、木棺墓とする積極的根拠がないので土壙とした。

1号土壙 (Fig.42)

A-2区、調査区の東側の削平された平坦部に位置する。当初一基と考えていたが二基の上壙の切り合いである。北側の土壙を1-A、南側を1-B土壙とする。1-A土壙は平面形が隅丸の台形で床面は丸味をもつ。その規模は中央部で東西1.3m、南北1.65m、深さ0.35mを測る。暗褐色ないし黒褐色土で軟質である。1-B土壙はA土壙に切られその南に一部が残る。深さ10cm弱の浅い掘り込みで全体の形状は不明である。

出土遺物 (Fig.42)

1~3はB、4はA土壙出土。1は小型の壺で底部と口縁部を欠損する。最大径を胴部中位にもち沈線を巡らせ、肩部の三本の沈線の間に重弧文を描く。2は小型の甕で口縁部が緩く外反する。いずれも弥生時代前期の上器である。4は床面近くから出土した須恵器の环で底部笠切りである。

2号土壙 (Fig.43)

A-3区、1号土壙と同様に削平された平坦部に位置する。正な五角形を呈し各角が丸くなる。その規模は中央部で東西1.03m、南北1.07m、深さ0.15mを測る。覆土は暗~黒褐色土で軟質である。出土遺物は須恵器の小破片が数点出土し、覆土も1-A土壙と近似することからほぼ同時期であろう。

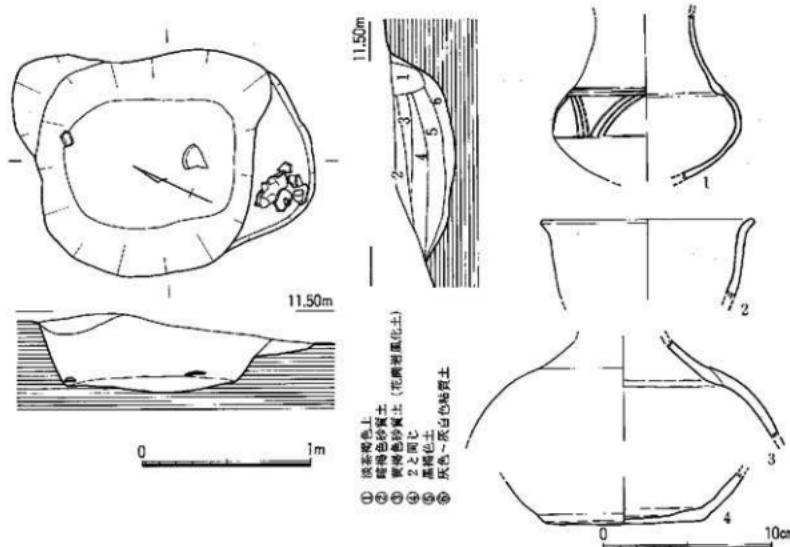


Fig. 42 1号土壙・出土土器実測図 (1/30・1/3)

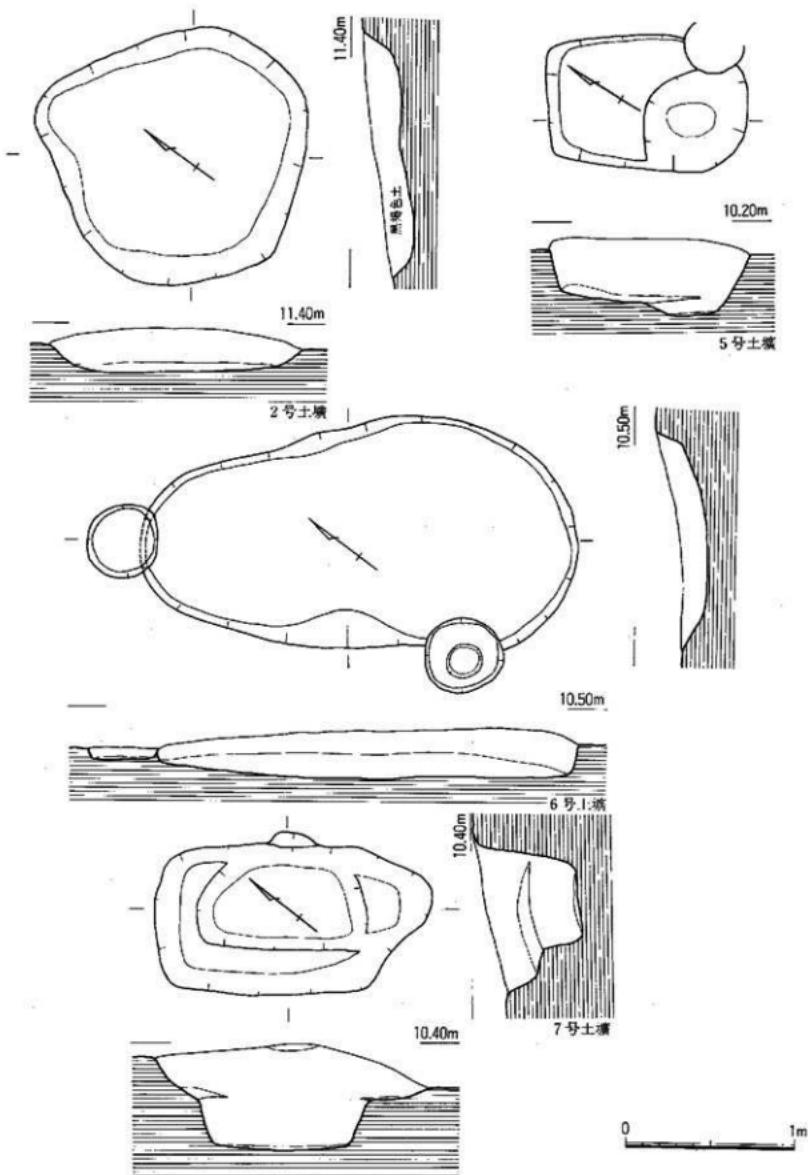


Fig. 43 2 · 5 ~ 7 号土壤实测图 (1/30)

5号土壙 (Fig.43)

木棺墓群A列の並びにあり4号木棺墓の南に隣接する。規模が小さいこと、南側に掘り込みがあることから土壤としたが、覆土もほぼ同一で木棺墓の可能性が考えられる。東側をピットに切られるがほぼ全形は理解でき平面形は隅丸長方形、その規模は長軸1.19m、短軸0.8m、深さ0.34m、N-32°-Wを測る。床面はほぼ平坦で、南壁に沿って0.4m前後を測る掘り込みをもつ。

6号土壙 (Fig.43)

B-3区の北東隅、23号木棺墓の東1mに位置する。平面形は長楕円形を示す土壤で、その規模は長軸2.57m、最大幅1.37m、深さ0.3m、主軸方位N-36°-Wを測る。覆土は暗褐色の砂質土である。

出土遺物 (Fig.45 1)

覆土中から弥生時代前期の小壺が一点出土している。

7号土壙 (Fig.43)

A、B-3区の境界に当たり、6号土壙の南東に隣接している。本来は隅丸長方形を呈するのが南側を削平されて、その部分が幅を狭め丸味をもつ。その規模は長軸1.65m、最大幅0.9m、深さ0.3m、主軸方位N-36°-Wを測る。更にその内側に同形態の掘り込みをもち幅0.56m、長さ0.98m、深さ0.3m弱の規模である。覆土は木棺墓の土壤と酷似しその可能性がある。

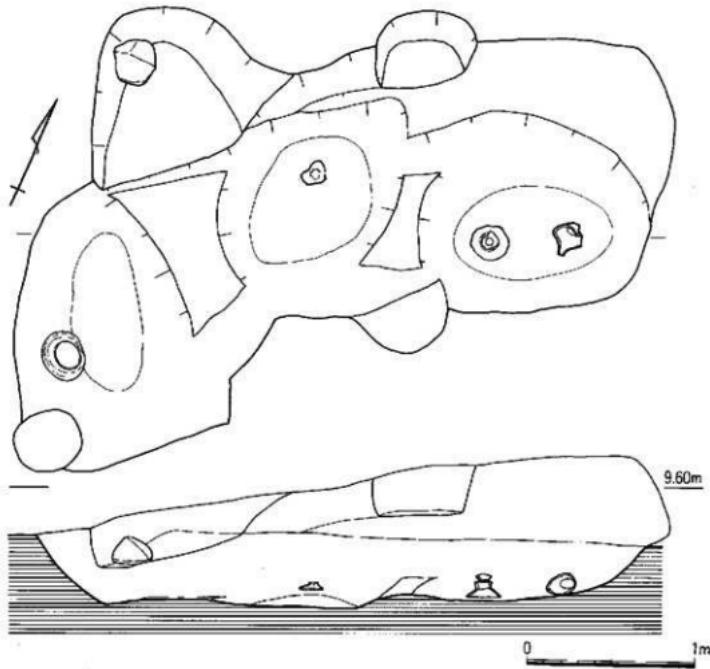


Fig. 44 10号土壙実測図 (1/30)

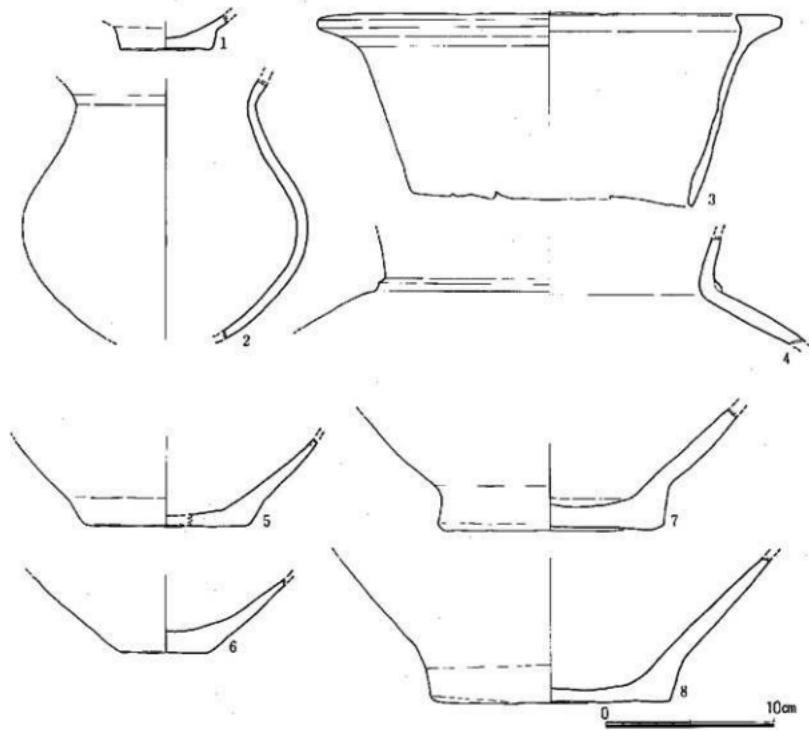


Fig. 45 土壙出土土器実測図 (1/3)

出土遺物 (Fig.45-2)

弥生時代前期の小壺である。口縁部、底部は欠損する。胴部中位に最大径をもち肩部には段ではなく縦で外反する口縁部となろう。胎上には砂粒を少し含み、焼成は良好で淡黄灰褐色を呈する。器表面が剝離し調整は不明。

10号土壙 (Fig.44)

B-4区の北寄りに位置する。北側の縁が宅地造成の法面とほぼ同じで、その南側の遺構の大半は削平され、床面近くが残っているに過ぎない。よって土壙の全体形、規模も明らかではなく、床面も凹凸があり数個の土壙の切り合いの可能性もあるがここでは一つの土壙としておく。北側でピットに切られる東西に長い不定形の土壙で東西4.2m、南北1.7m、最も深いところで0.8mを測る。出土土器は弥生時代中期のもので床面に近いところから少量が破片として出土している。

出土遺物 (Fig.45-3 ~ 8)

いずれも壺の破片である。3は鶴先口縁で内側への発達は小さい。上面は平坦にし外唇部は丸く取める。頸部は直線的である。4は3の口縁部をもつ頸部～胴部の破片で屈曲部に突帯を貼付している。5から8は底部の破片で6は時期的に新しくなろう。

4. その他の遺構

今回の調査で検出した遺構は大きく分けて弥生時代の墓地と7、8世紀代の集落、更には12世紀の堅穴が一基あり三時期に区分できる。ここでは後半の時期の遺構について述べる。弥生時代以外では遺構の数も少なく遺構の在り方は明らかではない。遺跡の主体は削平された丘陵のなだらかな部分もしくは調査区の西側であろうか。

1号堅穴 (Fig.46)

A-5区、調査区の南東隅に位置する大型の堅穴である。半分ほどは調査区外であるため全形は明らかではない。現況では隅丸直角三角形を示すが隅丸長方形を呈するものであろう。西隅はほぼ直角に曲がるが、南、北隅は鈍角的となり少し歪な形態となろう。南側の最大長5.25m、西側の最大長2.53m、深さ10cm強を測る。床面には西よりの位置に径28cmの浅いピット一個があり、西壁に沿って床面より一段高くなり、ピット二個を掘り込む。また、床面はほぼ平坦であるが小さな凹凸が見られ、踏み固めた状況は見えなかった。襷上は暗褐色の軟質な土壤であった。出土土器は白磁碗と底部糸切りの小皿で13世紀前後の所産であろう。

出土遺物 (Fig.48-1~5)

1~3は輸入磁碗である。1はIV類の白磁碗で断面三角形の大きい玉縁の口縁で釉は乳白色を呈する。2はV類の碗で体部中位に稜をもち口縁部が外反する。釉は僅かに緑を帯びた白色である。3はI類の龍泉窯系青磁碗底部で見込に沈線を巡らしその中に蓮華紋を描く。4、5は口径6.5cmを測る小皿である。底部糸切りである。

SX-2 (Fig.3)

A-2区の南西部に位置する。丘陵斜面を平面形が弓状に削り取り平坦面を形成する。平坦面には小さなピットが数個見られるが建物の存在は確認出来なかった。平坦面と傾斜面との比高差は0.4m、削られた面の幅は約6mを測る。

出土遺物 (Fig.48 6~10)

6から8は土師器である。6は口径18.4cmの小型の甕で内面胴部を笠割り、口縁部を横の刷毛目、外面を縱方向の刷毛目調整である。7は壺で底部笠切りで全体に丸味をもつ。8は高台付碗で高台は

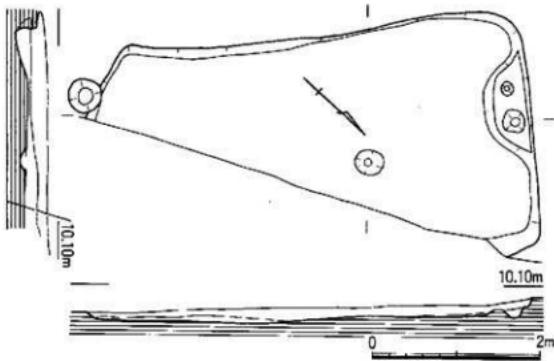


Fig. 46 1号堅穴実測図 (1/60)

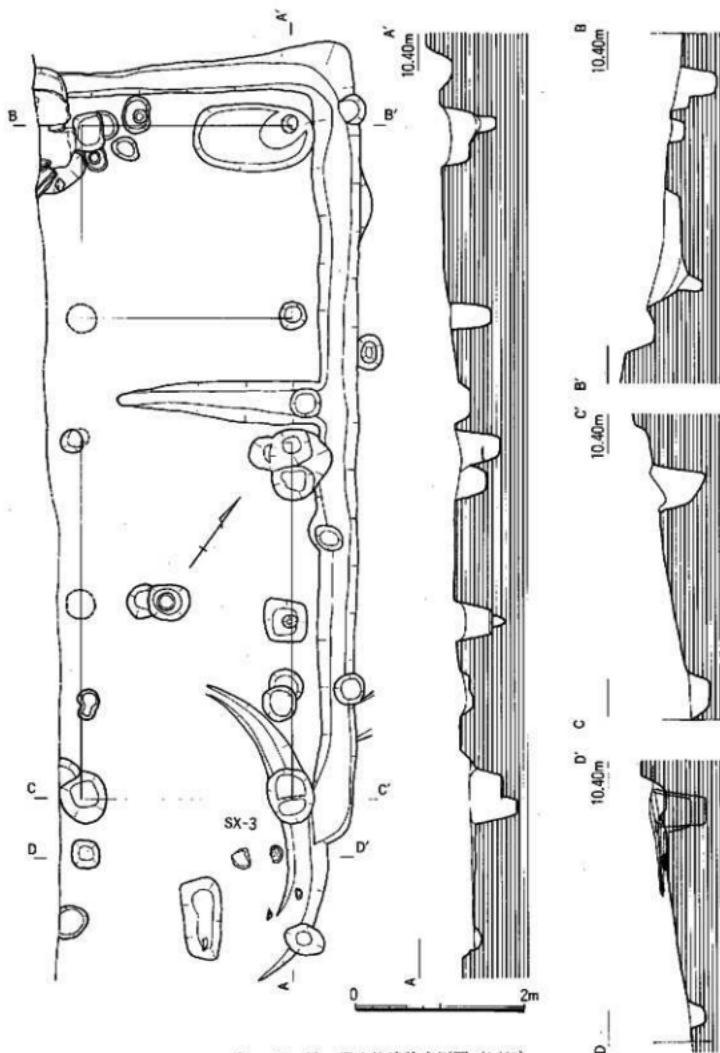


Fig. 47 溝・掘立柱建物実測図 (1/60)

「ハ」の字に大きく聞く。9、10は須恵器の高台付壙と蓋である。

掘立柱建物 (Fig.47)

周囲に「E」字状の溝（2号溝）を巡らした建物である。中央の溝を境に南、北に分かれ同一の主

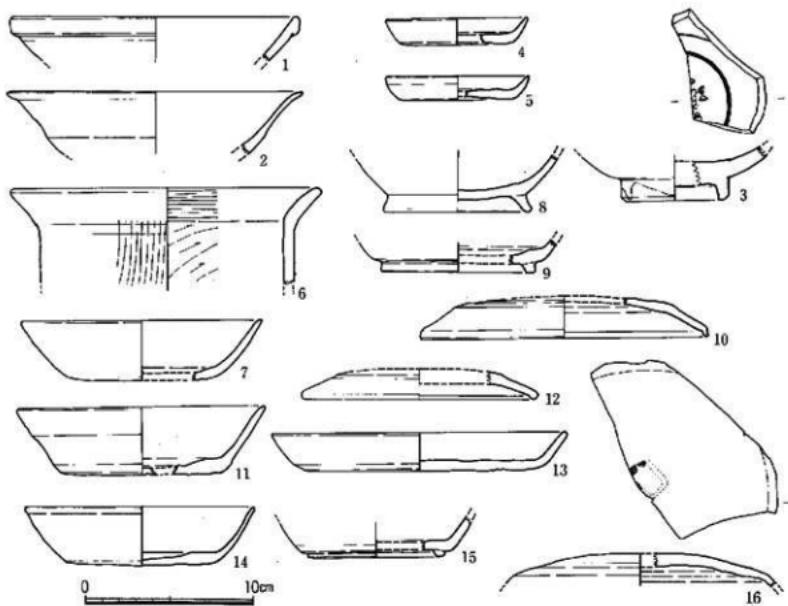


Fig. 48 穴、SX-2・3、溝出土土器実測図 (1/3)

軸をもつ二棟の建物であろうと考えたが一棟の可能性もある。溝の東側は丘陵の傾斜に対して直角に掘られ南北は平行しているが、溝の途中で消滅する。東側の溝の中央より北に寄った位置に東西に延びる中央溝があり南北に建物を分ける。溝の規模は幅0.4から0.5m、深さは溝の外側は0.3m、内側は0.1mと一段低く平坦な面を形成する。北側の建物は1間×1間で東西2.48m、南北2.28mを測る。南側の建物は1間×3間で東西の距離は北側の建物と同一、南北は北から1.92m、1.09m、1.24mを測り、南側の間仕切りが著しく狭く、一般的の建物とは異なっている。

出土遺物 (Fig.48-14~16)

2号溝からの出土である。14は底部窓切りの壺である。底部と体部の境は丸味をもち端部は丸く收まる。口径13.5cm、器高3.5cmを測る。15は須恵器の高台付壺である。低く「ハ」の字に外に開く。16も須恵器で大井部に墨書き文字が認められる。残りが悪く明らかではないが「田」もしくは「国」とも判読出来そうである。

3号溝 (Fig.47)

B-3区に位置する溝である。現状では「L」字状に屈曲する溝で残りが悪く傾斜の低い南、西側は消滅している。幅は約0.35m、最も深いところで0.1mを測る。溝に囲まれた内側には疎間に一個ピットが検出出来ただけであるが、2号溝と同様に建物を囲む可能性がある。出土土器は土師器と須恵器の小破片で2号溝とほぼ同時期であろう。

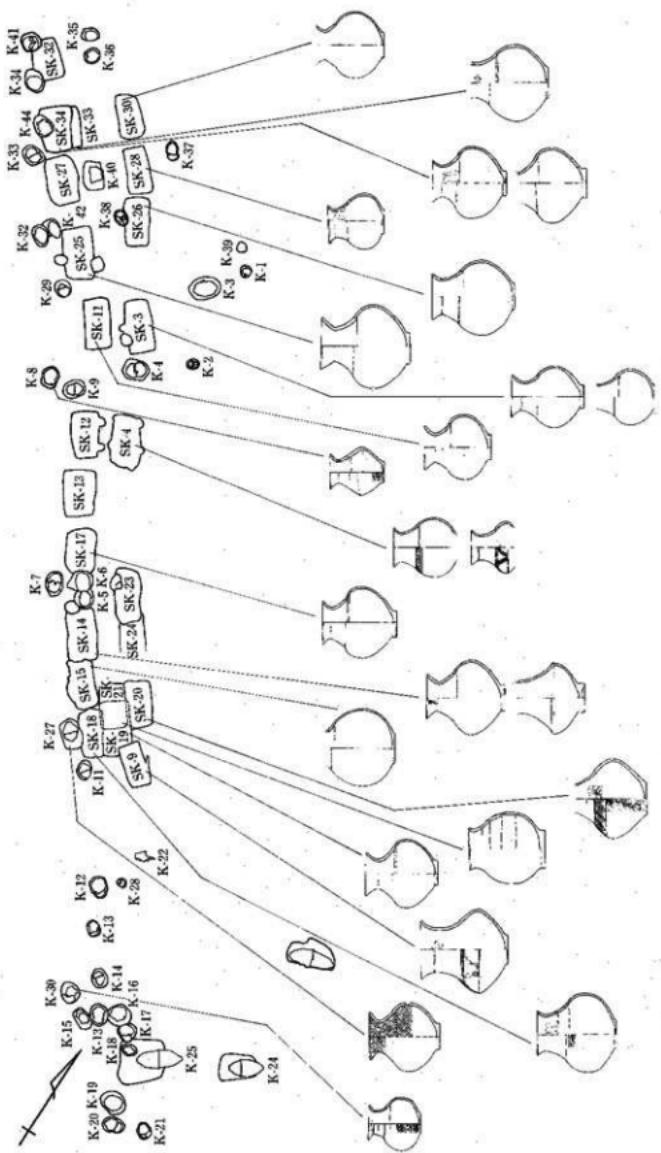


Fig. 49 变格墓·木棺墓配置图 (1/200・1/6)

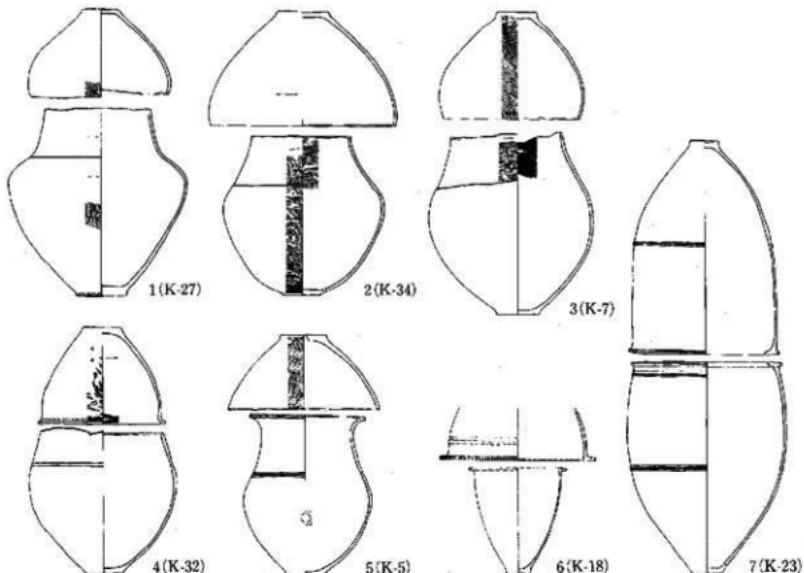


Fig. 50 變棺変遷図 (1/16)

6. 小結

今回の調査では当初予想も出来なかつた弥生時代前期の木棺墓、甕棺墓を良好な状態で調査することが出来た。木棺墓は隅丸長方形で短軸1m弱、長軸2m前後の規模の掘り方をもち内部に小壺を棺外副葬している。西側へ緩やかに傾斜する丘陵斜面の断近くに、傾斜面に直交する形ではば二列に列埋葬されている。木棺墓の方向は南東から北西に抜がり丘陵裾に沿って延びさらに丘陵を縦断する道路の下まで拡がる。南側は宅地造成時の削平により9号木棺墓まで確認でき全体の木棺墓の範囲は確認できないが現況での木棺墓の範囲は30m×4mの範囲に計23基が整然と二列に並ぶ。南と北側で幾つかの木棺墓が重複しているが、その他は整然と一定の間隔を置いて配置されている。北西部で2m、南東部で1m弱の間隔を開け、北西部に向かって幅を広げる。その空間は祭祀遺構、墓道等の特別な遺構は認められない。木棺墓の中で配石を伴う3、4号木棺墓がある。3号木棺墓は4個の板状石が検出面近くから出土している。支石墓の下部遺構とも考えられようが丁度主体部の上の一部を覆い、中央部が落ち込んでいる。これは木棺の棺材が腐朽し内部に落としたもので、主体部の床面から配石の下面までは50cm前後で棺の高さに合致し蓋の上を覆う石材の可能性が強いといえよう。4号木棺墓ではもっと多くの配石が見られるがこれも主体部の上を覆うような状況で出土したこと、その有り方も3号木棺墓と同様に中央部が窪み、床面からの高さが同一である事など棺の上を覆う可能性が強い。ただ石材が大きく石が立つのもあり、支石墓の可能性も捨て切れない。床面に接して小口に板状石を14、23号木棺墓などで見られる。これは組合せ式木棺の小口部の板材を支えていたものであろう。ほとんどの木棺墓に小壺が副葬されているが墓壙の掘り方の壁面近くから出土している。このことは小壺が棺外に

副葬されていたことを意味し、当時の送葬儀礼の一端を示している。甕棺にも棺外副葬の例が見られる。甕棺墓では軒盛高木遺跡や、飯氏遺跡などで調査される等ある程度多くの列埋葬の例は知られるが木棺墓のこの時期の例では極めて珍しい貴重な例であろう。甕棺墓の列埋葬は前期末ごろからみられ中期前半に確立した墓地形態といわれており、甕棺の列埋葬に影響を与えた初現的埋葬状況を表しているものであろう。今回の調査では弥生時代前期の木棺墓と甕棺墓があるが甕棺墓を切る木棺墓は全く認められない。このことは甕棺墓に先行して木棺墓が造営されていたか、もしくは木棺墓に墓標或いは盛り土を有し、外見上それが認知できたことから、それを避けて甕棺の造営が行なわれた可能性もある。しかしながら副葬小壺の比較では一部平行するがやや新らしい傾向が窺われ甕棺墓の方が後続する可能性が強いではなかろうか。小壺は大まかに5類に細分した。円盤貼り付け上の底部には高、低の二種があり低い底部の土器は胴部との境を笠で押え、その高さを強調している。従来の考えでは底部が高い円盤貼り付け状の壺を板付I式土器といえよう。しかしこの考えは再検討すべきとの意見があり、今回出土した壺類は微妙なこの時期の所産であり、ここでは板付I～II式にかけての木棺墓群としても大過は無かろう。

今回の調査では木棺墓と共に計44基の甕棺が出土している。甕棺変遷図に示したように板付I式時の特徴を残す27号甕棺が最も古く18号甕棺が最も新しいものである。板付I～II式（伯玄式）から須玖式にかけての墓地群である。最も多いのは7号甕棺のように胴部中位に最大径を取る甕棺で計25基を数える。その他の形態を示す甕棺は数基であり、この時期がこの墓地の最盛期となる。今回の調査では墓地の一角を調査しただけで墓域全体の調査ではないので全体の構成は明らかではない。今回の調査区に隣接して東側を試掘調査したところ木棺墓若しくは土壙墓及び甕棺墓が確認されている。今回の木棺墓の列よりも一段高い位置に在り、今回のA、B列に直接続く列ではなく、別の墓地群が形成されるものであろう。天神森2次調査でも3次調査と同時期の前期の甕棺が出土している。仮りに連続する墓地であるとすればその距離は約250m離れており、かなり広い範囲に展開する大墓地群の可能性がある。空港の西側、雀居7次調査ではほぼ同時期の土壙、甕棺墓が集落近くに10数基検出されているが、今回の調査のように集落から離れて人規模な墓地を形成するのは、単なる集落規模の相違によるものか、階層の分化に起因しているのか今後の検討を要する。

下月隈 B 遺跡群 2 次調査

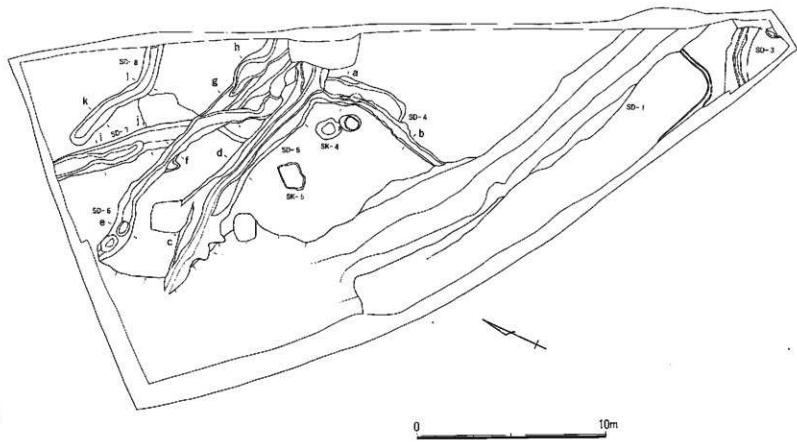
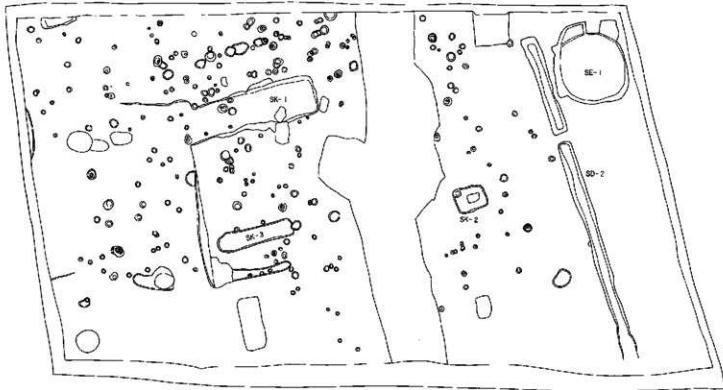


Fig. 51 造構全体図 (1/200)

1. 調査の概要

試掘調査は平成5年8月28日に二本のトレンチを設定して実施した。その結果ピットなどが確認されたので、翌年度に本調査を実施することとなった。調査地点は福岡平野と粕屋平野とを二分する月隈丘陵の南西部の丘陵据部にあたる。標高10m前後を測り福岡空港を望む地点である。先に報告した天神森3次調査地点とは浅い谷を隔ててその南約60mの位置となる。調査区は幅約2mの道路を挟んで二分される。南側区では大正初期まで使用されていた池とそれに流れ込む水路が大半を占めその東側に自然流路と考えられる溝状構造が5条蛇行している。他に浅い土壌2基、瓦を用いる近世の井戸等があるが古い遺構はない。ただ南端の溝は茶褐色の覆土でやや古そうであるが遺物が出土していないその時期は不明である。北側区では柱穴が多く検出出来たがその他に桶を井筒に用いた井戸や浅い土壌がいくつか見られる。柱穴には拳大の根石をもつものや柱その物が残っているのも有るが建物を復元するまでには至らなかった。遺物は中世の青磁や土師器、近世の陶磁器等である。

2. 遺構各説

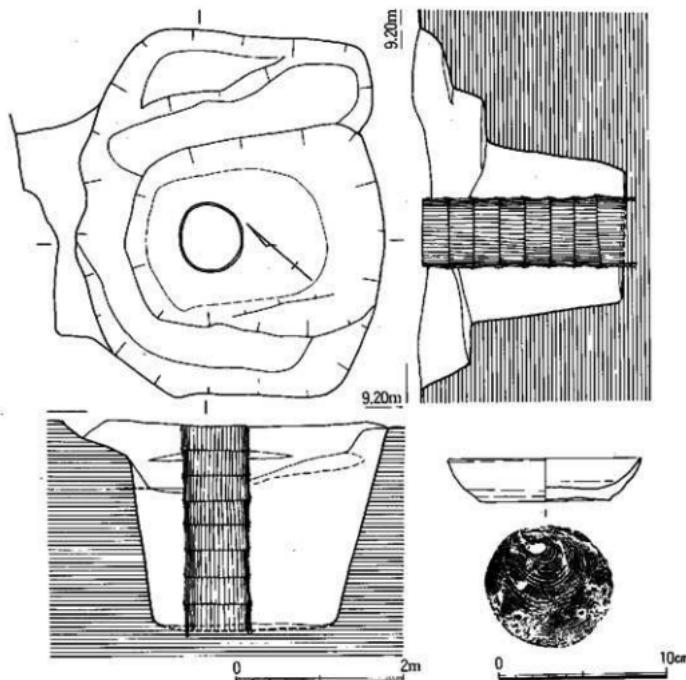


Fig. 52 1号井戸及び出土土器実測図 (1/60・1/3)

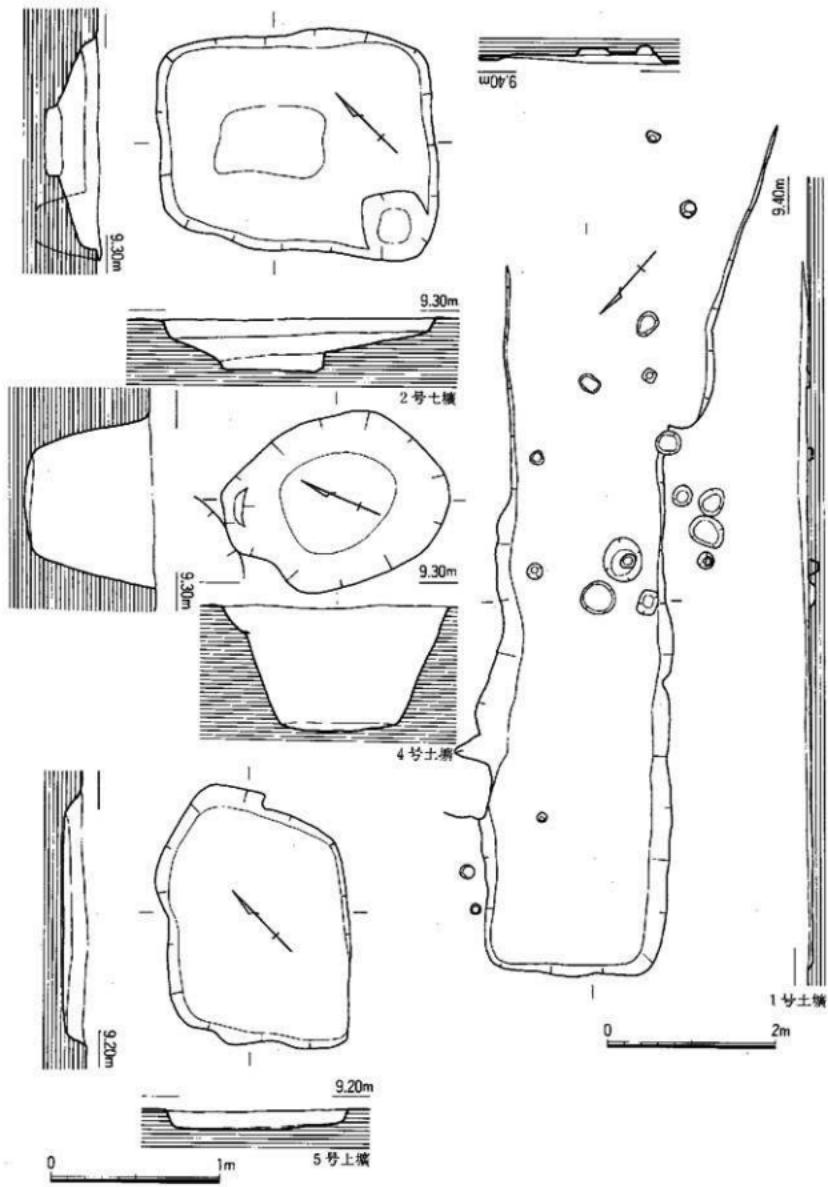


Fig. 53 1・2・4・5号土壤実測図 (1/30・1/60)

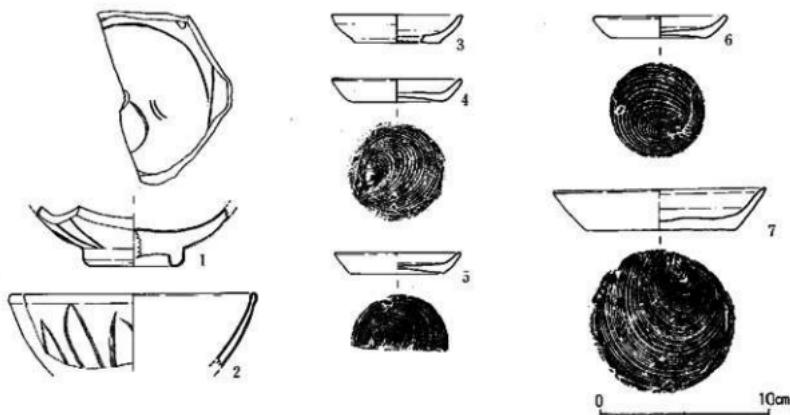


Fig. 54 1・4号土壙出土遺物実測図 (1/3)

(1)井戸の調査 (Fig.52)

北調査区の東隅に検出した。大型の掘り込みをもち平面形は隅丸長方形である。整面は上層が黄褐色粘質土で青灰色粘質土、暗灰色砂層となり、崩落の危険が有ったので調査を断念した。掘り方の規模は中心部で東西4.23m、南北3.64m、調査した深さで4.25mを測りそれ以上の深さとなる。西から北では掘り方が二段、東側では更にその上に段を設けて三段掘り込みとなり、各々平坦面を有する。内側の掘り方は北西が狭まる隅丸の台形様を呈する。その規模は中心部で3.05m×2.3mを測り、北西によりに桶を用いた井筒をもつ。井筒は径80cmほどを測り、幅7cm、長さ45cmの板材で桶を造り上下を竹の籠で締め付けている。

出土遺物 (Fig.52)

井戸の掘り方から出土した。底部糸切りの土師質の壺で口径11.4cm、器高2.5cmを測る。体部は内湾し口縁部は尖る。

(2)土壤の調査

1号土壙 (Fig.53)

北調査区の北寄りに置する。平面形は南北に長い隅丸長方形で北壁は浅くなり消滅する。幅2.2m、長さ7.1m、深さ最も深いところで0.15mを測る。覆土は茶褐色土で締まっている。

出土遺物 (Fig.54-1~3)

1、2はII-2類の龍泉窯系青磁碗である。1は口径14.8cmを測り胎はやや薄いオリーブ色の半透明で胎土は灰白色で体部外面に平面的な運び紋を描く。2は同底部破片で灰緑色で表面は白い斑点で覆われる。胎土は白灰色で砂粒を含む。露胎は赤茶色を呈する。3は底部糸切りの土師器皿で口径7.7cm、器高1.6cmを測る。

2号土壙 (Fig.53)

1号土壙の16m南に位置する隅丸長方形の土壙である。南北1.64m、東西1.3m、深さ0.2mを測り中央部を更に5cmほど掘り進めている。北東隅にはピットをもつ。覆土は暗褐色で出土器は土師器や須恵器の小破片が見られ、古代に属する遺構と考えられる。

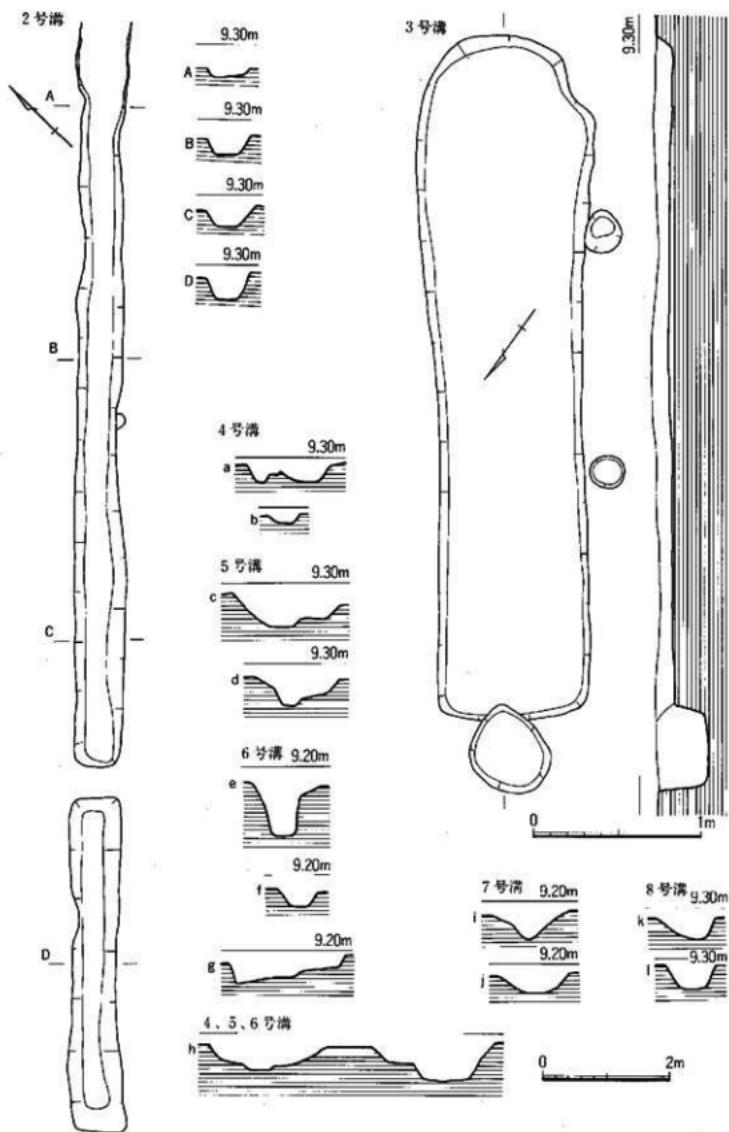


Fig. 55 3号土壤・2号溝実測図 (1/30・1/80)

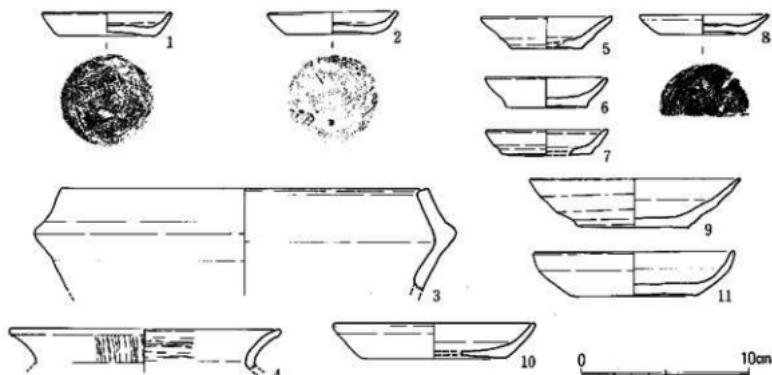


Fig. 56 2・4号溝、ピット出土上器実測図 (1/3)

4号土壙 (Fig.53)

南調査区のほぼ中央部に検出した土壙である。平面形は楕円形の土壙で他の土壙に比べて深い掘り込みである。その規模は南北1.45m、東西1m、深さ0.75mを測る。南側は二段に掘り込んでいる。

出土遺物 (Fig.54-4～7)

4から6は底部糸切りの小皿である。口径7.4～8cm、器高1.3cm前後を測る。7は壺で口縁部に煤が付着し外面には数条の手れた跡が残る。口径12.7、器高2.4cmを測る。

5号土壙 (Fig.53)

4号土壙の西4mの位置にある少し歪な隅丸長方形の土壙である。東西に長く1.5m、南北1.1m深さ1.4mを測る。南西部はやや幅を広めるが、床面はほぼ平坦で中央部がわずかに陥る。出土遺物は暗褐色で覆土からは弥生式土器や上師織の細片が出土しているが時期の特定は出来ない。

1号溝 (Fig.51)

現代まで使用された溝で幅2～3m、深さ0.8mほどで床面は西側の池に向かって低く傾斜している。池の埋め土の中からは陶磁器を初めとして日用雑器が数多く捨てられていた。

2号溝 (Fig.55)

北側調査区の南側、井戸のすぐ北に位置する。東から西へ展開する丘陵の延びにはほぼ平行する溝で東に寄った地点に陸橋部をもつ。東側が最も残りが良く幅0.85m、深さ0.45mを測り直線的に北東から南西方向へ延び、西側へいくに従い浅くなり端部で消滅し、現存長17.8mを測る。溝の東から1/3の位置に陸橋を設ける。幅0.5mを測りその西側で小皿が1点出土している。東端の調査区内で溝は終結しているが、更に陸橋部を挟んで東へと延びるものであろうか。覆土は灰褐色の軟質な土壤である。

出土遺物 (Fig.56-1・2)

底部糸切りの土師器小皿で口径7.7cm、器高1.3cmを測りほぼ同じ大きさである。口縁部から体部は回転ナデ内底面はナデ調整である。

3号溝 (Fig.51)

南調査区の南端に検出した幅1.4mを測る溝で、現存長3.5mを測り更に東西に直線的に延びている。覆土は茶褐色である。遺物は出土していないが近世までは下らない溝である。

4～8号溝 (Fig.51)

自然の流路と思われる溝状遺構である。4号溝は粗砂で覆われ洪水で一度に埋没したものであろう。幅0.5m前後で南から北へ蛇行している。5号～8号溝は幅が1～3mを測り所により幅に狭長があり二又に別れるのもあり統一性に欠けるが基本的には東から西側へ流れている。

3. 小結

今回の調査では中世～近世の集落の一部を調査したが、建物、集落を復元するまでには至らなかった。柱穴には柱が残っていたり、根石をもっていたりし、小規模な掘立柱建物であると考えられる。今後周辺の調査が進めば、今日に統く集落の一端を捉える可能性もある。

下月隈 B 遺跡群 3 次調査

1 発掘調査の概要

下月限B遺跡第3次調査区は下月限B遺跡がのる丘陵の尾根筋南西に隣接する谷間に位置する。現況は宅地であった。福岡空港の騒音に伴う運輸省による個別世帯の宅地の買い上げ、転居により、周辺の民家も転居、家屋の解体が進んでいた。調査は1994年7月5日にバックホーによる表土剥ぎから始めた。道路の新設に伴う調査であったが、帶状に東西に延びる路線予定地内の中心部分には水道管や排水溝が走りその部分は調査対象から除外した。対象から除外した部分をはさんで調査区域は二分され、更に南側の調査区は南北に横断する農業用水路により東西に区分した。北側の調査区の西側をa区、東側をb区、南側をc区とした。残土は場内で処理し、a・b・cの順に調査を進めていった。7月19日からa区、7月25日からb区、7月28日からc区の遺構検出にかかった。a・b区では、柱穴、溝、土壤が確認されたが、さらに井戸が4基検出された。遺構のほとんどは弥生時代中期末から後期初頭にかけてのものである。7月29日にb区、翌30日にa区の写真撮影を行った。その後各遺構の完掘を行い、同時にc区で確認された杭列の断ち割りを進めていった。8月1日からは遺構の実測を始め、8月8日にc区杭列の写真撮影を行った。その後実測、写真撮影の補足を行い調査は終了した。8月9日からは埋め戻しをおこなった。

2 遺構と遺物

(1) 検出遺構

1) 井戸

a区の東南端でまとまって検出された。

SE01 (Fig.59, PL.24) 平面形は円形を呈し、直径1.7~2.0mを測る。深さ2.3m、底面の標高6.3mを測る。

SE02 (Fig.59, PL.24) 平面形は円形を呈し、直径1.2~1.3mを測る。深さ2.4m、底面の標高6.3mを測る。

SE04 (Fig.59, PL.24) 平面形は円形を呈し、直径1.1~1.2mを測る。深さ2.0m、底面の標高7.2mを測る。

SE12 (Fig.59, PL.24) b区で検出した。平面形は円形を呈し、直径0.9~1.0mを測る。深さ2.2m、底面の標高6.1mを測る。

2) 土壙

SK10 (Fig.60, PL.25) b区の中央で検出した。平面形は不整形を呈し、径1.7~2.5m、深さ0.1~0.5mを測る。壁が斜めに立ち上がり、断面はすり鉢状を呈する。弥生土器甕が底面より40cm浮いた状態で出土した。

SK21 (Fig.60, PL.24) a区の西側端で検出した。北側は調査区外へ延びる。平面形は不整形を呈し、検出した部分の径1.3~3.8m、深さ0.4~1.2mを測る。壁は斜めに立ち上がる。

Pit06 (Fig.61, PL.25) b区の中央で検出した。平面形は円形を呈し、径1.0m、深さ0.1~0.6mを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。弥生土器甕が底面より20cm浮いた状態で出土した。

3) 埋立柱建物

調査区が狭隘なため建物の全体を検出することはできなかった。

SB05 (Fig.61, PL.25) a区の東側で検出した梁間1間、桁行2間以上の建物である。建物の南側

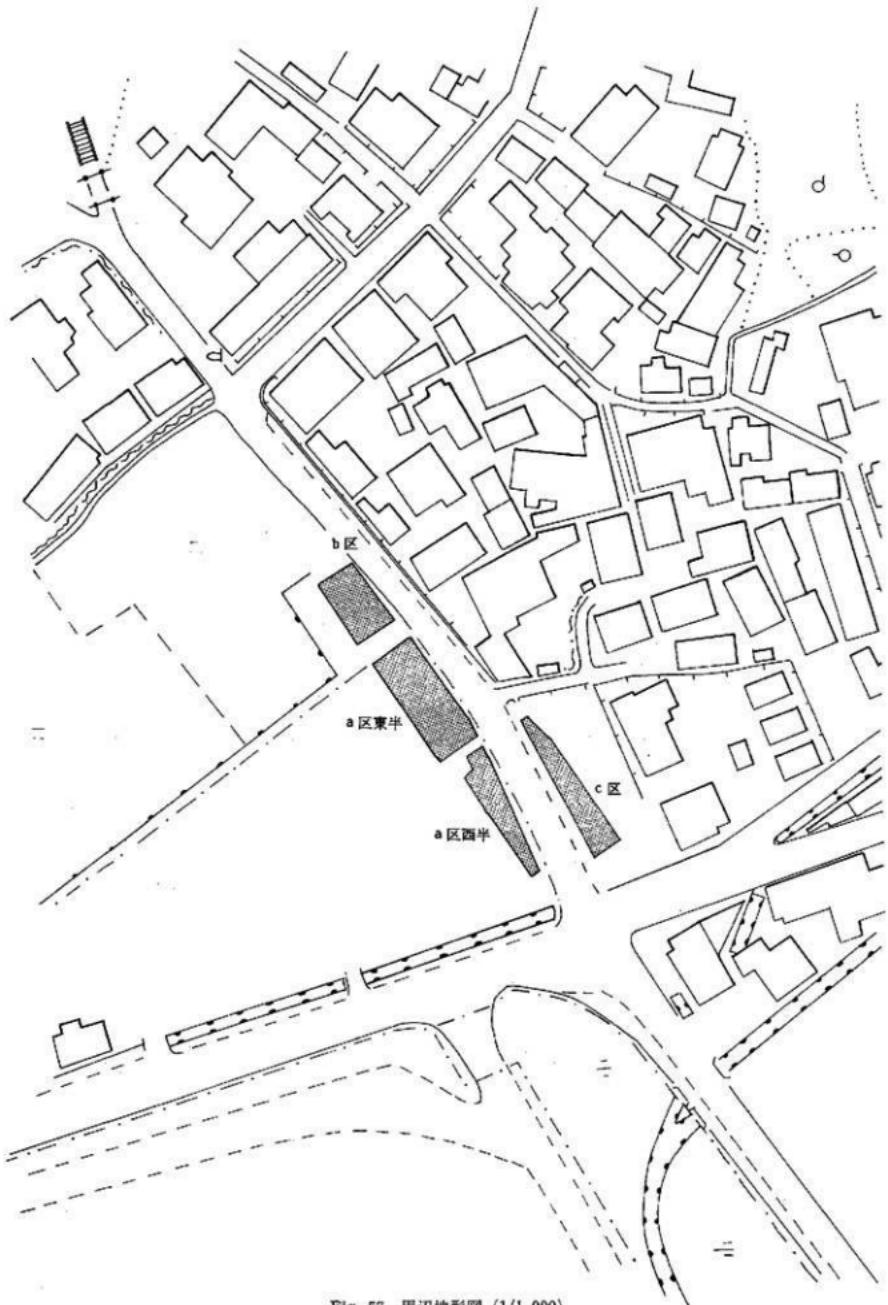
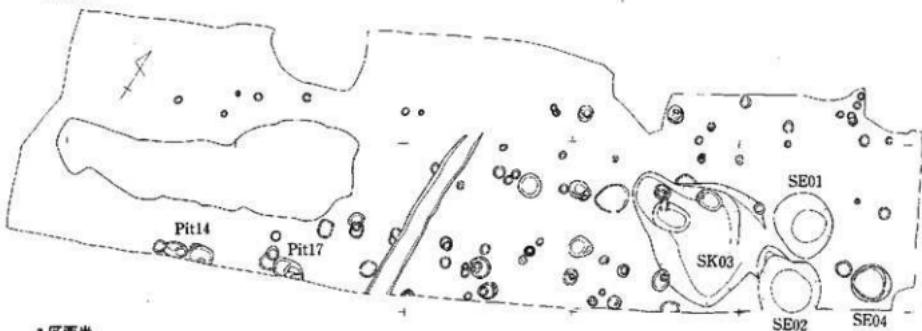
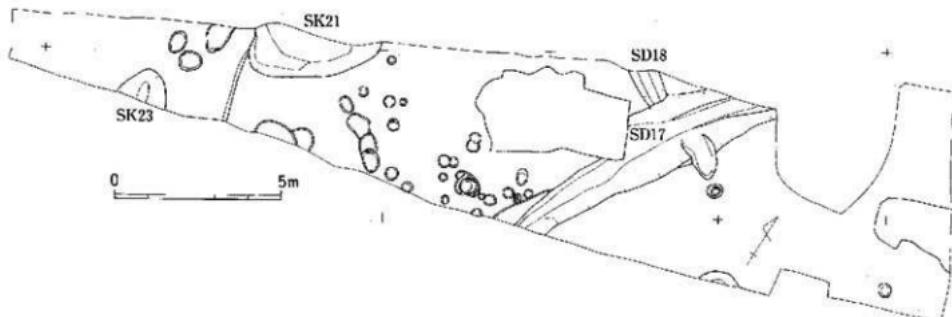


Fig. 57 周辺地形図 (1/1,000)

a 区東半



a 区西半



c 区



b 区

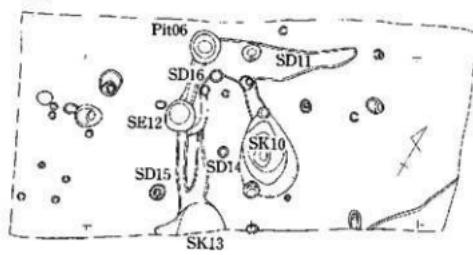


Fig. 58 遺構配設図 (1/300)

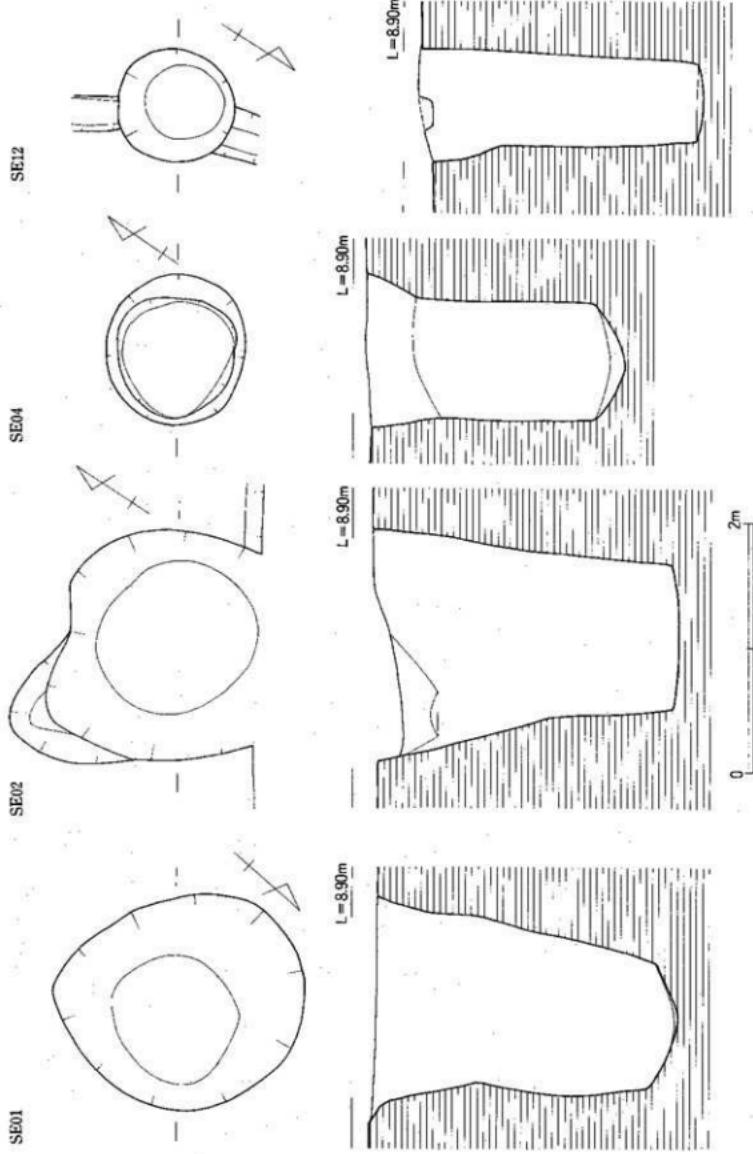


Fig. 59 南口尖測圖 (140)

は調査区外へ延びるものとみられる。方位はN 29° Wにとり、SB01よりやや東にふれる。梁間の全長5.9m、桁行の全長2.6m以上を測る。柱穴は円形で、径41~65cm、深さ16~74cmを測る。SK03に切られれているが、SK03の埋土に掘り込まれた柱穴は識別できなかった可能性もあるので、先後関係は不明である。

SA26 (Fig.61, PL.23) a区の東側で検出した。柱穴4個からなる柱列であるが、調査区外に重複して延びている建物の一部の可能性もある。柱穴間の心々距離2.7mを測る。柱穴は円形で、径29~35cm、深さ18~30cmを測る。方位はN-67°-Eにとる。

SA27 (Fig.61, PL.23) a区の東側南端で検出した。同じ規模・形態の柱穴2個からなる。壁面に

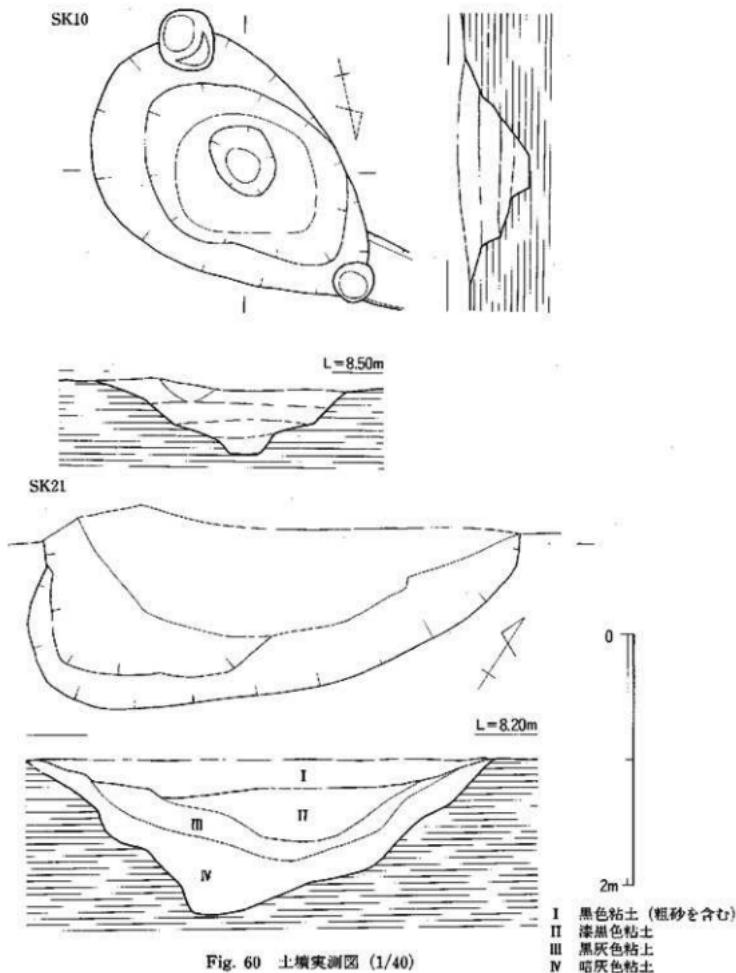


Fig. 60 土壌実測図 (1/40)

かかる柱穴の断面に径15cm前後の柱痕跡がみられる。方位はN-24°-Wにとり、SB05よりやや東にふれる。柱穴間の心々距離1.2mを測る。柱穴は隅丸方形で、径22~37cm、深さ20~28cmを測る。

4) 杖列 (Fig.62, PL.23)

C区のはば全域で検出した。ほぼ東西にのびる杖列で幅1.0mの範囲で杖は分布し、東西の延長11.0m検出した。58本の丸杖からなり、そのほとんどは垂直に打ち込まれている。杖底の水準高は7.2~7.7mとほぼ均等で、杖は先端から25~70cm残存し、東側にいくにつれて杖の残存長は長くなる。耕作土直下で検出され、打ち込まれている層は無遺物で、時期は不明。

(2) 出土遺物

SE01出土土器 (Fig.63, PL.26) 土器、石器の他、桃の果核が出土した。

弥生土器

無頸壺(1) 丹塗りの小型の壺である。口縁部に紐を通すために、向かい合った2ヵ所に2個ずつ孔を穿っている。口縁部から胴部外面上半にかけて横方向のヘラ磨き、下半は縱方向のヘラ磨き、内面はナデを施す。焼成は良好で、胎土の色調は淡黄褐色を呈し、口径10.4cm、器高13.3cm、底径4.4cmを測る。

袋状口縁壺(2~4) いずれも丹塗りである。2は短い頸部に袋状口縁がつき、口縁部と頸部の境に断面三角形の突帯をめぐらす。口縁部から頸部にかけて横ナデ、胴部外面は細かい刷毛目が施され中位よりやや上は横方向にナデ消されている。内面はナデを施す。焼成は良好で、胎土の色調は淡黄灰色~淡灰色を呈し、口径8.6cm、器高21.2cm、底径7.8cmを測る。3の口縁部は欠失しているが、2と同じ形状とみられる。遺存する部分の調整は2と同様である。焼成は良好で、胎土の色調は淡赤褐色を呈し、底径7.2cmを測る。4は口縁部が欠失しているが、頸部は2・3より長い。遺存する頸部

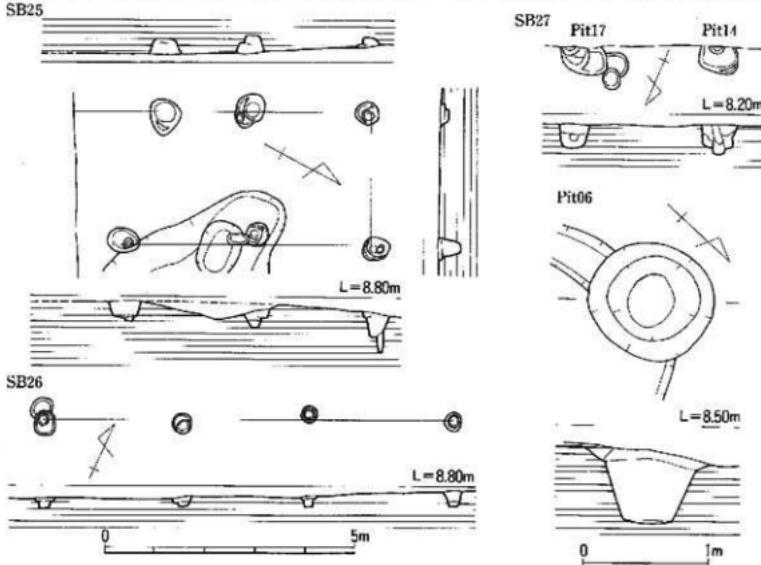


Fig. 61 摂立柱建物・土壤実測図 (1/100・1/40)

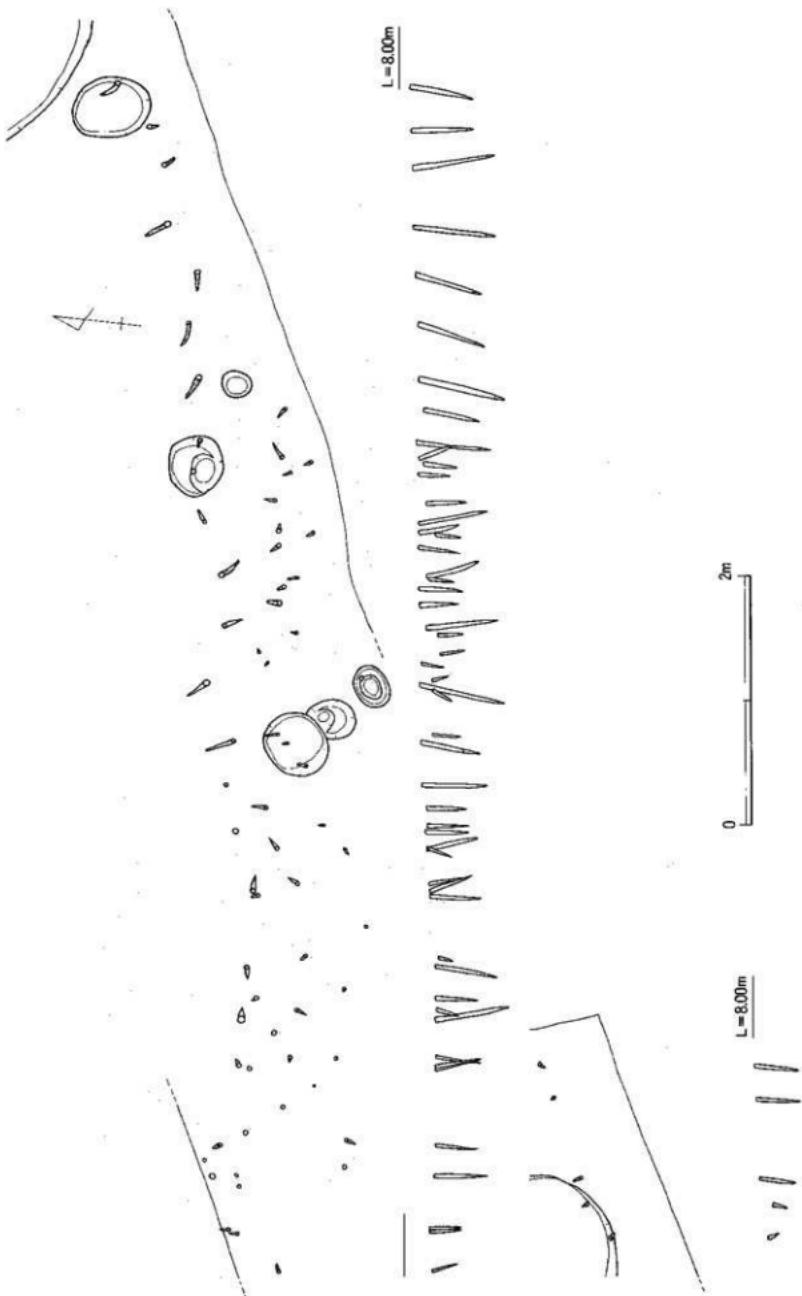


Fig. 62 杭洲柱尖測圖 (1/40)

以下の外面は横方向のヘラ磨きが施されている。焼成は良好で、胎上の色調は淡赤褐色を呈し、底径7.8cmを測る。

甕(5~8) 5~7は口縁部が「く」字状を呈する。6・7は胴部の最大径を中位よりやや上に持ち、倒卵形を呈する中型の甕である。「く」字状の口縁部は内湾ぎみにのびるが、7はやや直立ぎみである。屈曲部外面には断面三角形の突帯をめぐらせ、内面は稜をなす。焼成は良好で、6は外面とも灰褐色を呈し、外面には煤が付着し、剥離した部分が多くみられる。7は黄褐色を呈する。口縁部は横ナデ、胴部側面は細かい刷毛目、内面はナデを施す。6は口径35.6cm(復元)、器高45.6cm、底径10.4cm、7は口径40.8cm、器高62.8cm、底径11.4cmを測る。8は口縁部が逆「L」字状を呈する大型の甕である。胴部の下位以下は欠失している。胴部の最大径は中位よりやや上に持つ。逆L字状の口縁部は内傾し、内端部は突出せず、外端部は肥厚している。口縁直下に断面三角形の突帯が1条、胴部中位よりやや下とみられる位置に断面凸形の突帯が2条めぐらされている。焼成は良好で、色調は灰色を帯びた明赤褐色を呈し、外面の黒変した部位がみられる。調整は口縁部と突帯部分が横ナデ、胴部外面が縦方向のナデ、内面はナデを施している。口径61.0cm、残高59.0cmを測る。

SE02出土土器 (Fig. 4, PL.27) 土器、石器の他、獸骨片が出土した。

弥生土器

鉢形土器(9) 素口縁に、半球形の胴部をもつ。口径9.0cm、器高6.1cm、底径3.4cmを測る。焼成は良好で、淡灰褐色を呈する。

甕(10) 胴部中位での接合面は残っていないが、胴部中位が張った丸みを持った形状をとるとみられる。焼成は良好で、色調は内外面とも黒色を呈する。口縁部は横ナデ、胴部外面は刷毛目、内面はナデを施す。口径18.8cm、底径8.3cmを測る。

SE04出土土器 (Fig. 64, PL.27) 土器、石器の他、獸骨片が出土した。

弥生土器

甕(11) 広口の小型の甕である。口縁部は直立ぎみの頸部から緩やかに外反する。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。調整は口縁部外面が横ナデ、内面が横方向の刷毛目、胴部外面が縦方向の刷毛目、内面はナデを施している。口径10.8cm、器高9.5cm、底径5.6cmを測る。

袋状口縁甕(12) 丹塗りである。短い頸部に袋状口縁がつく。焼成は良好で、淡赤褐色を呈する。調整は口縁部内面が横ナデ、外面は胴部を含めて横方向のヘラ磨きを施す。口径6.9cm、器高13.7cm、底径5.2cmを測る。

甕(13) 短い頸部が上方でやや開き、口縁部となす。口縁上端部は外傾する。焼成は良好で、明赤褐色~淡灰褐色を呈する。口縁部は横ナデ、胴部外面は細かい刷毛目、内面はナデを施す。口径14.5cm、器高20.2cm、底径8.0cmを測る。

支脚(14) 厚手で、上方にすばまる。口径10.8cm、器高15.6cm、底径13.2cm(復元)を測る。焼成はややあまく、橙色~淡赤褐色を呈する。

鉢形土器(15・16) 15の胴部は直線的にのび、素口縁がつく。口径15.0cm、器高10.2cm、底径6.0cmを測る。焼成は良好で、淡赤褐色を呈する。16は「く」字状口縁に半球形の胴部をもつ。焼成は良好で、淡赤褐色を呈する。口縁部は横ナデ、胴部外面は細かい刷毛目、内面はナデを施す。口径29.0cm、器高18.9cm、底径9.4cmを測る。

甕(17) 口縁部が「く」字状を呈する。胴部最大径を中位よりやや上に持つ小型の甕である。焼成は良好で、淡灰褐色を呈する。口縁部は横ナデ、胴部外面は粗い刷毛目、内面はナデを施す。口径18.1cm、器高19.0cm、底径7.6cmを測る。

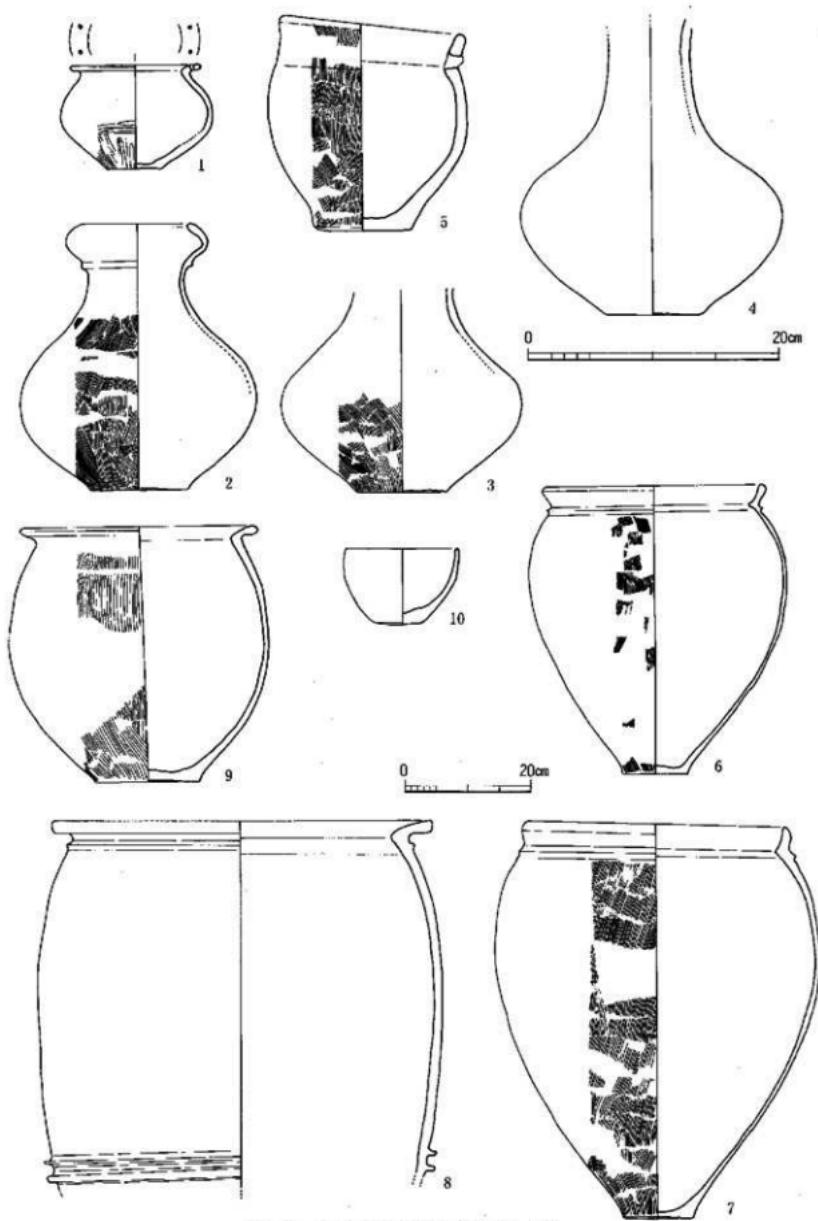


Fig. 63 SE01出土土器実測図 (1/4・1/8)

SK03出土土器 (Fig.64, PL.27)

土師器 鉢⑩ 口縁端部を薄くおさめる浅めの鉢である。焼成は良好で、淡赤褐色を呈する。口径15.2cm、器高5.1cmを測る。

Pit06出土土器 (Fig.64, PL.27) 土器の他、石製紡錘車が出土した。

弥生土器 壺⑩ 小型の壺である。口縁部は直立ぎみの頸部から小さく屈曲する。頸部と胴部の境

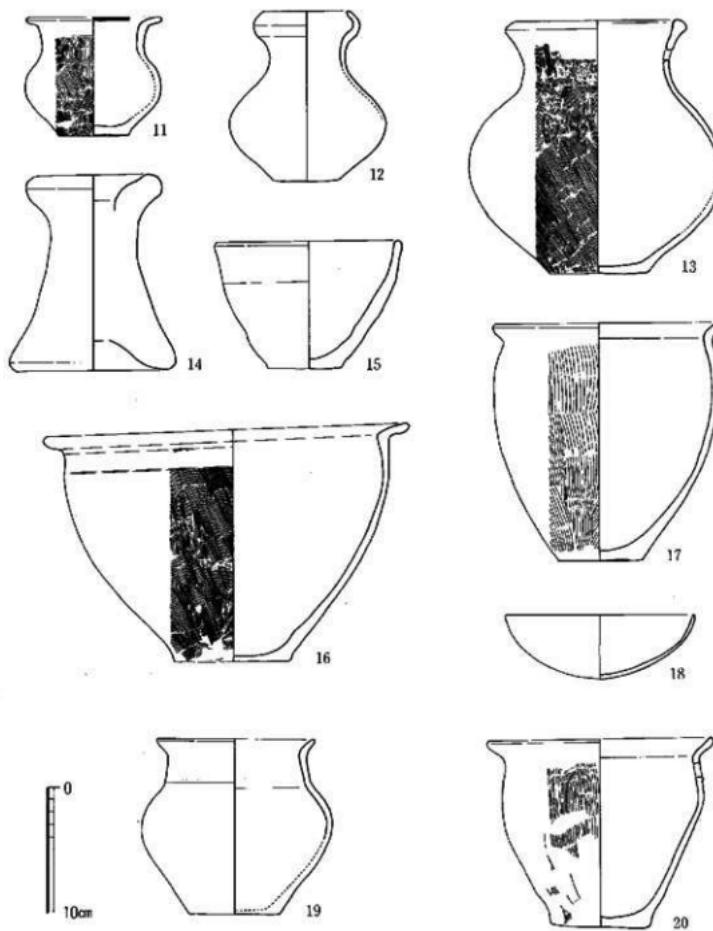


Fig. 64 SE02・04・SK03・10・Pit06出土土器実測図 (1/4)

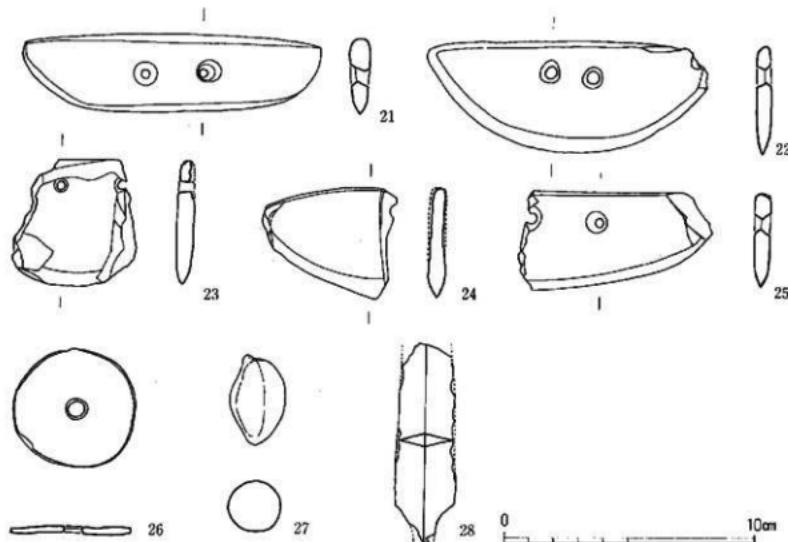


Fig. 65 出土石製品・土製品・鉄製品実測図 (1/2)

に凹線をめぐらす。焼成はややあまく、淡赤褐色を呈する。調整は器表が磨滅しているために不明。
口径12.5cm、器高14.0cm、底径7.2cmを測る。

SK10出土土器 (Fig.64, PL.27)

弥生土器 瓢箪 口縁部が「く」字状を呈する。腹部最大径を中位よりやや上に持つ小型の壺で、
口縁直下の向かい合った2カ所に孔を穿っている。焼成は良好で、淡赤褐色を呈する。口縁部は横ナ
マ、胴部外面は縱方向の刷毛目、内面はナデを施す。口径18.0cm、器高15.0cm、底径7.8cmを測る。

石製品

石包丁 (21~25) 21はSE01、22・25はSE04、23はSE02、24は攪乱からの出土である。

紡錘車 (Pit06からの出土で、直徑4.8cm、厚さ0.3cmを測る。

土製品

投弾 (SE02からの出土である。色調は明赤褐色を呈し、布目の圧痕がつく。

鉄製品

鉄劍 (SD17) 先端部が欠失している。SD17からの出土である。SD17からは弥生土器片の他、須恵器裏刷
部片が出土している。

3 小結

今回の調査では、後世の削平に加え調査区域が狭隘なために、集落の全体像を窺うことはできなかった。断片的に認められた柱列の柱間隔は2.7mを測るものが多く、一定の規格をとる建物群が展開していたであろう。柱穴、井戸、土壙の他に、幅狭な溝が検出されたが、下月限天神森第2次調査検出の中世の溝と同様に谷間の湧き水を流すために掘られたものであろう。井戸SE01・02・04から出土した土器は弥生時代中期末から後期初頭の特徴を示し、今回の調査区域から250m東北東に位置する下月限B遺跡第1次調査（下月限宮ノ後遺跡）で検出された甕棺墓群と同時期である。今回の第2次調査区域が第1次調査で検出された甕棺墓地の被葬者の居住区であった可能性が大きい。日常容器に混じって下半部が欠失した甕棺用の人壺や祭祀土器とみられる丹塗りの袋状口縁壺、蓋付無頸壺が出土している。下月限B遺跡の西2.5kmの那珂遺跡群第20・23次調査においても集落遺跡の環濠から甕棺用の大甕や祭祀土器が大量に出土している。那珂遺跡群第21次調査で検出された甕棺墓を取り囲むように「く」の字状に位置する第48・49号祭祀土壙と同じ器種構成である。報告者が述べるように、墓地祭祀と同じ組み合わせの祭祀土器がみられるのは集落内で祖靈祭祀を行い、祖靈の加護による防衛を願ったのであろう。下月限B遺跡第2次調査検出の井戸においても、祖靈祭祀が行われていたのであろうか。SE01・02・04からは石包丁も出土しており、周辺の谷間や低湿地での水田遺構の抜がりを示唆している。

註

- 註 1 福岡市教育委員会 「下月限天神森遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第76集 1981
- 註 2 福岡市教育委員会 「下月限天神森遺跡II」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第456集 1996
- 註 3 福岡市教育委員会 「那珂遺跡8—那珂遺跡群第20次調査の報告一」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第324集 1993
- 註 4 福岡市教育委員会 「那珂遺跡4—那珂遺跡群第23次調査の報告 その2—」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第290集 1992
- 註 5 福岡市教育委員会 「那珂5—第10~12・14・16・17・21次調査報告一」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第291集 1992

下月隈 C 遺跡群 1 次調査

1. 調査の概要

下月隈C遺跡は、高木下月隈線の道路拡幅に先立つ試掘調査で遺跡の存在が知られるようになり、下月隈C遺跡と命名された。その後、福岡空港南側の開発に伴う試掘調査により、下月隈C遺跡が高木下月隈線の南側の国有地に広がることが確認されている。すなわち、遺跡は御笠川右岸の沖積低地上の微高地に立地しており、第1次調査と試掘調査の成果からみて、この微高地は月隈丘陵から南西に延びる尾根の1つの末端であることが推定される。

第1次調査地点は遺跡の北端近く、博多区下月隈地内の標高約9m地点に位置する。1993年10月22・28日の試掘で遺構が確認された地点を中心として、調査区を設定した。福岡空港の誘導灯の地下ケーブルが埋設された地点や、現代の水路を避けて、地下ケーブルと水路の間にI区を、地下ケーブルの東側にII区を設定した。II区では遺跡の東端を確認できたが、I区では遺跡の西端が確認できなかったので、水路の西側にIII区を設定した。調査面積の合計は885m²であるが、地表下2m以上の掘削土のかなりを砂層が占めるため、4辺を法面として掘り下げているので、遺構検出面積は364m²である。

遺構検出面は標高6.8m前後、最も深い溝状遺構SD-02の底が標高5.8m前後である。表土下に現代の盛土がある。盛土の下は粗砂やシルトの複雑に重なりあった堆積を示す。特に西側のIII区で厚い堆積を示し、御笠川の氾濫によるものと推測される。I区・II区では粗砂などの下に灰褐色粘質土（I区17層、II区10層）がみられ、中世頃の水田跡とみられる。III区ではこの土層がみられないが、水田に適さないため水田化されなかつたのか、氾濫で流失したのか、定かではない。灰黒色粘質土（I区18層、II区13層）が弥生時代後期の包含層であるが、III区の土層との対応は明確でなく、I区・II区とIII区とで弥生時代における環境がかなり異なっていたであろうことを示唆する。II区東端とIII区の大部分では灰緑色粘質土（II区18層、III区13層）、そのほかでは粗砂（I区20層、II区19層、III区14層）を地山としている。

上述の事情から、I区とII区の間に約19m、I区とIII区の間に約14mの未検出部分が残ったためもあって、



Fig. 66 下月隈C遺跡調査地点 (1/5000)

遺構の性格は3調査区でそれぞれまったく異なっている。I区は掘立柱建物と柱穴からなる居住地区、II区は溝状遺構と土坑などからなる遺跡東端、3区は遺構・遺物がほとんどみられず集落外と見做される。

遺構・包含層（I区18層=灰黒色粘質土）から、弥生時代中期～終末の土器・石器・木器と、建物の礎板・柱など、コンテナ40箱の遺物が出土した。遺物の大半はI区から出土した。遺構に伴う遺物よりも、道跡外から流れ込んだとみられる遺物が多くを占めている。

調査期間は1994年4月8日から6月27日までであった。

第1次調査の3調査区は、それぞれ遺構の性格が異なるので、以下、調査区別に報告する。

2. I区の遺構・遺物－居住地区－ (Fig.68: PL.29)

I区西半では地山の砂層（20層）とその上の灰黒色粘質土（18層）の間に黒褐色粘質土（19層）があり、礎板を持つ柱穴は19層の遺存する範囲に幾分集中し、遺構はこの19層を切っているが、正確な掘り込み面は捉えられなかった。遺構上は18層に類似しているので、18層中のある地点とみられる。18層は土器片などを多く含んでいたが、19層中に遺物はほとんどみられなかった。遺構としては柱穴があり、掘立柱建物（SB-01）を構成している。

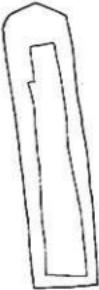
掘立柱建物を初めとして、柱穴に木製の礎板や柱の遺存するものが多いのがI区の特徴といえる。I区は遺跡内でも主に居住地区として使用されていた部分であることがわかる。SB-01を構成する以外の柱穴も掘立柱建物などを構成したはずだが、検出面で幅5mの調査区内では認識できなかった。

I区の柱穴群はII区・III区に延びていない。遺跡自体も、I区とIII区の間の幅14mの未掘部分まで途切れるようである。遺構検出面積115m²である。

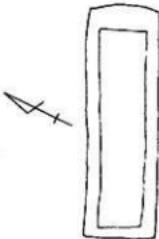
(1) 掘立柱建物跡（SB）

SB-01 (Fig.69-70) I区西端近くで検出された。調査区外に延びてはいるが、おそらく2間×1間に納まるものであろう。方向は正方位にほぼ一致している。調査区北壁に観察される柱穴も、SB-01を構成するものとみられる。SP-036とSP-046では礎板が、SP-018では礎板と柱根が遺存していたが、この事実は柱が抜去されなかつた

至下月限

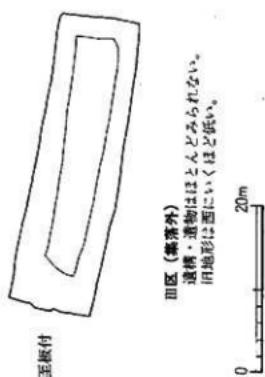


II区(埋葬施設)
溝状遺構のうちSD-02とSD-03は墓葬
が含まれる以前(発生時)中明後半に
属する。他の遺構は、天神塚
溝跡や下月限B溝跡に由来するであろう。
傳承柱穴はみられない。



I区(居住施設)
縦・横・柱根等のSB-01を初めとして、木製
板・柱根等を有する柱穴が多数みられる。
柱根等を主とする発生時後半の
掘立柱建物をみる。

Fig. 67 開拓区配置図 (1/600)



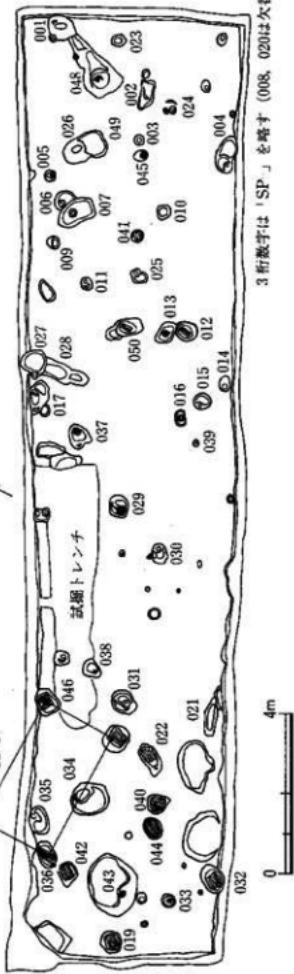
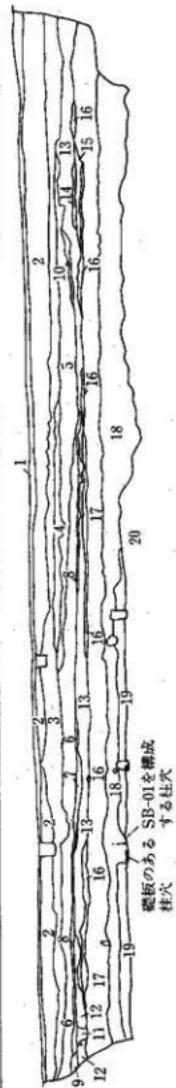
至版付

III区(埋葬外)
遺構・遺物はほとんどみられない。
田地形は西にいくほど低い。

0 20m

1区土層

1. 表上
 2. 盆土
 3. 背灰色粘質土 しまりあり
 4. 灰黑色粘質土 しまりあり
 5. 棕灰色粘質土 灰青色粘質土を含む、鉄分濃化し赤變
 6. 灰褐色粗砂
 7. 灰黄色粗砂
 8. 背灰色粗砂
 9. 灰褐色粗砂土
 10. 黑褐色粗質土
 11. 灰黃色粗砂 7層に類似
 12. 制宮色粘質土 砂をわずかに含む
 13. 灰白色粗砂 7層より細かい
 14. 背灰色粘質土
 15. 灰白色粗砂
 16. 棕灰色シルト
 17. 灰褐色粘質土
 18. 灰黑色粘質土 遊離塵土と類似、砂をほとんど含まず
 19. 黑褐色粘質土 砂を含む、19層上部で遊離塵土
 20. 粗砂 (地II)
- 100m



3桁数字は「SP」を略す(008, 020は欠番)

Fig. 68 1区実測図 (1/125)

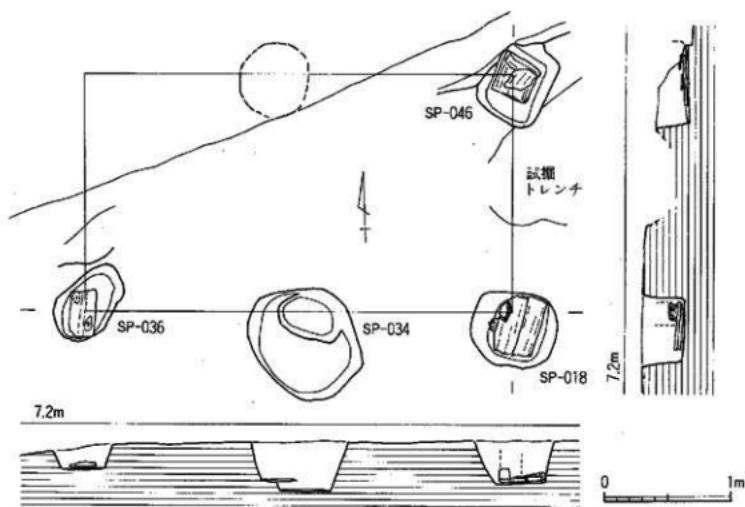


Fig. 69 SB-01実測図 (1/40)

ことを示唆し、これら柱穴の出土土器が小片のみであったこととも矛盾しない。SP-034では礎板は確認されなかつたが、北壁で確認された柱穴のうち、SB-01を構成するそれも礎板が確認できず、本来礎板が使用されていなかつたものと考えられる。

Fig.70の礎板は、出土状態の東辺を右に向けるように図示している。

SP-018の礎板は20001（西）と20002（東）の2枚からなる。直接には接合しないが、本米1枚であった可能性は残る。柱根20003は、半周程度しか遺存しないが、下面は切断面を残している。

SP-036の礎板20004は大きく反った形状が特徴である。上面・下面是丁寧に削られている。北辺・東辺は直線的できれいな切断面であるが、西辺は湾曲し、南辺は不規則で細かい加工が施されている。南西角の切り込みはきれいな切断面をなし、何らかの機能を求めた意図的な切り込みであることは確実である。4辺の切断面の様相差は切断の時間差を示し、下面・北辺・東辺の丁寧な加工は礎板には必ずしも必要とせず、南西角の切り込みは礎板にはまったく必然性のないものである。これらの事実は、礎板20004が本来礎板として作られたのではなく、ほかの木製品（例えば桶状のもの）の転用であることを示している。

SP-046の礎板は3枚からなっている。

土器片は小片ばかりで図示に耐えないが、弥生時代後期に属するものとみられる。

(2) ピット (SP) (Fig.70)

SB-01以外に建物は認識されなかつたが、礎板などを遺存する柱穴がI区全体にみられた。出土遺物はわずかな上器と石器であるが、上器は弥生時代中期後半から後期にかけてのものであり、中期の遺物はローリングを受けている。これらの遺構はいずれも弥生後期に属するとみてよい。以下、図示に耐える遺物のみを報告する。

SP-001からは器台1、底部2が出土している。SP-003からは底部3が出上している。SP-004からは

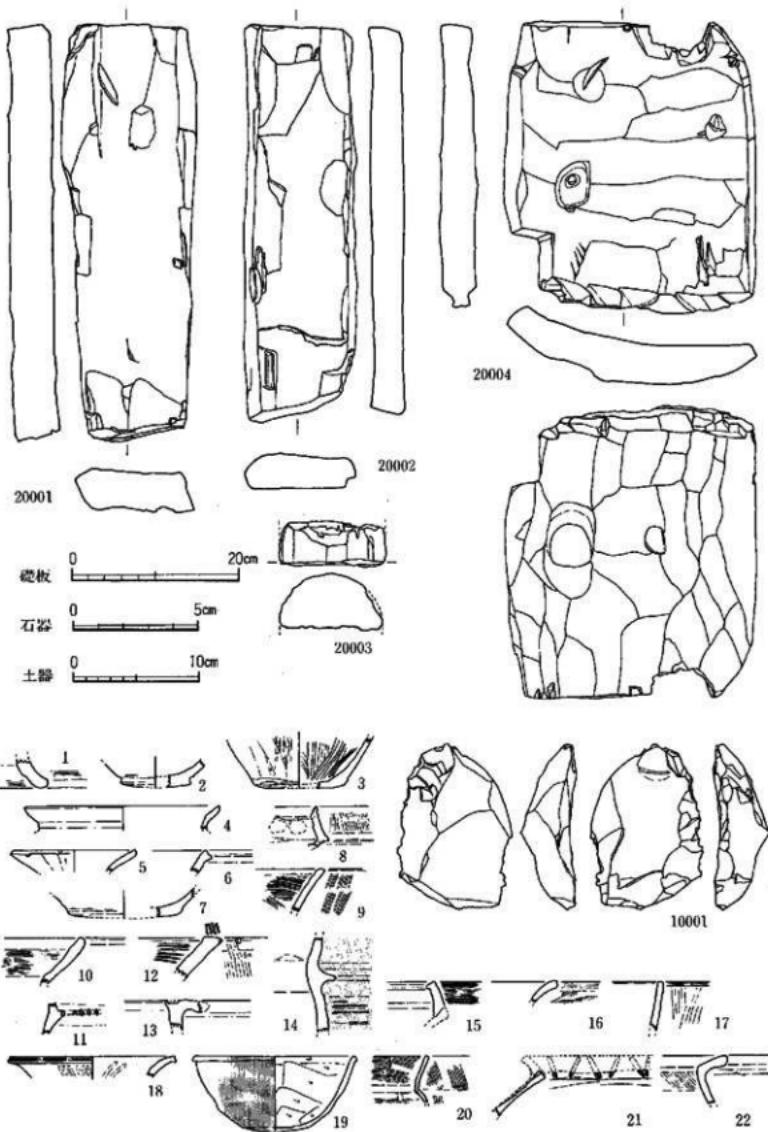


Fig. 70 出土遺物 1 (1/6 · 1/4 · 1/2)

- II区土壤
1. 表土
 2. 灰色粘質土 粗砂を多く含む
 3. 青灰色粘質土 粗砂を混する
 4. 灰褐色粘質土 粗砂を混する
 5. 青綠色粘質土 砂を多く含む
 6. 灰黑色粘質土
 7. 灰白色粗砂
 8. 鳴灰色粘質土
 9. 青灰シルト
 10. 灰褐色粘質土
 11. 灰褐色粘質土、10層よりも粗砂を多く含む
 12. 灰褐色粗砂と灰黒色粘質土を混する土。
 13. 灰褐色粘質土
 14. 灰褐色粘質土 (16層) 砂を混する土。
 15. 黑色粘質土 (16層) 砂を混す土。
 16. 黑色粘質土 (砂をほとんど含む) 粘性強い
 17. 黑色粘質土 (16層) と灰綠色粘土 (18層) を混する土
 18. 灰綠色粘土 (塊山)
 19. 粗砂 (塊山)

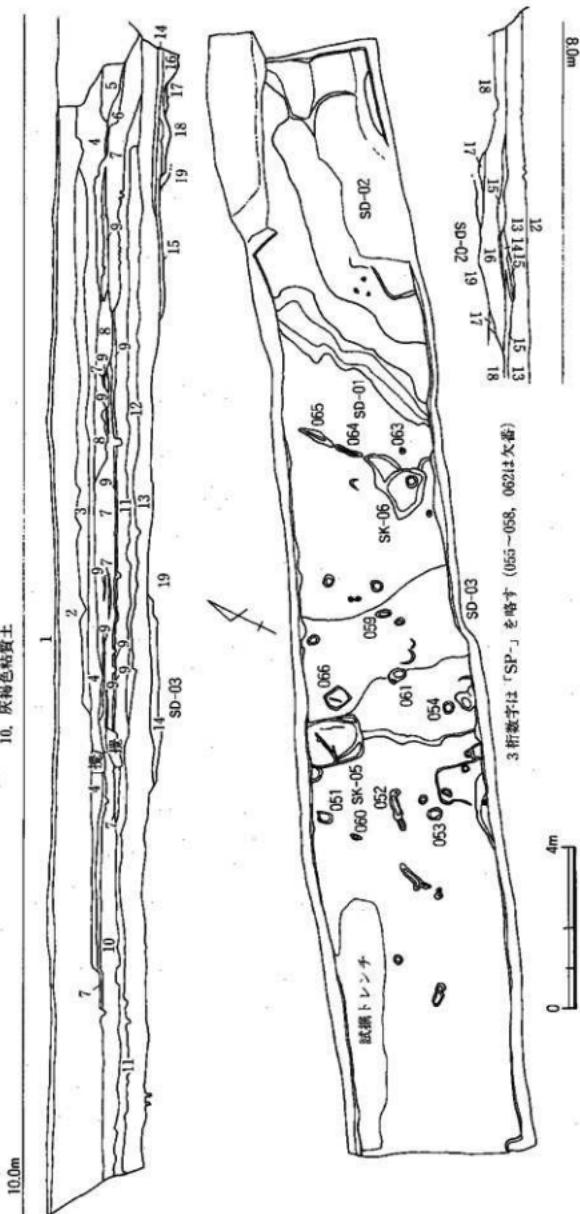


Fig. 71 II区実測図 (1/125)

上器片4～9と、スクレイバー-10001が出土している。口縁部5は、口縁端部のナデの後に外側のケズリが行われている。壺8は口縁部であるが、傾きは不明確である。SP-006出土の壺10は、外側に黒色付着物がみられる。SP-007からは壺11、口縁部12が出土している。口縁部12は口縁端部上面にハケ、外端にキザミがみられる。SP-010からは壺13が出土しているが、造構に伴うものとは考えがたい。SP-012は弥生時代後期のピットであるが、ここでは瓢形土器14を図示した。外側に赤色顔料が観察される。SP-013出土の壺15は、下端が素地接着面で剥離している。器面は灰白色だが、断面中央は灰黒色を呈する。SP-014出土の口縁部16は、外側に煤が付着している。SP-015からは口縁部17が出土している。SP-017からは土器18～20が出土した。口縁部18は内外面ヨコハケの後、タテのミガキで暗紋をしている。鉢19は痕跡的な底部を有する。外側に黒斑がみられる。SP-032出土の壺21は、内面が完全に剥離している。端部外側に、両刃状に削り出したハケメ工具を押し当てて紋様としている。SP-033出土の壺22は、口縁部外側のみ煤で黒変している。

3. II区の造構・遺物—遺跡東端— (Fig.71 : PL.30)

II区の土層もI区のそれとほぼ同様である。包含層である灰黒色粘質土(13層=I区18層)と地山である粗砂(19層)が直接接し、I区19層の如き黒褐色粘質土は面的には存在せず、SD-03の覆土(14層)のような形で認められる。II区の地山は大部分でI区と同様の粗砂(19層)であるが、II区東端では灰緑色粘質土(18層)となっている。II区東端にはこのほかにも土層の特徴があるが、SD-02の部分で述べることにする。

II区は、中央から東側に溝状造構3条を検出し、このほか土坑などもみられたが、確定な柱穴はみられなかった。礎板も確認されなかった。杭なども確認されたが、検出面からの深さは浅く、かなり高い面から打ち込まれたものであろう。

II区東端のSD-02、II区中央のSD-03は集落以前の自然流路とみられ、II区が集落の東端に近く、居住に適さぬ地点であったことを物語っている。出土遺物もI区よりは少なかった。造構検出面積は107m²である。

(1) 溝状造構 (SD)

SD-01 (Fig.72-73) II区の東寄りで検出された。ごく浅く遺存しており、断面形は不整で、底の上下が激しく、ほぼ南北方向に延びている。最大幅は1.2m、深さは最深で0.3mである。

出土遺物のうち、木器20005は用途不明の木製品である。全体に8角柱状に加工され、両端に紐などを縛り付けられるように細くしている。これらは中央から端部に向けて削り込むことで形づくられており、仕上げは不充分でササク

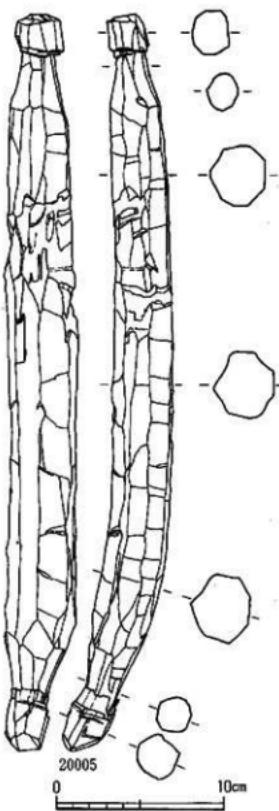


Fig. 72 出土遺物2 (1/3)

レ状になっている。図示した上側では、中央付近の面と削り込まれた面とが対応しているが、下側ではそのような対応がみられない。図示上側を先に加工し、然る後に下側を加工したと推定される。一部に工具の行き過ぎた傷跡があり、極めて薄く鋭利な工具を用いたことがわかる。一部損傷した部分があるが、古い損傷であるとはみられない。このほかには損傷や使用痕はみられず、未製品または未使用のまま廃棄されたものとみられる。

石器のうち、石庖丁10002はホルンフェルス製で、全体にローリングを受けている。砥石10003は砂岩製である。

土器は、甕23・26、底部25のように弥生中期後半のものが大半を占めるが、いずれもローリングを受けた小片であり、わずかに検出された底部24などにより、SD-01は弥生後期に位置づけられる。底部25の外側には赤色顔料が施されている。

SD-02 (Fig.73) II区東端で検出された。断面逆台形状であるが、かなり不整であり、人為的なものとはみなしがたい。II区東壁から南壁に向けて下がっていくので、この方向に流れていた自然流路であろう。幅2.4m、深さは最深で1.6mである。西岸には杭が確認されるが、きれいな配列はなさず、しかも極めて浅いものなので、SD-02とは無関係と見做される。

覆土は、下層（16層）が砂をほとんど含まぬ黒褐色粘質土であり、粘性が強い。ゆっくり堆積したことがわかる。上層（14・15層）は粗砂とブロック状の16層の混じりあった土層であり、洪水などによる短期間の埋没土とみられる。弥生時代後期の包含層である灰黒色粘質土（13層）はその上に堆積している。

したがって、SD-02は下月限C遺跡の主要構造が構築される以前（弥生中期後半まで）にほとんど埋没し、弥生後期にはわずかな水路として残っていたものと見做される。

黒色粘質土（16層）からの出土遺物は石器10004、土器27～33である。石器未製品10004は結晶片岩製である。一部に研磨された面が観察される。土器のうち、口縁部29は断面に素地の単位が明瞭に観察される。底部32の内面には赤色顔料の落滴が確認され、袋状口縁壺かとみられる。底部33も外側に赤色顔料が観察される。

14・15層からの出土遺物は石器10005と土器35～38である。石核10005は、漆黒の黒曜石製である。図示上面を打面としているが、最終段階では下から上への剥離も試みられている。土器は、16層出土遺物同様、弥生中期後半のものが主体をなすが、辛うじて検出された底部38のような弥生後期の遺物により、SD-02の最終的な埋没が弥生後期に降ることがわかる。口縁部35の口縁外端面は、ヘラ状工具で斜方向の割みを入れ、中央に沈線をめぐらせている。

出土遺物も、上層から推定されたSD-02の埋没の過程に矛盾しない。

SD-03 (Fig.74) II区中央で検出された。北西-南東方向に延び、最大幅4.2m、深さは最深で0.45mとごく浅く、人為的なものとは見做しがたい。杭が数カ所に確認されたが、ごく浅く、きれいな配列をなさないので、SD-03に伴う杭ではなく、後世のものであろう。覆土は黒褐色粘質土（14層）であり、弥生時代後期の包含層である灰黒色粘質土（13層）は、SD-03の覆土の上に堆積している。また、SD-03はSK-05、SP-059、SP-061、SP-066に切られている。この層位的事実からみて、SD-03はI区の居住関連遺構より古いものであると考えられる。

出土遺物は石器10006・10007と土器39・40などである。砥石10006は破片であるが、3面以上が砥石として使用されており、かなりきめ細かいものである。剥片10007は半透明の黒曜石製であり、石核調整剥片とみられる。壺39は口縁部がやや角張った印象を与えるが、明確な稜はなさない。接合部の仕上げが不充分なのであろうか。肩部の突帯が剥離して失われており、外側タテハケの後、突帯をめぐ

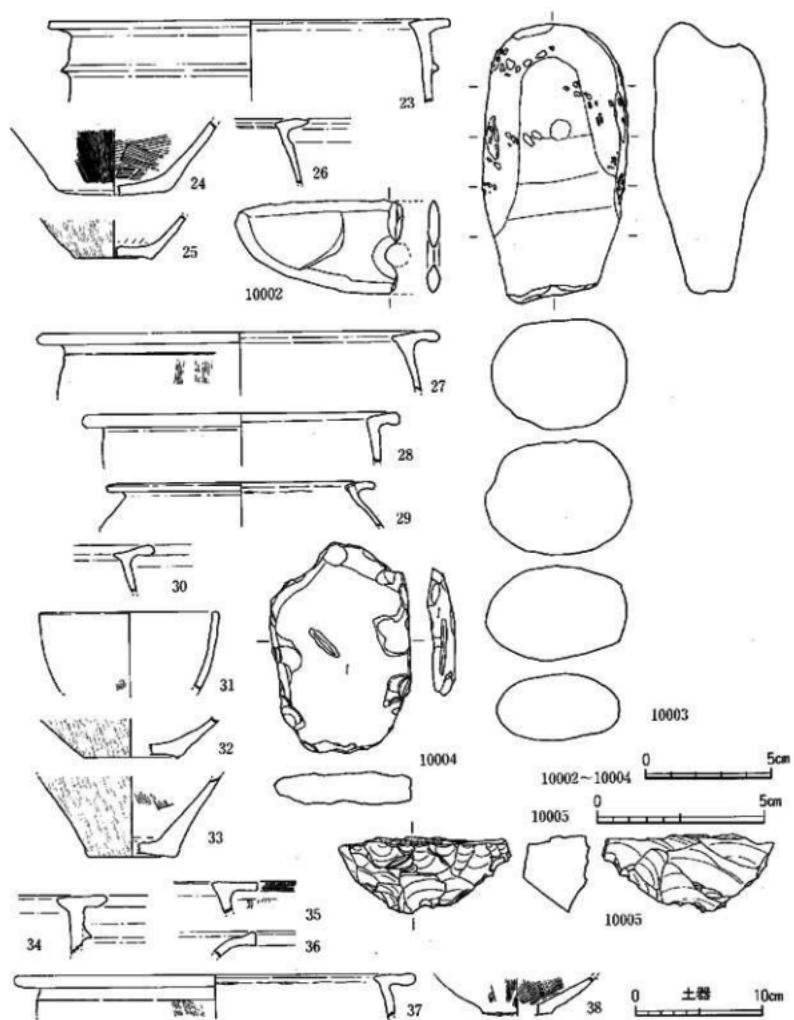


Fig. 73 出土遺物 3 (1/4・1/2・2/3)

らし、突帯上下をヨコナデしたことが看取される。

SD-03の出土遺物は弥生時代中期後半に属し、層位から想定した位置づけに矛盾しない。

すなわち、SD-03は集落以前（弥生中期後半）の自然地形の窪みであろう。

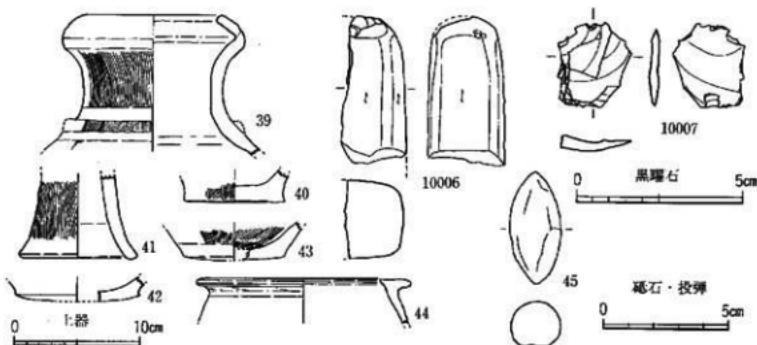


Fig. 74 出土遺物 4 (1/4・1/2・2/3)

(2) 土坑 (SK)

土坑は2基が確認された。樹皮のついた木の枝などが入っていることが特徴であり、人為的に埋められた可能性は低い。土器など少量が出土した。いずれも弥生時代後期に属し、I区の掘立柱建物などと同時期の可能性がある。

SK-05 (Fig.74) 調査区北壁近くで検出された。北西—南東方向の隅丸長方形で、長軸1.4m、短軸1.2m、深さ0.25mである。SD-03を切る。木の枝が出土した。出土遺物は器台41・底部42などである。出土遺物より、弥生時代後期に属することがわかり、SD-03との切り合い関係と矛盾しない。

SK-06 (Fig.74) SD-01とSD-03の中間地点で検出された。不整形で、南北1.7m、東西1.3m、深さ0.3mである。底部43などが出土しており、弥生時代後期に属する。

(3) ピット (SP)

II区には確実に柱穴と見做されるピットはみられなかった。ピットのうち、SP-063からは甕44が出土した。SP-063自体は弥生時代後期に属するものであり、甕44は遺構に伴わない。

このほかのピットも、弥生中期の土器が出土遺物の多くを占めるが、遺構の所属時期としては弥生後期のものが多い。

4. III区の遺構・遺物—集落外— (Fig.75 : PL.31)

III区の土層はI区・II区とはやや様相が異なる。中世の水田跡と思われる灰褐色粘質土（I区17層、II区10層）がみられず、代わって厚い粗砂層がみられ、御笠川の氾濫による堆積とみられる。下層においても、I区・II区と異なった様相を示し、I区・II区の弥生時代後期包含層（灰黑色粘質土=I区18層、II区13層）との対応はわからない。地山はIII区の大半で灰緑色粘質土（13層）、III区東端ではI区から連なる粗砂（14層、I区20層）層である。地山の切り替わる地点は記録していない。

地形は西にいくほど低く、検出面はIII区東端で6.5m、III区西端で6.0mである。

III区では遺構はほとんどなく遺物も皆無に近かった。遺構検出面積は142m²である。

(1) 土坑 (SK)

SK-11 III区南壁近くで検出された。不整形で、南北1.6m、東西2.4m、深さ0.3mである。木の枝が入っており、II区のSK-05と様相は似ている。

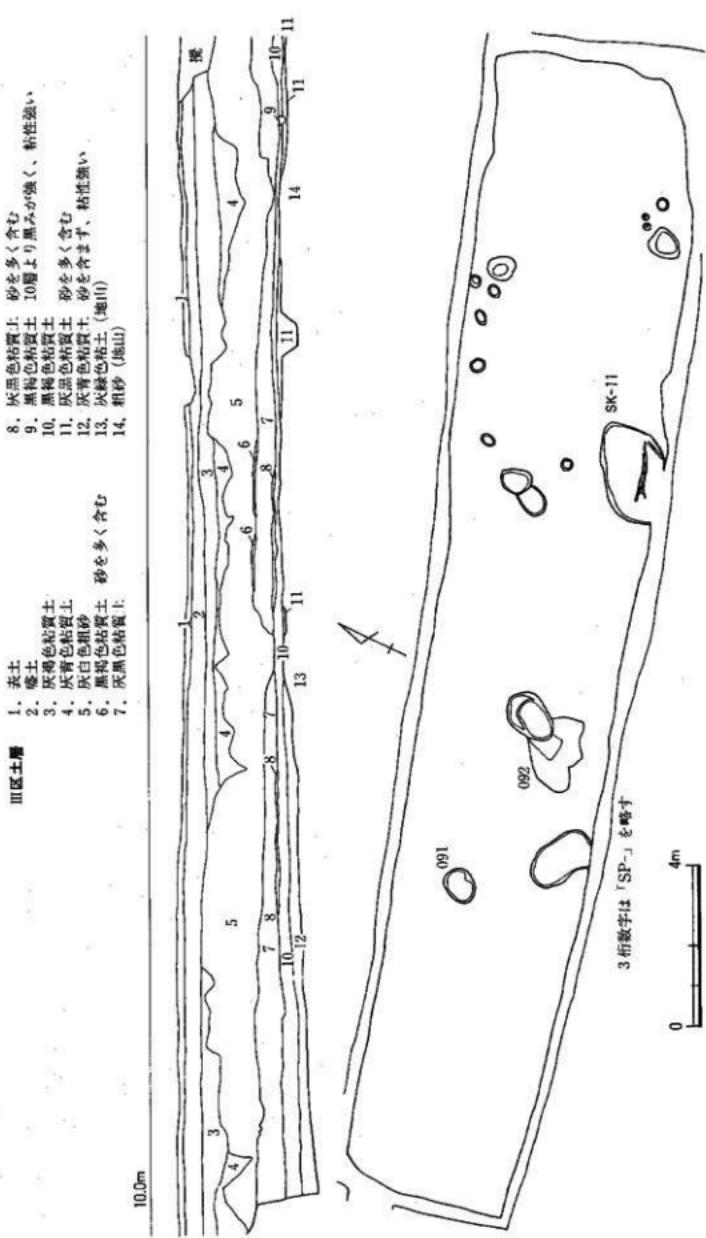


Fig. 75 III区実測図 (1/125)

(2) ピット (SP) (Fig.74)

Ⅲ区ではピットもほとんどみられず、いずれも柱穴とは考え難いものである。遺物もほとんどみられない。SP-091からは土製投弾45が出土した。

5. 小結

1993年の試掘で初めて存在が確認された下月隈C遺跡は、福岡空港南側の低地に点在する微高地に集落などが営まれていたものと推定されている。今回の調査は限られた範囲のものであったが、試掘時の想定を裏づけるとともに、今後の調査に手がかりを与えるものとなった。

下月隈C遺跡は現在極めて広く捉えられているが、空港南側の発掘調査も1995年から開始されており、その様相は徐々に明らかになりつつある。微高地ごとの様相はそれぞれ異なるようである。

第1次調査地点は月隈丘陵から南西に延びる尾根の1つの最末端と見做されよう。遺跡範囲の大半が上月隈地内に所在する本遺跡に「下月隈」の名が冠せられる所以である。第1次調査地点が集落として展開するのは弥生時代後期のみであり、その前後の時期は集落としての利用はされていない。礎板を埋置した柱穴が互いに隣接する例があり、弥生時代後期の遺構の間にも時期差が認められるので、一時的な居住ではなく、相応の戦略にもとづく低地進出であったものと考えられる。

出土遺物のうち、弥生時代中期の遺物は第1次調査地点の遺構とは無関係と思われる。いずれもローリングを受けているので、同集落内の別地点に由来すると考えるよりも、集落外からの流入とみるべきであろう。主に下月隈B遺跡に由来するものと考えられるが、調査区の土層から想定される御笠川の激しい氾濫の様相をみると、下月隈C遺跡のほかの微高地に由来する可能性も排除できない。

SD-01出土の木器20005は用途不明である。機織具を連想させるが、法量がやや小さいようであるし、未使用のまま廃棄しているのは解せない。ほかの木器と組み合わせて使用するものとも考えられ、類例を持ちたい。木器・礎板などは、いずれもその加工に鉄器が使用されているとみられ、鉄器の普及を物語っている。

石器はいずれも弥生時代中期を中心とする時期のものとみられる。遺構に伴うとみられるものはない。未製品10004は結晶片岩製であるが、同様の結晶片岩の、同じような法量の板状破片がほかにもみられ、近隣のいずれかの集落で、結晶片岩の磨製石器を作成していたのであろうか。

弥生時代後期にこの地に進出したのは、隣接する下月隈B遺跡の人々である可能性が高い。下月隈B遺跡は地形の上からも下月隈C遺跡と連なり、下月隈B遺跡には弥生時代中期後半の遺構・遺物もみられるからである。ただし、下月隈C遺跡の調査の進展を待って、また、類似した立地を示す雀居遺跡の調査成果とも対比することによって、第1次調査地点の位置づけも再考すべきであろう。

板付遺跡群第66次調査

1. 調査の概要

御笠川左岸に所在する板付遺跡群は、弥生時代の水田遺跡として名高い。

第66次調査は、遺跡範囲の北西側隣接地、博多区板付2丁目・3丁目地内の標高約9.5m地点で実施された。『板付周辺遺跡調査報告書』のJ-4地点・K-4地点に当たる。

近所の方の話では、市営住宅建設以前、この地点の水田は周辺より1段低く、条件の悪い水田となっていたという。

第66次調査地点は、市営住宅建設とともに1971～1974年の第6次調査地点に含まれている。第6次調査はトレント調査であり、未掘部分を多く残しているが、その報告に当たっては、第66次調査地点の西半に当たる部分を旧河川として想定している。

高木下月限線の拡幅に伴う試掘は、1993年8月から1994年1月24日までに数回行われ、6次調査における認識とは異なり、水田が遺存している可能性が指摘された。そこで、まず拡幅部分（対象地北半）、然る後に道路を切り換えて現道部分（対象地南半）を調査することとした。

しかし、対象地北半の、さらに西半分のみを調査した時点で、対象地の東側3分の2は旧河川であることが判明したので、対象地南半の調査は行わず、北半の調査も西半分はトレントのみにとどめることとした。

旧河川以外の部分では、灰白色の粗砂を多く含む土（3層）の下の青灰色粘質土（7層）上面（標高約7.2m）で遺構を検出した。足跡は多數みられたが、咲咲は確認できず、水田は不明確である。溝4条（SD-03は検出面を掘り込み面とする）と土坑3基が検出された。

調査区の東3分の2の旧河川は、粗砂層の途中までトレント状に掘り下げたところで、7月26日に

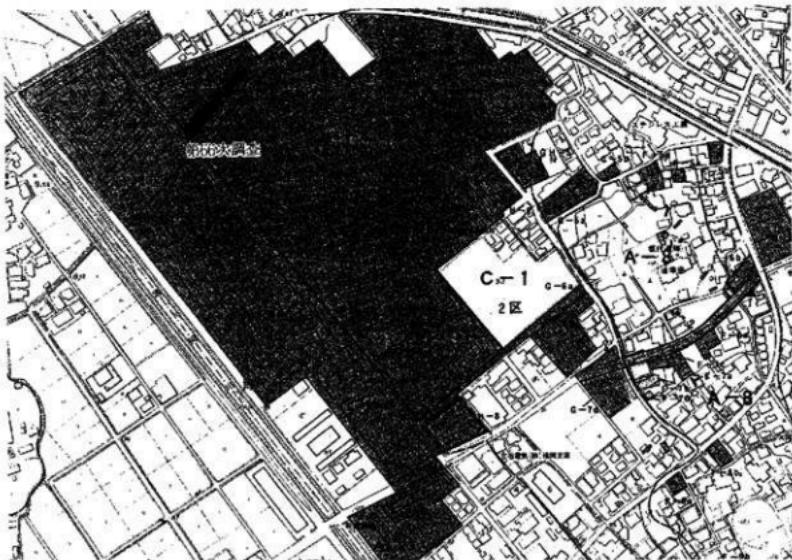


Fig. 76 板付遺跡調査地点 (1/5000)

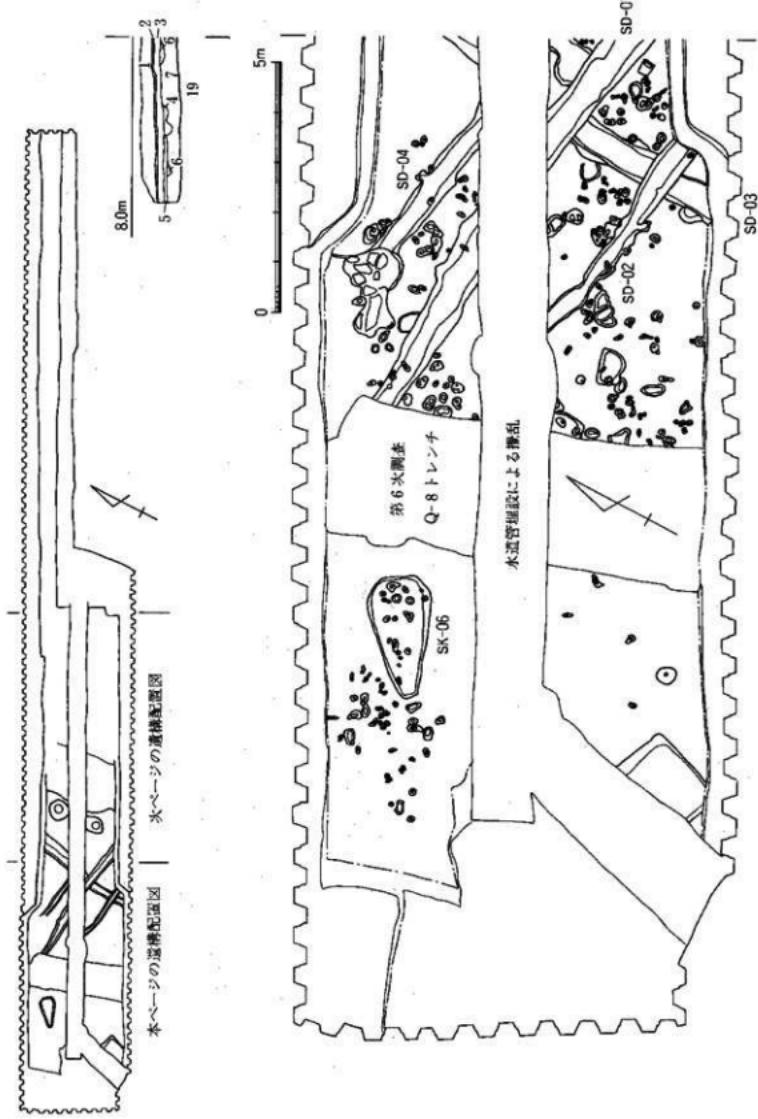


Fig. 77 調査区平面実測図 1 (1/100)

- 北壁土質
 1. 暗灰色粘質土 砂を多く含む
 2. 暗褐色粘質土
 3. 淡白色粗砂
 4. 淡白色砂質土
 5. 暗灰色粘質土
 6. 黄褐色粗砂
 7. 暗灰褐色粘質土 上油が添加

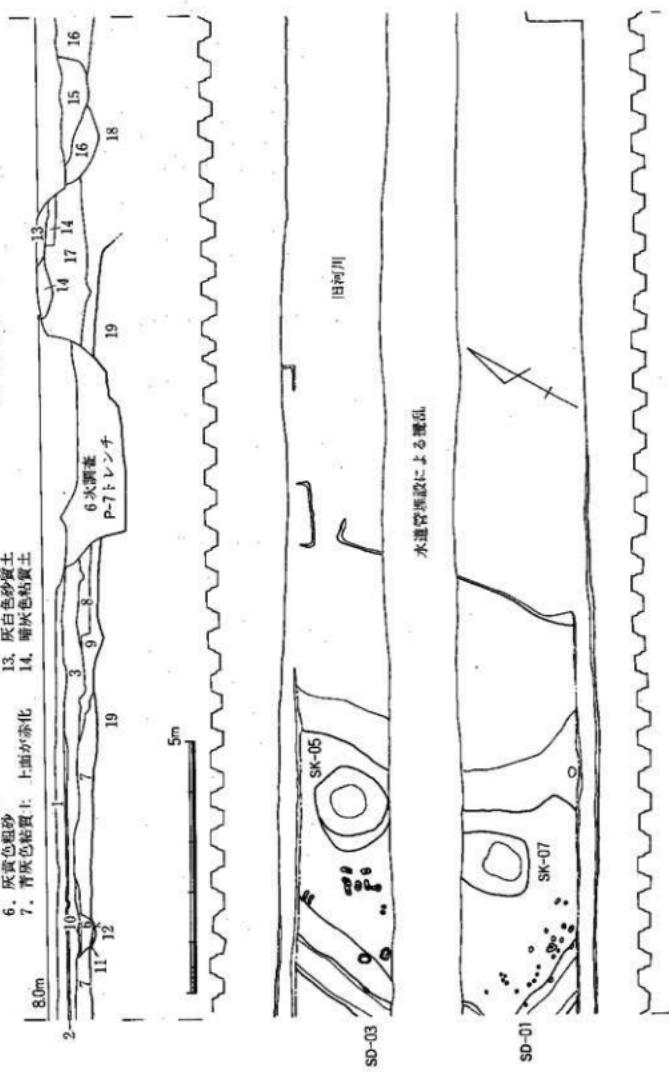
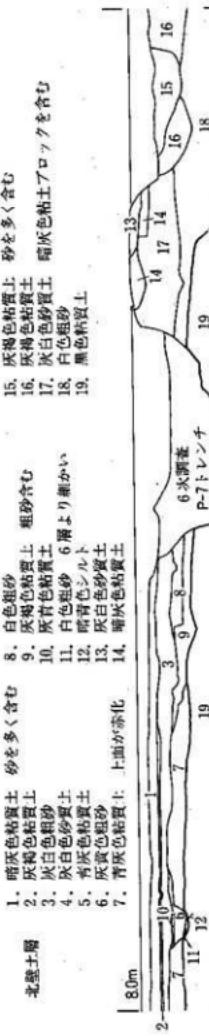


Fig. 78 調査区平面実測図 2 (1/100)

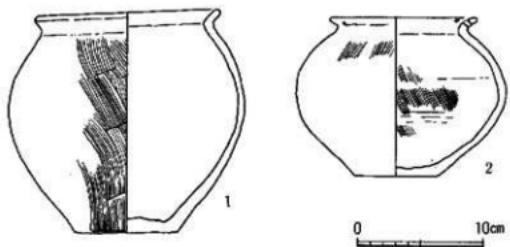


Fig. 79 出土遺物 (1/4)

接近した台風7号の風雨で壁面が崩落し、危険を避けるために調査を中止した。

調査区西端近くで第6次調査Q-8トレンチが南北に横切るように再検出された。また、北壁土層にも、第6次調査P-7トレンチが観察された。

遺構からの出土遺物はほとんどなく、旧河川の粗砂層からは、弥生土器などが出土した。合わせて、土器が3箱分出土した。

調査面積は545m²、調査期間は前後の矢板工事を含めて1994年6月1日から8月30日までであった。

2. 層位と旧地形

図示した土層は、市営住宅建設時の盛土よりも下の上層である。3層・8層・18層はいずれも粗砂層であり、一連のものである可能性も残る。東寄りの旧河川は、平面的にみると幾分湾曲しているが、これは第6次調査時に想定された旧河川推定線とはほぼ一致している。

7層（灰青色粘質土）は上位で赤変したところがある。7層上面では足跡も検出されているが、畦畔は不明確である。ただし、土層図上ではSD-03の東側に幾分の高まりが認められる。平面的な広がりは認識できなかったが、畦畔の可能性は残る。

3. 出土遺物

出土遺物は土器が3箱分出土した。

遺構からの出土遺物はほとんどなく、粗砂（3層）中、あるいは吉灰色粘質土（7層）上面より土器片、須恵器片などがわずかに出土した。

旧河川の粗砂層からは弥生土器が出土した。図示した遺物は完形の弥生土器である。このほかにも弥生中期後半から弥生後期初頭とみられる土器が旧河川の白色粗砂（18層）中より検出された。

4. 小結

調査前に期待したような水田は、はっきりしなかったが、第6次調査時に想定された旧河川の範囲を、限定された範囲ながら追認できた。

図 版



(1) 調査区全景（北西より）



(2) 調査区北東部遺構群（南より）



(1) 西擴張区全景（南西より）



(2) 4号甕棺墓（南西より）



(1) 3号甕棺墓（北西より）



(2) 7号甕棺墓（南西より）



(3) 8号甕棺墓（南西より）



(4) 9号甕棺墓（南西より）



(5) 11号甕棺墓（南西より）



(6) 13号甕棺墓（南西より）



(1) 14号甕棺墓（北東より）



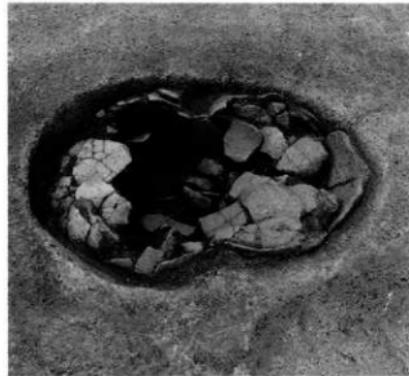
(2) 15号甕棺墓（東より）



(3) 16号甕棺墓（東より）



(4) 17号甕棺墓（北より）



(5) 20号甕棺墓（北より）



(6) 23号甕棺墓（南より）



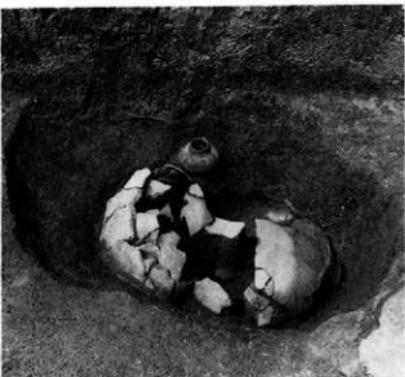
(1) 24号甕棺墓（南より）



(2) 27号甕棺墓（北西より）



(3) 29号甕棺墓（北東より）



(4) 30号甕棺墓（東より）



(5) 31号甕棺墓（北東より）



(6) 33号甕棺墓副葬壺



(1) 木棺墓群（南東より）



(2) 3号木棺墓上面（南西より）



(3) 3号木棺墓完掘状況（南西より）



(1) 4号木棺墓上面（南西より）



(2) 4号木棺墓下面（南西より）



(3) 9号木棺墓完掘状況（南西より）



(1) 17号木棺墓（南西より）



(2) 18・20号木棺墓（南西より）



(3) 28号木棺墓（南西より）



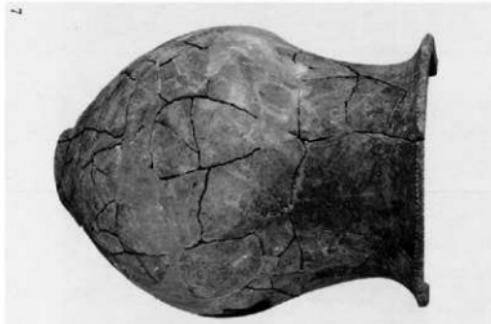
(1) 18号～21号木棺墓（南西より）



(2) 26号木棺墓（南西より）



(3) 34号木棺墓（南西より）

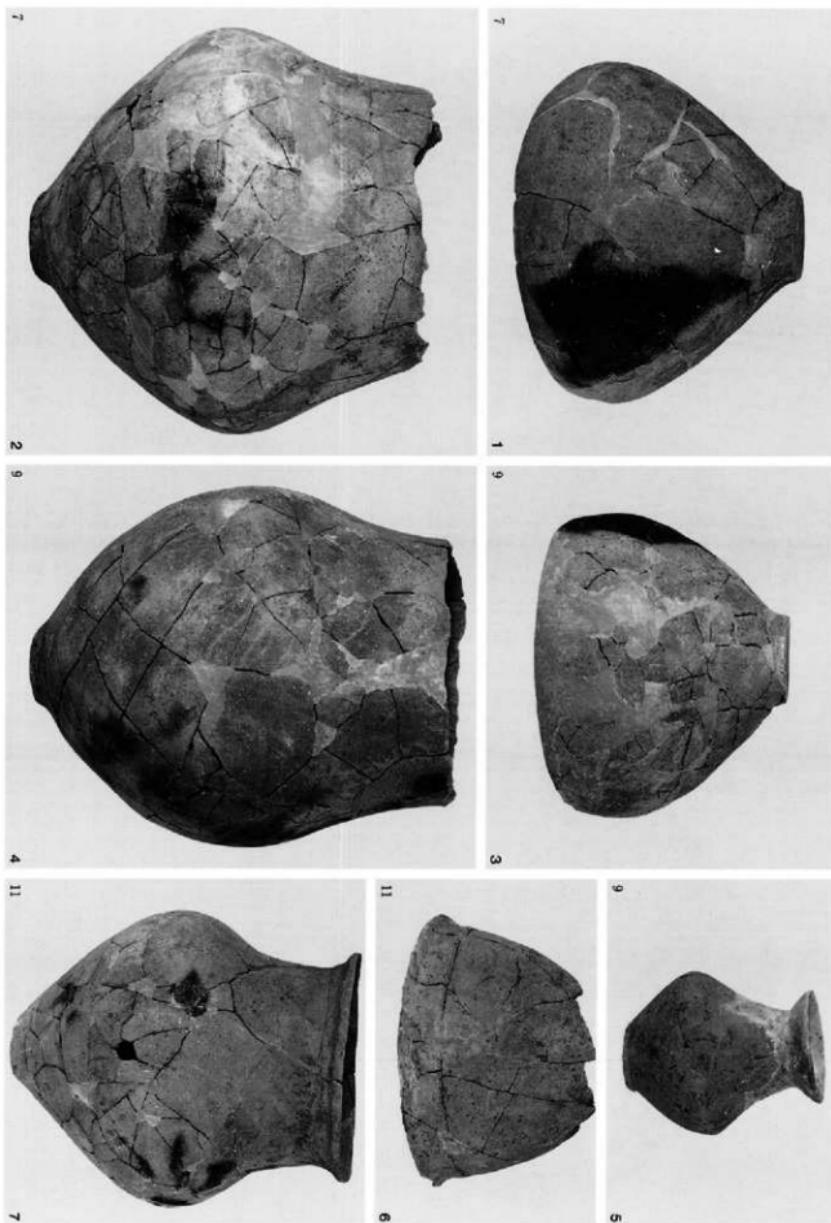


(1) 3号甕棺上甕
(4) 4号甕棺下甕

(2) 3号甕棺下甕
(5) 5号甕棺上甕

(3) 4号甕棺上甕
(6) 5号甕棺下甕

(左下の数字は
Fig番号を示す)



(1) 6号甕棺上甕

(5) 7号甕棺副葬壶

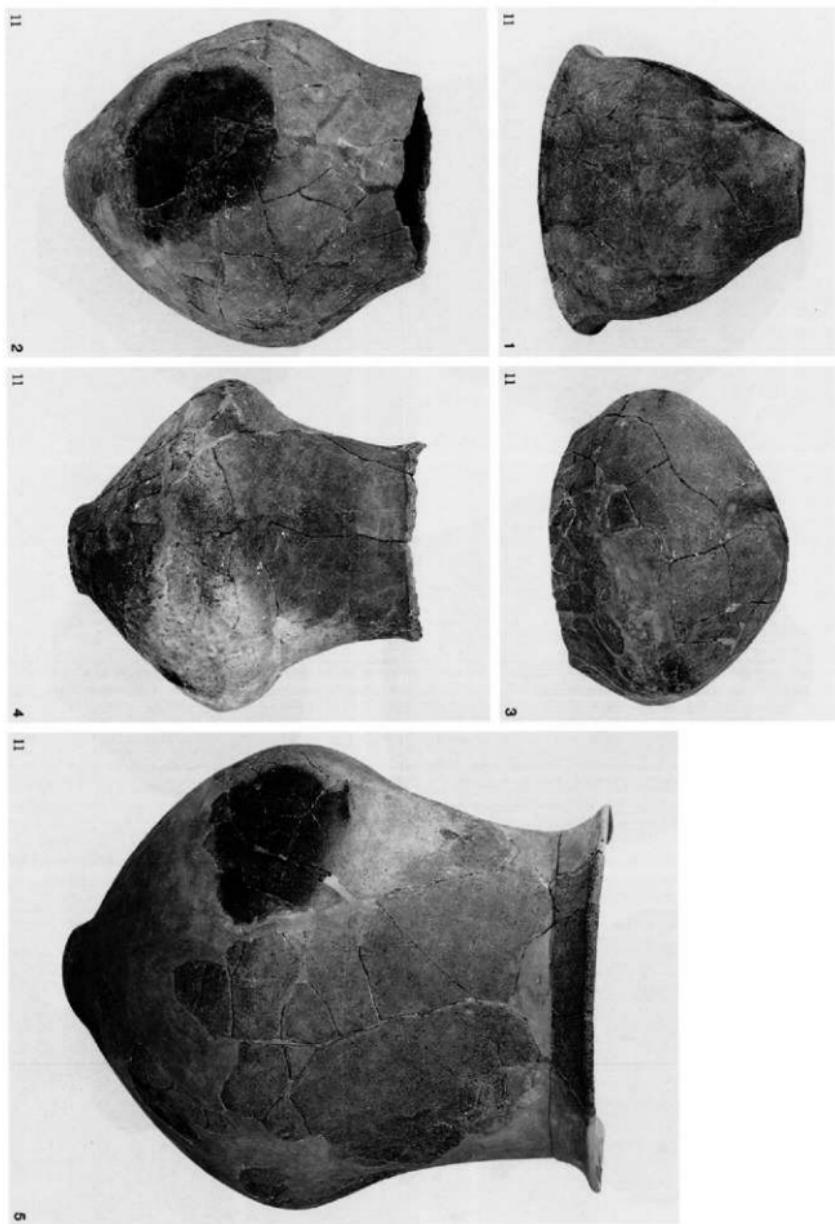
(2) 6号甕棺下甕

(6) 9号甕棺下甕

(3) 7号甕棺上甕

(7) 9号甕棺上甕

(4) 7号甕棺下甕



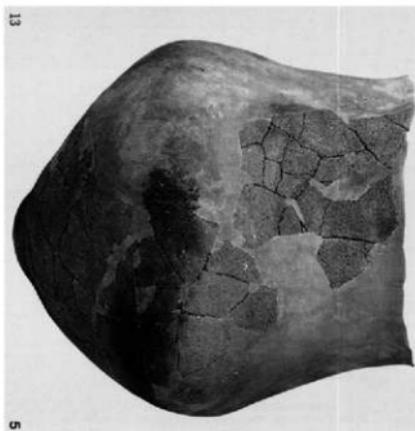
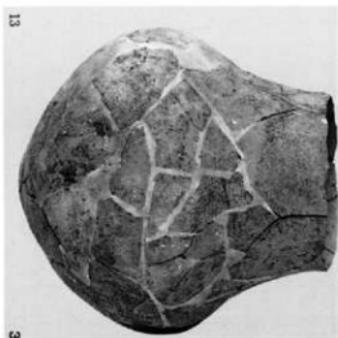
(1) 11号甕棺上甕

(4) 14号甕棺下甕

(2) 11号甕棺下甕

(5) 12号甕棺

(3) 13号甕棺上甕

(1) 14号甕棺上甕
(5) 17号甕棺下甕(2) 15号甕棺上甕
(6) 22号甕棺上甕(3) 15号甕棺下甕
(7) 19号甕棺下甕

(4) 16号甕棺下甕

17



17



2

17



1

17



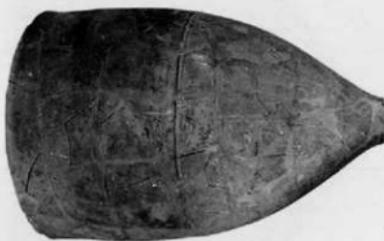
4

19



3

19



6

(1) 23号甕棺上甕

(4) 24号甕棺下甕

(2) 23号甕棺下甕

(5) 25号甕棺上甕

(3) 24号甕棺上甕

(6) 25号甕棺下甕

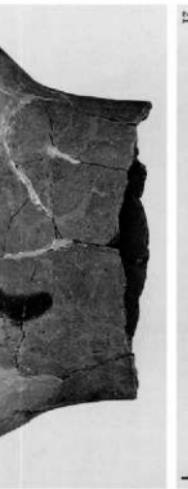
21



2



5



21



1



21



23

3

23



4

21



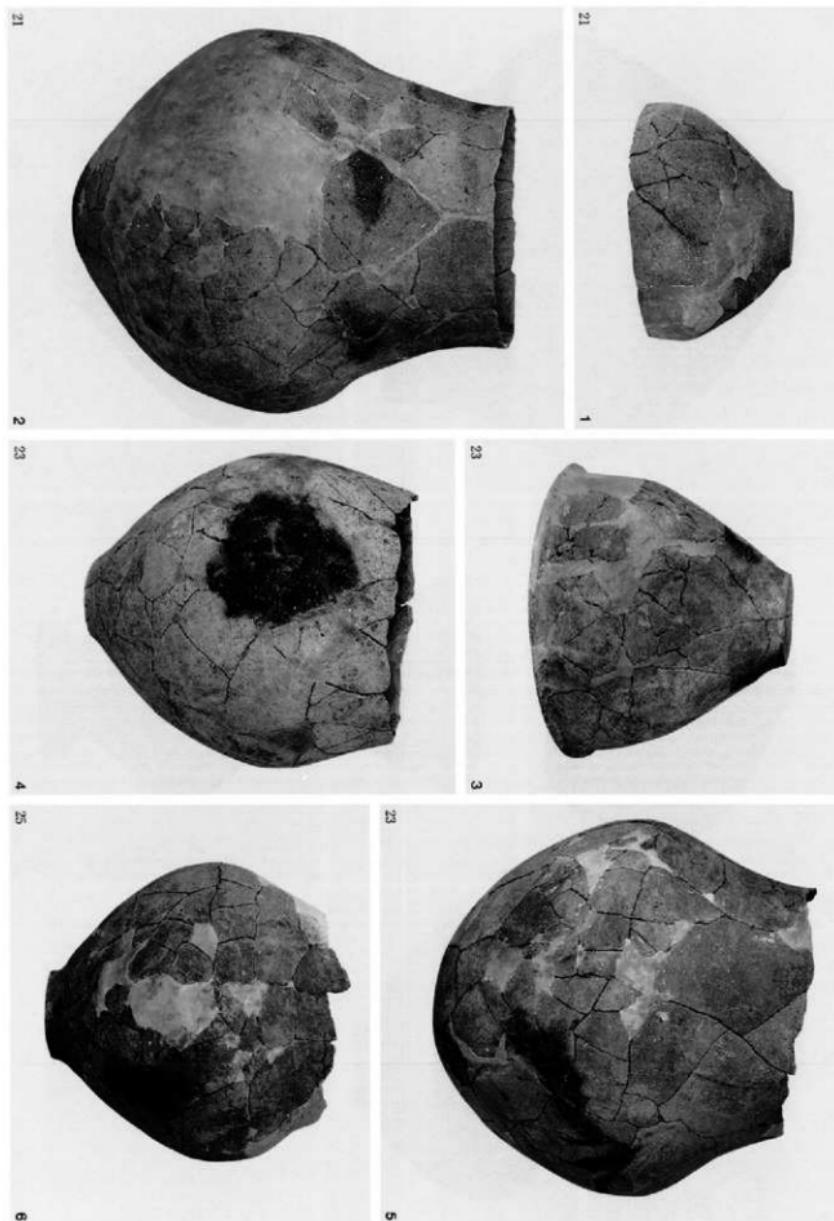
5

(1) 27号甕棺上甕
(5) 29号甕棺下甕

(2) 27号甕棺下甕
(6) 30号甕棺上甕

(3) 27号甕棺副葬甕
(7) 30号甕棺副葬甕

(4) 29号甕棺上甕



(1) 31号夔棺上夔
(4) 32号夔棺下夔

(2) 31号夔棺下夔
(5) 34号夔棺下夔

(3) 32号夔棺上夔
(6) 36号夔棺下夔

23



23



24



24



25



26



26



27

- (1) 33号甕棺上甕 (2) 33号甕棺下甕 (3) 33号甕棺副葬壺 (4) 35号甕棺上甕
 (5) 35号甕棺下甕 (6) 38号甕棺上甕 (7) 38号甕棺下甕

27



27



2



27



25



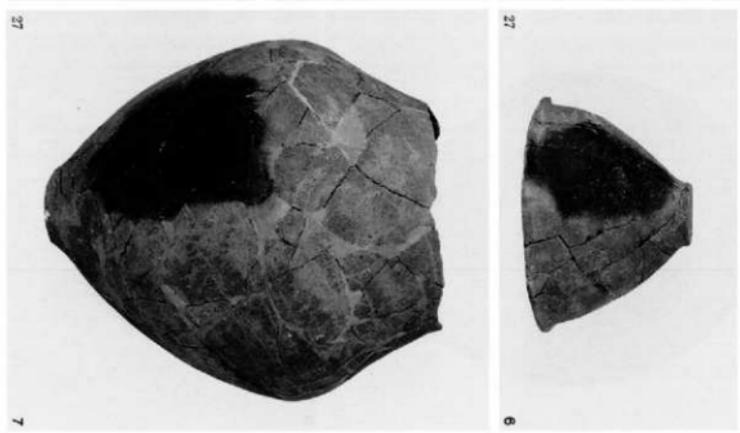
9



27



4



(1) 41号甕棺下甕
(5) 44号甕棺下甕

(2) 40号甕棺
(6) 42号甕棺上甕

(3) 37号甕棺下甕
(7) 42号甕棺下甕

(4) 44号甕棺上甕



38-1



1 38-6

4



38-2



2 38-7

5



38-4



3 38-8

6

(1) 3号木棺墓副葬壺
 (4) 9号木棺墓副葬壺

(2) 3号木棺墓副葬壺
 (5) 11号木棺墓副葬壺

(3) 4号木棺墓副葬壺
 (6) 12号木棺墓副葬壺



38-9



1 39-12

4



39-10



2 39-13

5



39-11



3 39-16

6

(1) 14号木棺墓副葬壺
(4) 18号木棺墓副葬壺

(2) 15号木棺墓副葬壺
(5) 19号木棺墓副葬壺

(3) 17号木棺墓副葬壺
(6) 20号木棺墓副葬壺



39-17



1 40-21

4



40-19



2 41-25

5



40-20



3 41-23

6

(1) 21号木棺墓副葬壺
(4) 28号木棺墓副葬壺(2) 25号木棺墓副葬壺
(5) 34号木棺墓副葬壺(3) 26号木棺墓副葬壺
(6) 34号木棺墓副葬壺





(1) a区東側（東から）



(2) b区東側（東から）



(3) a区西側（西から）



(4) a区（東から）



(5) c区（東から）



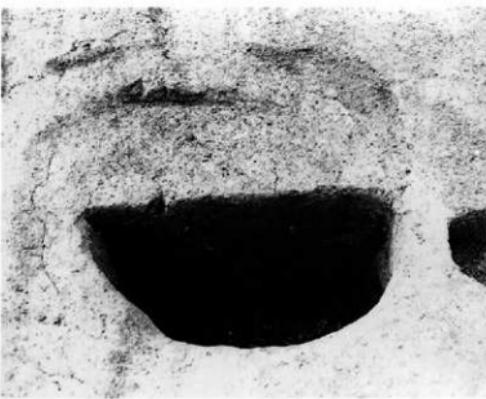
(1) SE01井戸（西から）



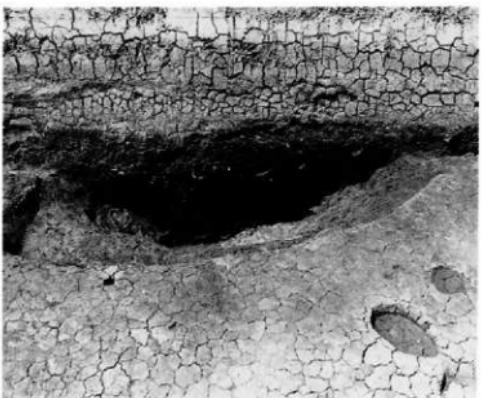
(2) SE02井戸（西から）



(3) SE04井戸（北から）



(4) SE12井戸（南から）



(5) SK21土壤（南東から）



(6) SK23土壤（東から）



(1) SK10土壤（西から）



(2) Pit06土壤（南西から）



(3) Pit17柱穴（北西から）



(4) SE14井戸（南から）

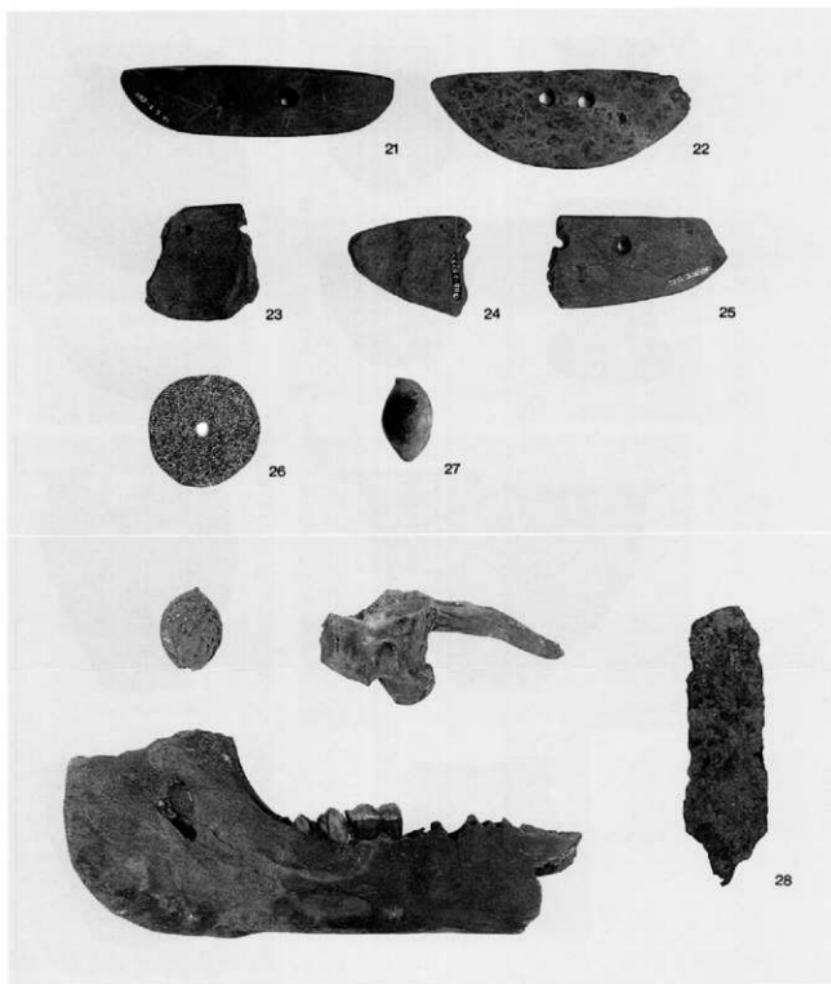


SE01 · 02出土土器



下月限B第3次調査 SE02 (11~15) SE04 (16・17)

SK03 (18) Pit06 (19) SK10 (20) 出土土器



下月限B第3次調査 出土石製品・土製品・鉄製品・自然遺物

下月限C遺跡 I 区



(1) 西から



(2) 東から

下月限C遺跡II区



(1) 西から



(2) 東から

下月限C遺跡III区





SD-02 (南から)

集落（弥生時代後期）以前に存在した溝状遺構（弥生時代中期）

左のSD-01に、木器20005の出土状況もみられる

板付遺跡調査区



(1) 東半（西から）
台風 7 号の影響で崩落



(2) 西半（西から）

板付遺跡
出土遺物
(いずれも旧河川
の粗砂層より)



2



1

下月隈天神森遺跡III

福岡市埋蔵文化財調査報告書第457集

1996年(平成8年)3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号
(092)711-4667

印 刷 大野印刷株式会社
福岡市博多区桜田2丁目2番65号
(092)414-1515

